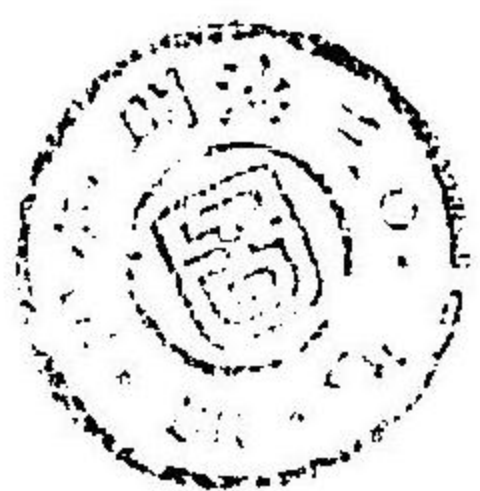


鐵腳岩本千綱著



暹羅老
搦安南
三國探檢實記

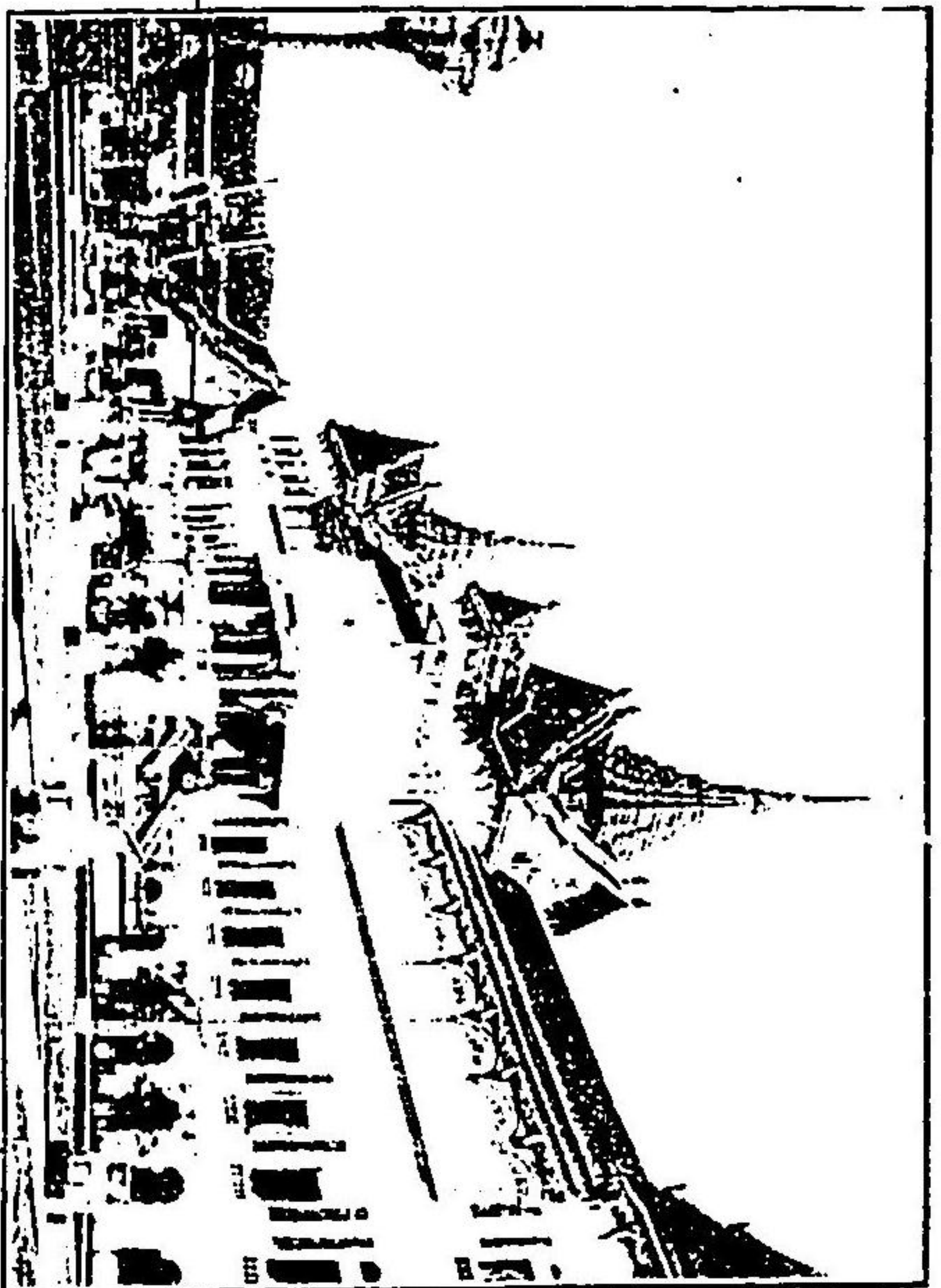
東京博文館藏版



岩者本千綱老羅安南三國探拾の中服装

小川一眞製

吐 河 南 羅 泥



不 隆 王 國 羅 泥

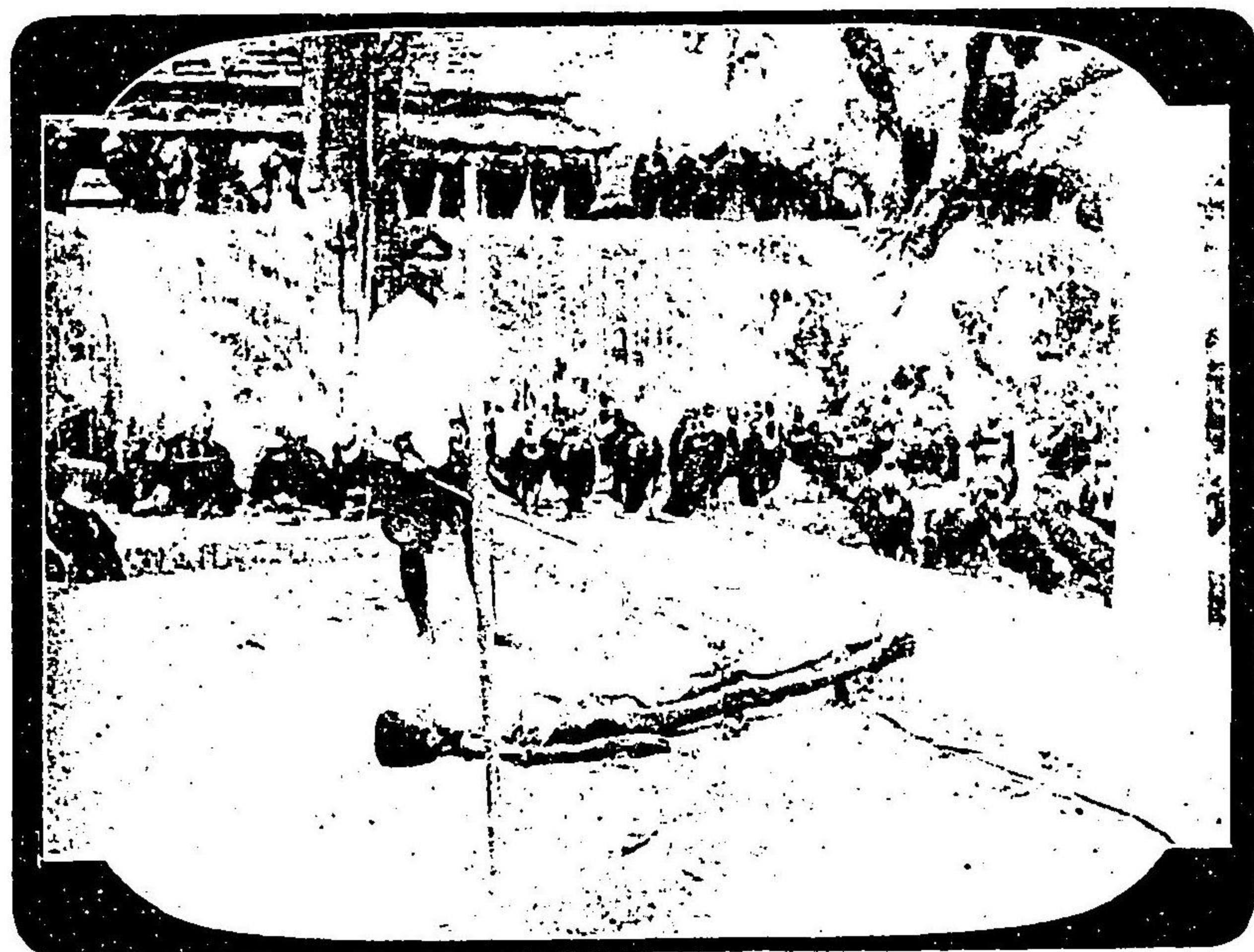


人 美 俗 風 羅 暹 人 藝



人 婦 流 上
家 一 の 人 羅 暹

入 婦 の 民 土 俗 風 羅 暹



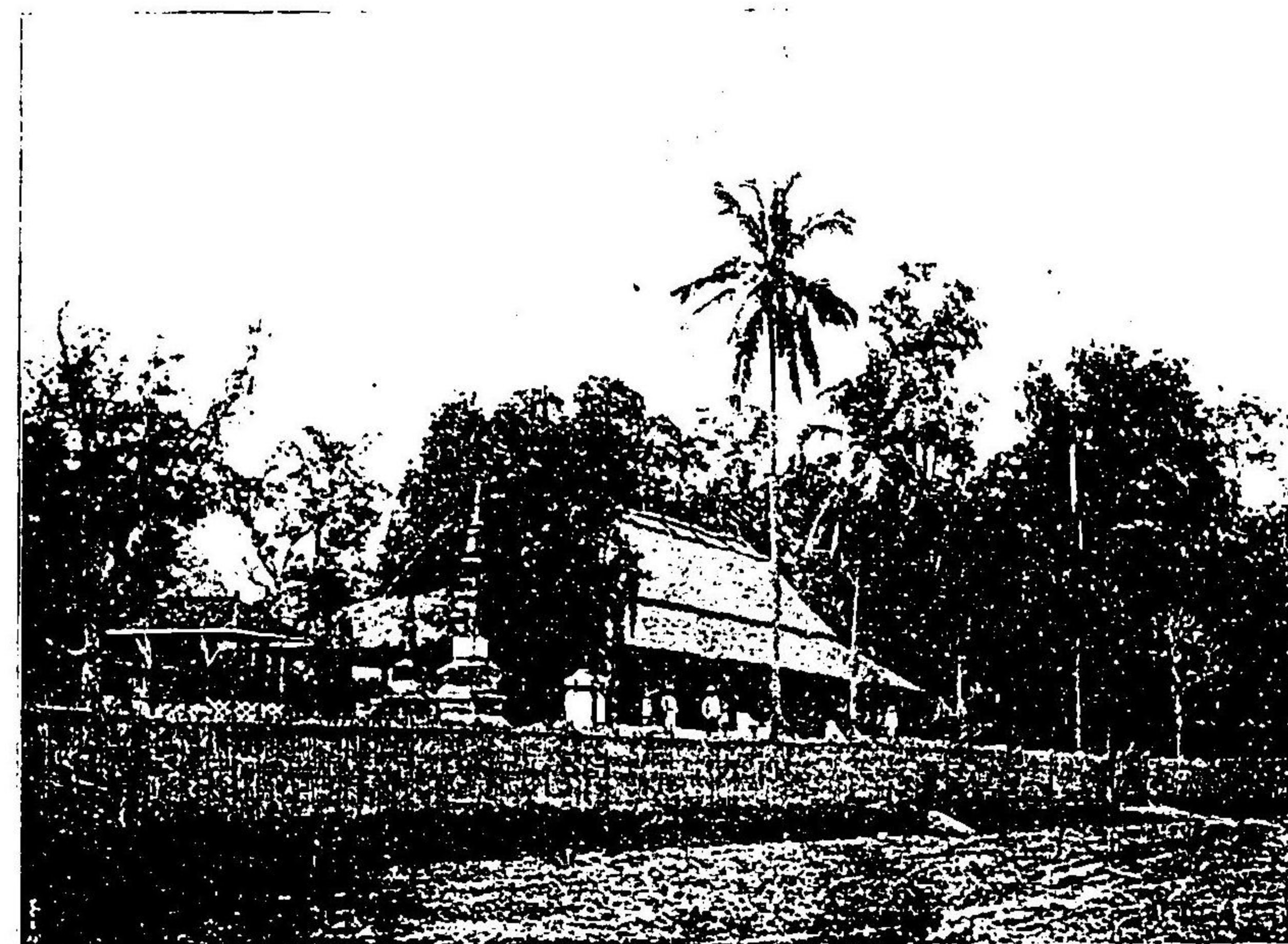
むしま隊に鳥てし棄道を屍死の囚罪

す用使を牛水 俗風羅遊



る 駝 に 糸 人 旅

府シバラケンア。在トマトツ院寺等一第國過老



邸官督總シバラケンア。府首國同

裝服南安の人婦本日府内河京真佛在

人 婦 國 錫 老



人夫スク1ウシマ人佛道來錫支府督總國錫老 寺跡足尊釋府シバラゾシアル國錫老

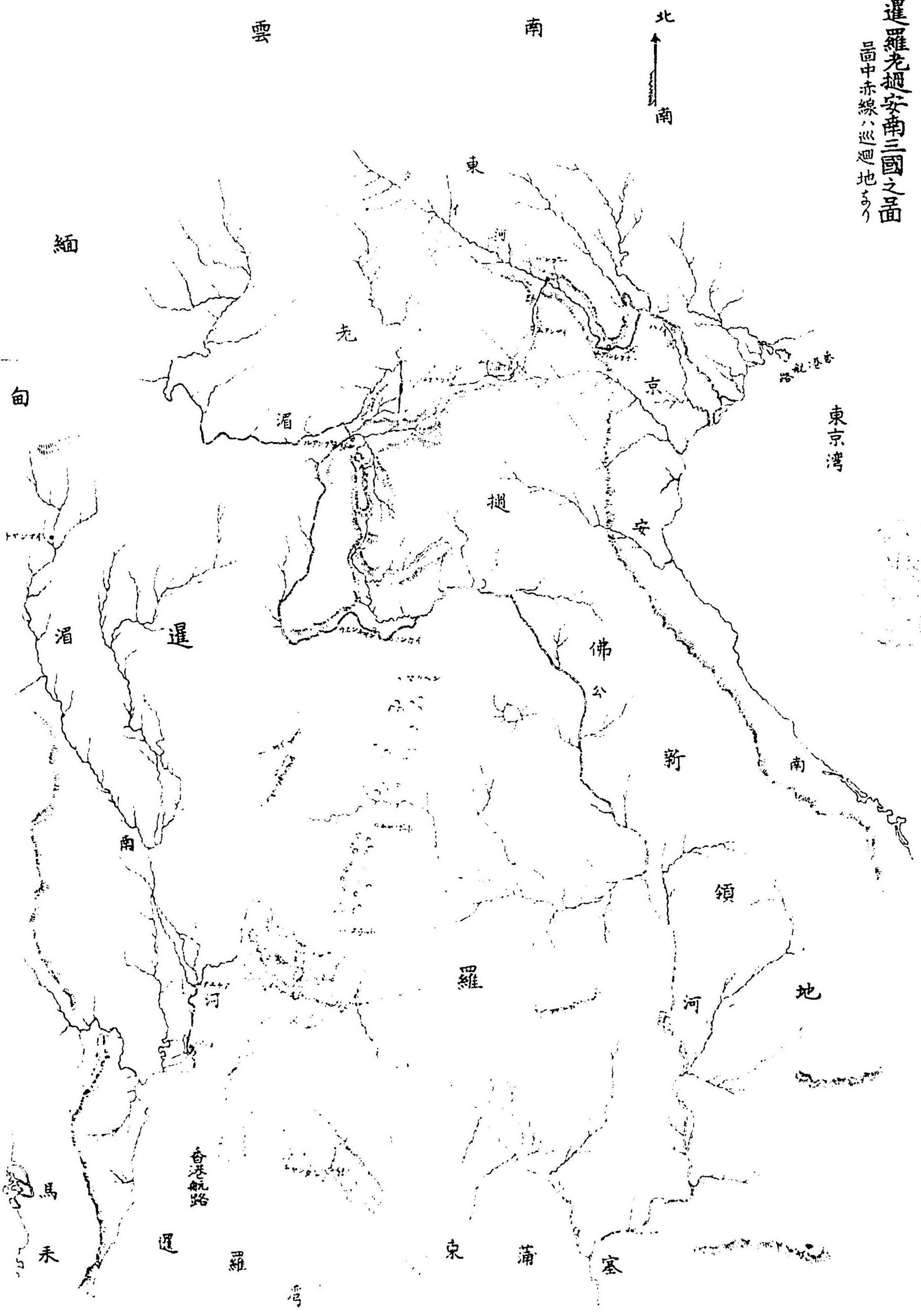
安南のイソヤの児童



イソヤの道路

暹羅老撾安南三國之圖
圖中赤線八巡迴地

北
↑
南



雲 南

東

光

湄

京

東京灣

撾

安

佛公

新

南

領

羅

河

地

會漢航路

馬

未

暹

羅

灣

東

蒲

塞

暹羅老三國探檢實記

鏡脚 岩本千綱 著

緒

緒言

言

(一)

余は明治廿九年十二月廿日山本銀介氏と俱に暹羅國磐谷府を發し翌三十年四月九日安南國東京河内府に出でたり此行通過せしは暹羅老撾安南三國跋渉せし山河は無慮二千二百七哩爲めに一百十一日の子を費しぬ

由來此地方は日本人の足跡未だ到らざるのみならず歐洲人の稀に旅行する者あるも數十人の護衛兵を随へ天幕糧食其他の日用品を携帶するを以て例とせり蓋し猛獸毒蛇の害は言を待たず群盜晝出で人を殺し時に森林惡熱瘴癘を極め命を殞するもの十中八九なるを常とすれば勢ひ之れが防禦法を講せざる可からざればなり而して翻つて余等が此難境苦域を通過せし情態如何を願れば身に寸鐵を帶ひず囊に一錢を貯へず純然たる二個の乞食坊主に過ぎざりし謂ふに世人は此

行を評して或は無謀なりと笑ひ或は山脚なりと嘲るものあらん然れ共今日に於て余は之を辯ずるの必要を見ず只だ茲に聊か此行を想ひ起せし頗末を述ん

余は原と海南土佐の年十六撰を以て藩立海南學校に東京に遊び佛蘭西學を修む翌年陸軍幼年學校に入り士官學校を経て十二年卒業籍を軍人に置く明治廿年北越新發田にあり其十二月余と親交ありし政客某氏保安條例に觸れて都門を追はれ偶々歸て新發田に遊ぶ余一日氏に會し杯盤の間舊情を語る事上官に聞へ物議騷然終に停職を命せられ去て東京に來りしは翌廿一年なり尙此時東方の形勢漸く切迫し志士論客の意見を闘はす者到處に擧々たり而して其言ふ處を聞くに大概坐上の空論にして未だ嘗て實際的の論策を獻するものあるを見ず

余や資性疎放痛く小節に拘泥するを嫌忌し陸軍に在るの日も爲めに風々素行の修らざるを以て友人の忠告を受けし事あり於此乎天賦の性は余を驅て東洋諸邦の漫遊を思ひたしめ而して輿地圖は先づ余に暹羅國を指示せり乃ち斷然官を辭し東奔西馳同感の士を求るも不幸にして其志を得ず終に單獨之に従事するの止を得ざるに到れり此れ余が今日の逆境に踏込み四面楚歌聲裡に十ヶ年の星霜

を送りたる失敗史の始なり

左なきだに無資力の余は之が爲め赤貧洗ふが如く負債山積債鬼門に迫り又た如何ともする能はず於是乎終に意を決し辛く十圓の金と下等乗船切符とを懐にし單身垢衣新嘉坡に向ひ神戸港を發せしは實に明治廿五年八月なりし

新嘉坡に止る數日囊中又た鏹一文を殘さず衣帽を賣りて終に六圓を得たり其暹羅國首府碧谷に上陸せし時は只だ垢染みたる洋衣を纏ひたるのみにて戴くに帽なく歩むに杳なく囊底亦漸く五十錢を殘すのみなりし

居る數月幸に在留日本人と暹羅文相農相等の厚志により翌廿六年二月を以て歸朝し始めて朝野有力者に向て暹羅の形勢日々に切迫せる實況を説き我國の東方策上之を對岸の火災視すべからざるを談論せしも概ね冷笑を以て迎へられ甚しきは山脚なり詐偽師なりとの酷評を受けるに到れり

然るに前田正名氏は余が微衷を憐み其厚志により幾多の商品見本を携へ再び渡暹の計畫を爲すに到り途次神戸にありて尙ほ見本を集む時に七月三十日飛報は余が耳朶を打てり曰く暹佛間の和議破れ佛艦三艘湄南河口の砲臺を陥れ遂に碧

谷に進入せりと余之を聞き驟然起て行李を修め朋友に告げず親戚に協らす翌日出帆の佛船に乗じ神戸港を抜船し孤劍復た去て暹羅の國難に赴く到れば則ち構和談判將に終らむとするの時なり仍て皇族大臣等を訪ひ來意を通じて大に厚遇を受け數月にして歸朝更に殖民通商の計畫を爲せり蓋し暹羅農相等の勸る處にして如此事業は余が短慮にして到底自ら其衝に當り成効の無覺束を知れ共如何せん時機未だ熟せざるか有力にして經驗に富めるもの進んで之に従事するものなきを以て余は成算を期せず始めより一身を失敗の犠牲に供する覺悟にて事此に従ひ以て適任者の出るを待ちしなり

廿七年十二月農夫三十名を率ひ神戸港を發す先是余が金圓を保管せしめたるもの竊に之を費消せしを以て香港迄の運賃を支拂ひ殘金纒に九圓を懐にして途に上れり蓋し香港よりの運賃は同處に於て調達の見込あり万一手違ひとなる時は千綱の血と肉とを抵となし農夫は恙なく磐谷に送らんと決心したればなり時に天尙ほ余を棄ず香港に於て暹羅農相に邂逅し就て八百金を借り一行安全に磐谷に達するを得たり

緒

言

翌廿八年農相より金數千圓を借り殖民及び通商の要務を帯びて歸朝し漸く其目的を達して將に出發せんとするに際し不幸大患に罹り臥病百餘日此間磐谷に在る三十名の農夫は殆んど四方に散亂し通商の計畫亦た隨て破壊せり

廿九年余は日暹兩國間の通商條約締結及び磐谷府へ帝國領事館設置の事に與り聊か其目的を達したり

同年東京の某々氏等暹羅國と貿易を開かんとし余をして其事に與らしむ仍て余は東道主人となり主任者某氏と共に磐谷に到る事成るに垂んとして余は某氏等との間に意見の衝突を來し其結果終に相互の關係を絶つに到り隨て計畫亦た敗る

於是か靜思黙考爾らく從來余が爲し來りしものは毎に其長所を棄て、短所にのみ走りしを以て屢々企て屢々敗れ事終に此に到る之れ豫め期する所にして又た誰をか恨みひに余が所爲の方向を變するに坐するのみ眼を放てば今や東方の形勢益々切迫し來り就中暹羅の國歩日々艱難に陥る而して此の國の存亡は東方の大勢に關する所實に勘からず然れども未だ一人の實踐上之に對する方策を講

するものあるを聞かず余は素より熟知す殖民の事業商業の計畫は疎放余が如き者の能く爲す所にあらず加かず將來余は得意の點に向て運動せんにはと心終に此に決し先づ進んで暹羅の内に入り此國に重大なる關係ある北方佛蘭西新殖民地老嫗を跋躡し轉じて東方安南東京に向ひ到る所の人情風俗地理宗教其他萬般の實況を視察し一は以て自ら資すると共に同感者の參考に供する所らありと胸中の畫策已に成れども只だ之に要する資金の出所なきに苦しむしが百方熟慮の末終に意を決して湄南河畔のバンケラ寺に投じ髮を剃て僧と成る蓋し余が今回跋躡せんとする地方の人民は何れも大に佛教を尊信し僧侶を遇する甚だ厚く苟も僧籍に身を投ずるものは扨鉢によつて旅行を爲し且つ盜賊等の危害を避るを得る事を知ればなり

同行者山本銀介氏は名古屋の人明治廿年始めて暹羅國に遊び同國貴族學校に入り専ら文學言語を學ぶ方今日本人中暹羅の人情風俗に通曉し其言語に習熟するもの蓋し氏を以て第一となす氏會々余が遠征の企あるを聞き進んで其行を俱にせんとす蓋し氏は日本東京に在るの日榎本子爵北澤正誠氏等より高岳法親王の

御遺跡搜索の依託を受けたる事あれば其事跡を知るの便を得んとしたるものにして余亦た日本臣民の本分として相共に極力搜索に従事する事を約し氏は余と

緒

言

(七)

余は北進の途に上るに先づ余が第一の恩人たる農商務大臣陸軍中將スリサクヂーモントリ侯に問ふに此行に對する侯の意見を以てす蓋し侯は嘗て老嫗の土寇を征し五ヶ年間該地方の各所に轉戦し頗る其地理風俗等を詳知すると余が從來暹羅に於て爲せし仕事は悉く侯の指教を乞ひしを以てなり然るに侯は大に此舉を賛し懇切に指導する處ありしが又た行路の危難を慮て日ふ此の道中たるや數十人の護衛と萬般の準備とを整へて行くにあらざれば種々の危険を脱れ難し然るに今や足下等は身に寸鐵を帯びず同行縦に二人を以て此途に上らむとす其危険固より知るべきなり恐らくは足下等未だ暹羅國境を超へざるの前に於て命を殞すに到らん乍去足下等強て之を爲んと欲すれば文部大臣寺院局長バスカラウチングス侯に乞ひ沿道の各寺院に告示書を發せしめ行途の便を計るを上策とす

余等謹て其教に従ひ去て寺院局長バ侯を訪ひ備さに語るに余等が希望を以

てす侯曰く余は能く足下等を知るものにして又た其舉を賛す然りと雖も僧侶として旅行するには一通りの讀經儀式位は知らざる可からず否らざれば余は寺院局長の職務上告示書を出し難し若し是非共足下等の志を遂げたくは幸に余に屬する寺院あれば三四ヶ月間に滞在し僧務を修めて然る后出發さるゝ方得策ならむと余等此に到て頗る困却せしも侯の性質は兼て知る所にして懇請の到底徒勞に屬するは明なれば心竊に決する所あり陽に諾して其塲を去り翌二十日一封の書を侯に殘し突然磐谷府を發足し此に千里遠征の途を開けり

余等磐谷を發足するに際し行李として携帶せしは
 鐵鉢 一個 毛布 一枚 蝙蝠傘 一本 キニーネコロタエン 各一
 瓶 寶丹 一個 磁針器 一個 地圖 一葉 及び日記用の紙筆墨

のみ
 余は暹羅に往復すると前後十回而して今回の旅行を以て敢て満足するものにあらず秋風馬肥へ脾肉亦た生ずるに到れば更に去て西南の天に向ふは今より豫め期する所るなり

余は素より衰貶毀譽を度外に置くものなり余が眼中事の成敗を見ず只だ己れの爲んと欲する所を爲すのみ失敗に始まつて失敗に終る亦た人世逆流者の一快事ならむか

發程

明治二十九年十二月二十日尙明放れぬ東雲とき暹羅國磐谷府王城の西なる涓南河畔に稍立して熱帯地の朝風涼しども感せず立置むる河面の霧を破りて下し來る曉嵐に何となく落付兼たる顔色を洗はせ下流の方打眺めて物待顔に嗚き合へる二僧あり兩個とも言ひ合せたる如く香染の法衣を身に纏ひ我國の二升炊きと呼へる釜の縁取りたる程の大きさある鐵鉢と薄褐色の毛布にて包める怪けなる物を振分の小荷物に仕立サモ重たげに之を左肩に打掛け右の手に色の褪めたる毛襦子張の洋傘を提けたる態の如何にも不似合なる旅装なれば朝穠きする土人等の最と不思議相なる面持して風評とりく振り返りく見て行過るもの少からず折しも一艘の小蒸氣船幽靜なる曉霧を破り森々水を蹴立し進み來れり

る兩僧は手招もて船を呼ひ其岸に寄添ふを俟や俟すや輪船の水に遇へるが如く身を踊らして飛込ぬ其身の輕き樹傳ふ猿に形類れば立働きの遅鈍なる土人等が目には又一驚を喫せしめたりソモ此兩僧を誰とかなす鐵脚坊三無坊とは世を忍ぶ假の名實は大日本帝國の臣民にして多年對暹策に浮身を塞しつゝある岩本千綱山本銀介の兩人なりき

兩個の冒險的遠征僧を載せたる小蒸汽船アドミラル號は船首を北に汽笛一聲全速力を以て湄南河を溯れり此行を果さざれば生て再び故舊に面を合せざる決心を以て啓行せる二僧なれば未練の念は微塵もなければ有繫數年間住みなれし第二の故郷とも云ふべき磐谷を離るとの何となく憂れはしく坊主頭の後髪引かれん様なきも衣の裾位は引かるゝ心地し甲板に立ちて遙に府城を眺むれば市街は何時しか立登る淡煙幾處の間に隠れ耳慣れたる梵鐘の響さへ微かに餘音を送るに過ぎれば不敵の二僧も人知れず法衣の袖を濕したり

暹羅國は東西に二大河あり東を湄公と稱し西を湄南と云ふ(湄公のとは後に詳なり)湄南源を北方老樹に發し蜿蜒五百哩數百の支流を收容し漸く南するに従

て漸く大に舊都アユチア首府磐谷等を貫通して南暹羅灣に入る河口のバクナ市が我が横濱港の如き繁華なる一商港となる蓋し遠きにあらざるべし川幅の廣狹川底の淺深は素より同一ならざるも舊都アユチア迄は其幅廣き處は二百間餘狭きも八九十間に下らず雨候増水の時は五六百噸の砲艦を進航し得べく兩岸は熱帶地方の常として別に堤防の設けなく降雨の時は言ふを俟たず自然の水流にも崩れ落ちて其川幅の廣くなる程深さを減じ幾百年後は全然河形を一變せんとする有様なり岸上には鬱蒼たる樹林處々に散在し萱葺きの破れ家其間に隠顯して風光頗る愛すべきものあり磐谷よりアユチアに至る水路約八十餘哩船賃上等は不定下等一人三十二錢

二僧と土人五十五名とを乗せたる無心のアドミラルは途中四五ヶ處にて船客を昇降せしめ午後四時過ぎ舊都アユチアに碇聚して解は乗客をマール村に送りたり

アユチアは暹羅の舊都にして今を距る二百六七十年前彼の日出國の偉人山田長政が英名を當國に轟かせし頃日本人の此地に住せしもの千餘人に超へしと

云ひ傳へり日本村の舊跡はマール村を距る約二三哩にありて荆棘に繁茂し狐狸得意顔に奔飛せり大和民族たるもの誰か一掬懐古の涙なからんや鐵脚坊往年暹羅農商務大臣陸軍中將スリサクデーモントリ侯に隨ひ此地に遊ふや侯の船中に泊して坊の上陸を喜ばざるに拘はらず鐵脚は強て上陸の許を得一夜の露臥を此舊跡に試みたるにあり

二坊は遙に日本村の舊跡に向ひて長政以下の英靈を拜し心竊に此の行の安全ならんとを祈念しつゝコラット鐵道線路を東方に向ひ此に念々徒歩旅行の序幕を開けり左右に茫漠たる水田を眺め遠來の珍客を訝氣に見遣る水牛に送られて直行矢の如く然も凸凹多き鐵道を進み行け共く満目同景愁はんに家なく道を問はんに人に出逢はず日は西山に暮きて舊曆十五夜の月山の端を離れ涼風面を吹て爽快言はん方なきも千里遠征の途に上りし初日に於て前途を想ふ身の中々に案じられ配處の人のそれならでさし登る月もそよ吹く風も何の面白き感の起らん夢路を辿る思ひにて足に托せて只管鐵路を進みしが腹は減る足は痛む二坊互に一語を交るゝへ懶きに至りたれば塲處撰はず路傍に臥坐し誰か發言者なりし

かは覺へね共初日より斯く疲勞を感じては雲山萬里の前途想像へし今宵は先づ此處に露宿の初舞臺を開き緩々談合を爲す方宜からんと鐵鉢の殘食を取出して僅に儀式的の夕餐を濟し線上に毛布を布きて法衣に夜露を洩き名詮自稱の枕木を枕として過去未來を語らひつゝ睡魔に驅られて華胥に入りしは午後十一時過にもありしならんか此日炎熱甚しからず想ふに華氏の八十度前後なりしならんマール村より此處まで八哩餘

馨谷コラット間の鐵道は數年前より其布設に着手せしも請負者たる英國人某が唯自家目前の利を計り一時誤魔化しの築造を爲すに過ぎざれば隨て其損所も多く結果終に曲直を法廷に争ふに至りしが彼狡徒は之を奇貨とし自ら倫勳に赴き辯明する處あるべしと揚言し殆ど工事を中止して英國に歸り今に歸還せずと云ふ此鐵道は目下暹羅國の一問題として同國に於ける内外有識者の着眼する處となり其成否は將來の政略商略に影響を及ぼす事寡からざれば坊は殊更に既成未成の本線路を踏査したりしなり馨谷よりコラットに至る約二百哩の短距離に比較上露宿の多かりしも之れが爲なり此鐵道に關する見聞の詳

細はコラツト府の章に詳述すべし
 同二十一日晴 水牛の咆る聲に假寐の夢を破られ頭を掻れば日は早や三竿の上
 にありて水牛を逐ふ牧童農夫の鐵道線路を往復するもの數人ありたり此邊の土
 人本道の屈曲迂回せるを嫌ひ多くは鐵道線を通りせり尤も深車の通行は一週に
 一回若くは二回徐々たる貨車の往復を爲すに過ぎざれば鐵道線を通り路に利用
 するも聊か危険の憂なし扱て二僧は露宿の床を離れたれども手洗ふに水なく朝
 餉するに飯なければ鐵鉢の白米を炊き立て、菜なき朝餉を爲さんより暫く空腹
 を忍びて人家ある方に行き托鉢を爲すの勝れるに若かすと荷物を肩に起ち上り
 しか磐谷にありては馬車の力を借りず半里と徒歩せしとなき二僧の空腹と徒歩
 を忍び剩さへ一夜を露天に明したれば身軀痛く疲勞を覺へ一步を進むるさへ苦
 痛を感じる程なりしも元來強情我慢の二坊なれば個許りの事に弱りては到底素
 志を貫き難しと互に勵し勵まされつ漸く鐵道を東北に向ひ進みし姿は我ながら
 憐れを覺へたり

九時頃ブラケア村に着す人家三四軒停車場あり坊等始めて蘇生の思を爲し先つ

朝餉の料に有附んと愈々托鉢を思ひ立しも人に向て食を請ひたる經驗なき俄坊
 主の悲さ何分に乞食の勝手に暗く極り惡さの限りなければ二坊互に其實行を讓
 り三無は鐵脚に鐵脚は三無にイヤ君は名僧らしければ先つ第一に試み給へイヤ
 君は暹羅語の名人なれば人を感せしむるの妙あらんと躊躇遠先陣の譲り合ひ
 は何時果つべきとも見へざりし折柄天の助けか佛の恵か東の方より一老叟の荷
 物を肩に來掛りしあり坊等を見るや忽ち荷物を路傍に卸し躊躇三拜し扱て言ふ
 様チヨクン(貴人に對する尊稱)何れに御出あるか朝餉は既に仕給ひしかと有情的
 の問詞に飛び立つ胸を先つ押さへサモ鷹揚に我々はコラツト府に迄行くものに
 て食事は未だ仕らすと云へば老叟頷きて然らば恐れながら此品を供養し參らせ
 ん決して私の手を附けたるものにあらずと荷の底より辨當取り出し一塊の飯を
 捧けて坊等の前に禮拜せり殆ど饑餓に迫らんとしたる坊等の如何に辭退する暇
 やあらん最と快氣に受け納めければ老叟の喜は一方ならず更に三拜九拜して西
 の方へと去り行けり饑て食を撰ばざる二僧は路傍の芝生に腰を据へ老叟に恵ま
 れたる飯を山海の珍味と舌打鳴らし又もや東北に向ひて歩みを續けたり正午

頃一構の洋風家屋を見る思ふに鐵道掛なる洋人の住居ならんか
此邊總て森林田畑にしてまた一軒の人家を見ず鐵道線路は遙に村落の南方を
馳するを以て人家は孰れも三哩乃至一哩餘の北方に點せり

此日も亦た行暮れて寺院もなく人家も見當らざれば又候道傍の畑中に露宿を定
め石を集めて竈を造り枯枝を拾ふて薪となし携へ持てる鐵葉製の小鍋を取出し
て飯とも粥とも分らざるものを拵へ鹽氣なしの夕餐を喫し了れり里程大凡十一
哩

二十日晴 夜來の大風に夢穩かならず味爽起て行李を纏め露宿地を發して例
により鐵道線路を辿り午前十一時頃ベトリナ驛に達す此處は人家七八十戸あり
素より粗糲を極めたる茅屋なれ共暹羅の内地に取ては先づ中等の村落と云ふへ
きか扱當驛には前日より國王殿下の滞在あらせらるゝとて俄か作りの假宮殿あ
り扈從の皇族大臣等は多く寺院に宿泊せり兵士の銃を擔て揚々大道を濶歩する
ものあれば下等官吏の三々伍々急造飲食店に就て例の手握みの「キンカウ」(喫飯)を
爲すありて小村落の混雜名狀すべからず二坊は朝來未だ食事せず空腹の堪へ難

發

程

さに彌次喜多の故智を演せんとせしと思ひ直せば寺院局長の許可を得ず磐谷を
飛び出したるとの後めたく万一外務大臣を始め面識の皇族貴族達に邂逅せば事
体面倒となりて磐谷引戻の辱めを蒙るとなしとも云ふ可からず兎に角人目に
掛らぬ一仕事を爲すこそ肝要なれど照る道の彼方に家根破れ軒傾ける一軒の草
屋ありて七十許りの老嫗と十七八の娘が陸氣に何か頻りに語合ひ居たり三無之
を見るや喜色滿面に溢れシメタ先生安心し給へ僕が懸河の辯を振ひ見事食事に
あり附くべし戸口に立ち添ひ聲哀れに同行の師の坊昨夜より病氣に罹り只さへ
苦しき旅の空に一層難澁を重ねるなり其上未だ朝餉をも喫せざればアワレ一飯
の齋食に預りたしとサモ殊勝氣に述べ立つるを聞く老嫗は痛く驚き忽ち戸外に
走り出て禮拜了りて戸内に請じ何か娘に耳語しが間もなく盆に餅砂糖鹽魚バナ
ハの四品を堆く盛りて捧げ出で頻りに二坊に勸むる様の暹羅人が僧侶に對する
常態とは云へ其質朴愛すべきものあり素と三無の方便にて病人と觸れ込まれた
る鐵脚の身の悲しさ目前に斯る美味を見ながらも無氣に食る譯に行かず三無亦
た師を差置て妄りに箸否手を附るとのならざれば鳴く腹虫を叱り付てソコく

に食事を終り折角の御供養を殘し置も本意ならずと誤魔化し半分残物を鐵鉢に
 押込み暇を告げて早々此家を立出たり戶外に出で、數十歩は流石病僧の歩みを
 學びしも何時か何人の目に觸るやも圖られずと忽ち膝栗毛に一鞭を加へ東に向
 て歩を早め漸く村端の森林に入りし時は思はずホット一息吐けり此にて更に鐵
 鉢を開き残り少なに残食を喫し了り早や發足せんとする一刹那一列車の轟々黒
 煙を吐て飛來するあり樹陰に隠れて窺へば是れなん國王殿下がタツコン村へ巡
 遊さるゝ一行にぞありける熱帯地の事とて割合に大なる車窓は悉く開きあり宮
 内外務の兩大臣其他面識高等官等は首を窓外に突出して四方の景色を眺め居た
 り之を見たる鐵脚坊は三無坊の衣を引き夫れ見玉へ劍呑なたと囁けり腹既に滿
 てり鐵鉢中尙ほ多少の殘物あり況して鹽魚と砂糖とは尙其大半を殘せり坊等心
 丈夫なる察すべきなり去來此の勢にて發足すべしと法衣の裾を高くからげ坦砥
 の如き瀛車道を大聲張り上げ流行唄甚句都々一出任せに且つ怒鳴り且つ行きし
 に偶ま出遇ふ土人等は御經の文句と有難がり路の傍へに蹲居して三拜するも一
 興なりし已にして電柱の影は長く東方の地上に印し晚鴉の歸巢を急ぐ頃となり

しかば例によりて露宿の地を相し露傍の乾田に毛布を敷きて寝ながら鐵鉢の殘
 物に舌鼓せり稍々旅慣れて露宿も憂からず今宵は又幸に空腹にもあらざりしが
 蚊軍俄かに珍客を襲ひ既に彼等の飢腹を醫さんとせり是に於て鐵脚は一世一代
 の智慧を絞り携ふる所の洋傘を開きて頭を其下に入れ覆ふに法衣を以てして急
 造の蚊帳を製せしには我ながら其妙案に驚きたり而して夜半一陣の狂風に三無
 が傘は法衣諸共何れへか奪ひ去られ二坊が周章狼狽して總に暗中に探り得しは
 又此行の一笑話なりし此夜國王殿下はタツコン村よりベトリナ村へ還啓ありた
 り本日里程十二哩位

本日の鐵道線路亦昨日と同じく直行東北に向ひ傾斜なき築道なり左右は八分
 通り水田にして一望千里間ま森林村落を散見するのみ此邊の水田磐谷附近に
 異ならず人情風俗亦大差なし居民農業を勉め朴直なる點は稍々磐谷附近のも
 のに勝れるやの觀あり

二十三日晴 早發途上にて水粥を食し午前八時ケンコイ驛に達す人家五六十停
 車塲は頗る見るべきものあり聞く處によれば他日チヤンマイ(チヤンマイは湄南

河の上流老樹にあり此邊鐵材チークを産するを以て有名なり磐谷より約五百哩鐵道を布設する時は此地より分岐する計畫なりと云ふ夫れかあらぬか停車場の規模は首府磐谷よりも宏大に洋人三四名常に爰に住居せり停車場の側に一軒の水菓子屋あり就て水を求めしに老翁恭しく柄杓に一杯の清水を盛り「バナ」と五六の駄菓子とを添へて供養せり十二時過タツコン村に入る人家三四悉く鐵道係員なる土人の住居なり嘗て日本より渡來せし鐵道工夫中此地に於て死亡せしものある由を聞き居たれば其墓所を訪はんもの一農家を叩きたるに其家婦は非常なる信心家と見え懇切丁寧に坊等を遇し飯を炊き牛肉を焼き玉子を煮る等馳走到らざる處なく坊等は圖らず望外の美食に飽けり而して最と遺憾を極めしは日本人死亡當時の係員不在の爲め終に其埋葬地を知るに由なき一事にて鐵脚乃ち小斧を借受け路傍の大樹を白し錦筆を以て左の數文字を記す

南無日本鐵道工夫之靈頓生菩提

日本行脚僧 鐵脚坊岩本千綱謹誌

皇曆明治二十九年十二月二十三日

書し終りて一掬の冷水を供へ數莖の艸花を手向け以て同胞の幽魂を天外の異域に祭る

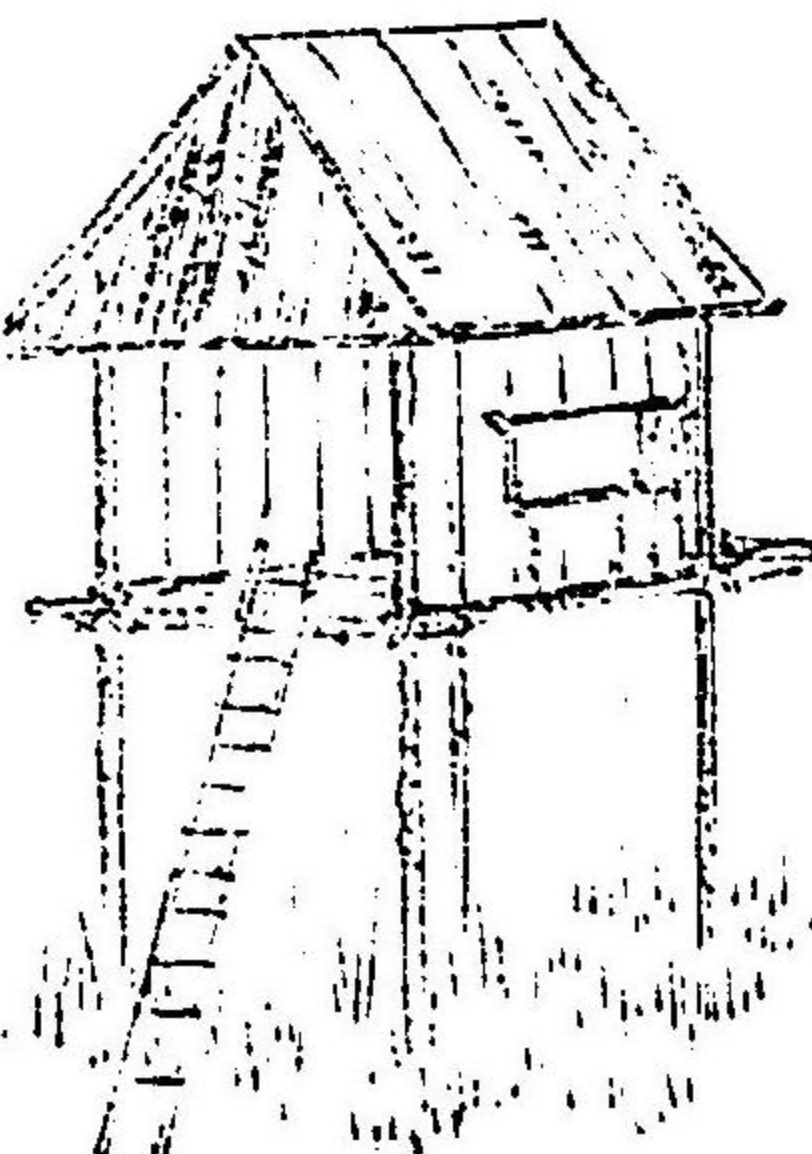
明治二十八年熊本縣下の農夫磐谷に渡航せしもの數人コラツト鐵道の工夫となりタツコン近傍の工事に出張せしに風土の異なるが爲め端なく病死せしものありて骸を此山中に葬りしと鐵脚坊歸朝中にて其詳細を知らず夫より二僧は家婦に向て親切なる待遇を謝し行李を肩に再び鐵道線に出たり磐谷よりケンコイ村に至る地は概ね平坦にして鐵路亦た多くは直線なれどもケンコイよりタツコン村迄は漸く緩なる傾斜をなし所謂爪端き上りにて線路の左右に深林多く又一軒の人家なしタツコンよりは純然たる山中にて鐵道の構造亦た粗惡を極め築道半ば崩壊し甚しき處は枕木左右に傾き軌道著しく凹凸し車輪を這るに頗る危険を覺ゆ且つ處々に岩石を切り開きて路を通せし處あり此邊より以北我國にては見る能はざる異木珍草甚だ多し

タツコン村假停車場あり貨車運轉の終點地より東北に進むと凡そ一時間鐵道線あり右折して小徑に入り軌道の敷設中にて通行を許さず或は溪水を渡り或は峻

坂を上下し僻れたる樹林を辿る凡そ二時間ヘンラツプ村に出づ鐵道掛洋人の家
屋三軒鐵道工夫なる支那人の破れ小家二棟あり二坊はタツコンに於て研究の結
果今夜は此地に一宿するの心組なりしかば先づ洋人の家を訪ひしに生憎不在に
て要領を得ず試に支那人夫の小家に行きて水を乞ひしに其待遇の冷淡なる頗る
無禮を極めたれば失望の餘り寧ろ露宿と思ひしが此邊には虎豹多く往々人を害
するとありとの人夫の言に肝を消し進退此に谷りしに恰もよし行先なるサータ
ケンヤ村に歸るといふ二名の土人に出遇ひしかば天の助と同行を乞ひ珍らしく
も同行四人となりて且つ語り且つ行き或は半成の鐵道線上に出で或は虎豹の通
み棘徑を辿り薄暮漸くサータケンヤンに到着せり磐谷より出で、より第四日同行
土人の家に投じ始めて雨露を凌ぐを得たるもの、前三日は土地平坦にして疲れ
ながら無理の歩行を続けしが此日經過せし處は概ね山路なるが上に屢々溪水を
徒涉せしかば二僧とも足に三四の血腫を生じ脚は痛み肩は腫れ中々の困難を感
したり當家の主人も例に依て懇切なりし併し茶を供するのみにて飯を出さず蓋
し暹羅僧の風習として朝晝二食の外は如何に空腹なるも固形物を口にすることを許

さす二僧の如き三食者は是には殆んど閉口せり通過里程十二哩餘

土人の家屋は頗る粗なるものにて單に雨露を凌ぐに過す此邊總て山中なれば
好次第の良材あるに拘らず壁と床とは竹を以て構造せり



家根は萱茸にして固より天井はなし家屋の全体は木
造にて日本の中二階作りを以て非なるもの階下には
牛豚雞の類を養ふ壁は割竹を編合せ入口の外處々に
大小の窓を開けり床は丸竹を張りて之に薄き筵を敷
き梯を架して昇降の便に供す此家屋を造るの器は只

一挺の手斧にて鉋鐮の如きは其名を知るものだもなしと云ふ

土人の言に依れば此村は戸數八人口六七十なりと又舊都アユチア府より當村に
至る間の鐵道工夫は總計三百七十人ありて内二百人は支那人なりと云へり夜深
くし天地寂寞聞ゆるものは樹梢を渡る夜嵐の音岩に激する奔湍の響客夢を破る
虎豹の吼聲
二・十四日晴 宿の主人は前夜二坊よりの頼みを記憶し朝餉の成るを俟て二坊を

揺起せり此時日は既に前林の梢を離れ居たれば厚く主人の施行を謝しタケヤンを發す此邊朱椽黒椽其他坊等が名を知らぬ數多の樹木に富み鐵道枕木の黒椽を以て製せられたるものあるを見たり十時頃サータケヤン村に入る人家三戸ありモクレックを経て午後一時パーソーに達す一破屋あり電信柱伐出の人夫四五名此に住す就て前途の難易を問ふ彼等曰く此よりは深林にあらざれば幽谷にして猛虎の出入常ならず白晝尙人を害するとあり貴僧等是より進まんとすれば宜しく此に一泊し明朝旅人の集屯するを俟て旅隊を組んで進行するを上策とす其説く所理あるを以て日尙ほ高きに拘はらず此に一宿するとに決したり人夫等は吾が言の容れられたるを喜びし体にて一個は飯を炊き一個は野菜を調理し乾牛肉迄を添へて坊等に供せり

今坊等が憩ふ所の小屋は方二間餘にして人夫の坐臥にも狹隘を告る程なれば到底客僧の臥床に充つるの閑地なし人夫等は早くも此に懸念したるものゝ如く遙か前方に在りて殆ど崩壊せる方十數間の小屋を指し語りけらくアノ小屋は今より四五日前鐵道工夫たる支那人數十人の住居せし所なるが一日彼等の一人フト

發

程

(五二)

名も分らぬ草實を摘み來り之を美として自己も喰ひ人にも勸め頼りに其美味を賞せしが可憐其草實は非常の毒物なりしと見え暫時にして吐血を始め全人數の三分の二は枕を並へて狂ひ斃れ殘るものも亦た健康を害したれば今や西の方へンラップ迄引揚げたり而して個様に多數の人間が變死を遂げし小屋なれば怨魂今に此地を去らす深夜往々鬼哭の耳に感ずるとあり然れ共貴僧等は有徳の知識におはすべければ何の恐れ給ふ處かあらん苦しからずば彼所にて一夜を明させ給へど息をもつかず演し了れり二坊は彼等の率直にして且蒙昧なるを心中に笑ひつゝ快く之を誦ひ扱て其小屋に至り見れば萱葺屋根九分通り吹き放たれ竹製の壁と床とは半ば破損し支那人が狂死の當時布きたると覺しき糞及ひ汚物を拭ひたりと思はるゝ布片所々に散在し慘狀の當時を想像されて餘り快くもあらざりしが人夫等の信する高僧知識を裝ふは此時なりと殊更に落付はらひ小屋の一隅に毛布を敷き破屋を漏れ來る星を見ながら湯沸き家に麻聲を放ちたり里程大

凡十三哩
二十五日晴 鬼哭啾々たりと云ふ破れ小屋は飽まで二僧の安眠を譏り異狀なく

二十五日の曉を迎へしめたり二僧は起て朝食を爲し人夫等に前夜の謝辭を述べ直ちに發足せんとせしに彼等は虎害を説くと前日の如く頻りに同行者の來るを俟て啓行せよと勸む坊等は其厚意を知らざるにあらざれ共前途を急ぐ旅の身の左迄て危険を念頭に置くへきにあらざれば彼等の留むる袖をはらひ強て前途に歩を進めり

深山の巖間晝尙ほ暗く沮洳たる狹路山蛭頭上に墮來る折しも風なきに茅茨動き人なきに物音の聞ゆるあり此時二坊は未だ大蟲の前途に横りて坊等を迎ふるあるを知らず前夜の事をも打語らひつゝ進みしに思ひきや今の物音は一大蟲の搖き出たるにて彼は三十間餘を隔て、全身を茅茨の間に隠し前足を揃へて狹路に踏出し頭を斜に擡猛なる雨眼を睜き瞬もせず坊等を睨み居たり其狀を瞥見したる二坊は毛髮悚然倏ち恐怖の念に擊れ暫時は枯木の体を學べり土人の語る處によれば萬一大蟲に出遇ひたる時は毅然立して彼を睨み返し如何なる事情あるも決して背を示し又身を動す可からずと扱て坊等が恐怖爲す處を知らず枯木の如く直立し又餘りの恐ろしさに彼を凝視せる姿の自然に土人の所謂立返睨に

適したるものか凡う二十分時にして彼れ兩足を狹路より引込み徐ろに茅茨を分けて行衛を隠せり此時二坊の喜ひは物に譬へん様はなく始めて懸たる心地して二三十間は後退に歩み早や堪へ兼て終に踵を廻し後振返る暇もなく元と來し方へ遁飛せり大凡半里許りも走たらんと思ふ頃幸に十二三人程伍を爲せる一旅隊に遭遇せるを以て地獄で佛の思をなし備さに目前の危難を語りて坊等も遂に其伍に加はり正午頃バクチョン村に到着せり此村土人の家屋三戸鐵道係洋人の家二棟あり坊等は旅隊と袂を分ち幅三十間餘の谷川を徒涉してコラット府の本街道に出たり是よりは爪先き下りに深林の間を通行し尙ほ深山幽谷に續きたる森林中何時猛獸の害に遇はんも知る可からざれば其夜は米象牙象骨象虎豹皮及び鹿角等を運搬する牛車隊と俱に林中に露宿せり里程大凡十二哩位

二十六日晴 早起曉露を踏て行途に上る此邊水流なし爲めに炊事を爲す能はず空腹の儘正午チャンツー村に入り少量の飯と唐辛の煮菜を得て僅かに飯を醫す此村戸數七就つれも破屋にして乞食小屋と撰はす午後三時頃一溪水の彼岸に登りしに偶ま五人の旅商の東方より來るに會ふ依て前途村落の有無を問ひしに彼

等は曰く此の先の村をシブテンと云ふ然れども豹の巢窟として人の恐るゝ樹林草野を越るに非ざれば該村に達し難く又貴僧等が如何に験足なるも今夜半にあらざれば恐らく到着し難からん若かす此よりチヤンツ一村迄引返し一泊して明早朝出發せられんには二坊此の忠告に逆ふとはあらざるも該村に引返せば前後六七哩の無駄足を爲さるを得ず左れば連昨日の危険を回想すれば又進まんとする勇氣も起らず終に此所に露宿するに決し溪水を汲んで湯を沸し久しふりにて法衣を洗ひ併せて水浴を試みたり里程大凡十三哩餘

二七日晴 水粥を食して何時しかシブテンの原野を過ぎ幅四十間許りなるラツブカー河を徒渉し正午頃三個の人家あるシブテン村に達す路傍の樹下に床机を据へ一老嫗の駄菓子を商ふものあり二坊は立て食を乞ひしに嫗快く坊等を遇し且つ走って近隣へ傳へしものと見へ銘々飯と菜物とを持ち來りて供養せり此邊總て小石交りの黄色砂土にて大に歩行に難みしが漸くライタマーと呼ぶ村落に着けり時に午後四時過ぎなりし乃ち一農家に入り一宿を乞ひしに主人は當惑の体を面に表しお易き事なるが目下當村には天然痘流行し毎戸同病に罹らざるも

のはなく現に吾が二兒も痛く難み居る所なり夫れをも御厭ひなくばどの言に堪所柄撰ばぬ坊達も二の足を踏み六望を懐きし身の萬一感染するともあらば一大事なりと數戸の人家あるに拘はらず近傍の森林に露宿し明日の朝餉は其家より惠まるゝ約束を爲したり然るに質朴正直なる主人は日暮坊等の許に來り病魔攘除の祈禱を懇請して止まされば鐵脚乃ち例の都々一經を唱へ且つ手帳をちぎりて御符を拵ひほふそらの祈禱せよとは困るなり法も知らざる僧にむかひて「何とも解らぬ駄洒落を書き與へければ主人は大に喜ひて去れり此事を傳へ聞き祈禱を乞ひに來りし土人八九人もありしは亦此行の一と茶番なりし

此日の通路は原野又は小山の間にて左右遙に三々伍々人家の散在するを見たり途上日光に焼かれたる黄色の砂土跡を没するに至りしは頗る困難を感じたり此路程約十二哩

廿八日晴 効顯の有無は固より知る所にあらず然れども天然痘の祈禱大に人心を得朝來土人の供物を捧る山の如くなりしかば先ず充分に腹を拵へ殘物は雨坊の鐵鉢に收め幾多の土人に見送られてライタマーを出で十時シキユ一村に入る人家

三百餘人口二千三四百の大村なり村端の一茶店に憩ひて齋食を受く本村の東端に三條の道あり坊等はコラツト府を目的として進むものなるを以て其中央にして最大なる道路を撰び行くと凡そ三時間餘尙ま土人の來るに逢ひ問ふにスノン村への道程を以てす土人訝氣に答へて曰くスノン村は東コラツト府街道の一村なり恐らくは道を誤られしならんと二坊驚て日足を見るに時は是れ午後三時頃なるに人影正に右方に印せり知るべし東方に向はずして北方に進み來りしを是に於て更に五哩以上の道をシキユール村に迄引返し今度は土人の教て最と近道とする鐵道實測線に入り宵暗に二三哩を進行して林中に露宿す通過里程八哩位

此邊村落の居民多くは農を事とし且つ家畜水牛牛馬等の家畜及び家禽を飼養し雞の如きは一羽五六錢牛は八圓乃至二十圓なりと云へり
廿九日晴 前六時林中をいづスノン河は幅百間餘にして假橋あり此候水涸れて徒渉すべし假橋を渡り九時頃スノン村に入る戸數五六十市場あり此日約十三哩を走りて日没前露臥地に着す

三十日晴 味爽露宿地を發し七時過ぎルア村に入る戸數十七八二坊は進で林中第一の富豪と認むる中央の一家に至り托鉢す七八人の男女は出で、坊等を迎へ待遇懇切に且盛饌を饗し供養至らざる處なし彼等は言ふ當家は毎月三十日旅僧に出來得る丈の齋食を供するを以て家例とす此日此家に際會したる二坊の幸運思ふべきなり十一時コラツト府に着し府の入口に於て午餐を爲せり當府は暹羅國北部の一部邑にして地方廳あり警察署あり郵便電信諸局の外佛國領事館等ありて随分繁華の土地なれば漫に途上を彷徨して或は面識ある人に邂逅し而倒なると杯惹起しては取返しならずと袋にペトリチに於て危急の境合を逸回想し二坊熟議の上今は一直線に此府を通過し府外恰好の境處に一夜を明し更に方法を講して徐々府内の實況を視察せんと午後五時頃府の北端を距る二哩餘の林中に入り茲に露宿里程大凡十二哩
坊等が一百十日の冒險旅行中厄難に遭遇せしと一再にして足らず而かも今夜の厄難の如きは其最も大なるものなり請ふ少しく其事實を寫さむ
日は既に没したり殊に今夜は稍々冷氣を感じたるを以て兼て携ふる所の毛布一

杖を土上に敷き二僧相擁して其一杖を被り枕を並べて眠に就けり是より先き二坊が磐谷を逃らせんとするや各々一個の布囊を作りて之に旅行に必要な地圖磁針器旅券藥品及び日誌に要する鉛筆紙類小刀等を收め萬一其一を失ふも他を以て用を辨するの注意を爲し宿泊の時は一夜代りに之を保護すると爲したり扱て當夜は鐵脚保護の當番なりしかば兩囊を合せて一個とし尙ほ手拭を以て右腕に堅縛し之を枕に眠に就きしが晝間の疲勞は次第に二坊を熟睡に導き終に前後も知らず夢路に入れり時に何ものか鐵脚の頭に觸るゝものあり愕然夢覺め星光を借り臥しながら四邊を見ればコハ如何に枕頭二人の大男一は立ち一は蹲りて既に右腕に緊縛したる手拭を解き居たり鐵脚何かは猶豫すべきカモイ(暹羅語の盜賊)の一喝を發すると同時蹶然起て毛布を跳除け身に寸鐵を帯びざる坊は洋傘を執りて雲霞と逃げ出す二賊を目掛け遁しは遣らじと追跡せり舊曆廿五日の闇夜星の光りはなきにあらざれども林中何の効力あらん逃るゝものは地理を諳し茂林を走るに慣たる盜賊なり追ふものは土地不案内の俄坊主なれば到底追着し得べきにあらず三無坊亦跡を追ふて馳け來りしが俄に大聲を上げて岩本君危

發

程

險なりモ一止し給へ彼等は白刃を携へりと叫びたり鐵脚も亦た夙に之に氣付たれども憤怒の餘り責めて一人を捕獲せんとしたりしも想へは暴虎馮河の勇にて万一爲めに負傷を蒙るとあらば夫れこそ詮術なかるべしと此に至て遺憾ながら兩賊を追ひ棄たり

二坊打連れ露宿に歸りし時は弦月僅かに山の端を離れ樹間を漏れ來る月光イト近かに稍々物色の便を得たれば取敢へず被服品の有無を調べしにアナ無慘二坊が杖柱とも頼みてし彼の二布囊は其姿を失へり此時に於る二坊の失望膽は到底筆紙に盡すべきにあらず茫然立て顔見合せ無言に時を移せしが三無坊先づ口を開きアレ程迄に注意せし行李を奪はるゝ様にては最早我々が運の盡きなり去り迎今更磐谷へ引返す譯にも行かざれば吾等の運は天に任せ去來此儘に發足せんと三無の失望は却て彼が勇氣を喚起せしものゝ如くなりし鐵脚沈思良久して曰く君が言理なきにあらず其勇亦感すべし然れども出來得る丈けの手段を盡し万策盡きて後斷乎たる處分を爲す亦た遅きにあらざるべし此行素より生還を期せざるも無謀の死は餘り褒めたるにあらず此場合に在て僕が取らんとする處

の策は夜の明るを待てコラツト府に入り佛國領事館を訪ふて這般の一伍一什を語り地圖を借りて之を寫し又乞ふて必需品を需むるに在り彼若し僕等の請を容れずんば其時は止むを得ず君の言に従ふべし君以て如何とすと三無又別に真案あるにあらざれば終に此説に賛成し談話の中に明治廿九年の末日則ち十二月三十一日の朝を迎へたり

三十一日晴 失望落膽の淵に沈める二坊は朝餉を爲すの暇なく元と來し道へ取て返しコラツト府の西端なる佛國領事館に入りしは午前七時頃なりしが艦で玄關なる受付に對し領事へ面會を求めたるに領事は一昨朝磐谷に向ひ來月に入らざれば歸館せずと云へり左なきだに失望せし二坊は此に至て頼みの綱も全く切れ果て早や此上は萬止むなし斃るゝ處まで進行せんと既に館外へ出んとせしに本館の書記暹羅人ナイウツプ氏出來り坊等を呼止め曰く何の御用かは知れざれ共當府には府廳ありて幸ひ知事も在廳の筈なれば御用の筋によりては知事を訪はるゝ宜しからんと此に於て二坊は先づ其教示を謝し備に語るに昨夜の變を以てして且前途の苦難を訴へしかば書記も頗る氣の毒がり左様の儀なれば愈々以

發

程

て府廳に到り其保護を乞はるゝが順當なり自分も出來得る丈けの助力をなさんと懇々慰諭する處ありしも坊等は磐谷を飛出したる始末の常に心中に蟠り居れば暹羅の官吏たる府知事に面會するは虎の尾を履む感なきにあらず然れども今日の場合普通の道のみを歩むべきにもあらざれば終に虎穴に入るの決心を爲し書記の同行を乞ひて府廳に向へり府廳にては知事目下病氣なりとて直ちに副知事の執務室に誘はれたり而して副知事は三無を熟視しヤ一君は山本氏にはあらざるか書記官又鐵脚を凝視しコリヤ君は岩本氏にてはなきやと此時に於る鐵脚三無の驚きは果して如何磐城を距る二百餘哩の此地に揃ひも揃ふて二坊の知人あらんとは蓋し副知事は去る明治二十年文部大臣バスカラウサングス侯が全權大使として來朝せし時隨行し來り三無も同行して歸還せる子爵ピニサラ氏にして書記官は鐵脚が磐谷なる農相の邸に於て面識ある子爵ハルタイ氏なりしなり主客互に其奇遇を喜びて別後の挨拶も終り副知事書記官等は二坊が風体の餘りに不可思議なるを訝りて頻りに來由を尋ねけるに予坊等も此時稍々落付きたるを以て眞實虛言打交せて其場遁れの答をなし旅券と必需品の給與を乞ひしか二

氏は快く其乞を容れ且今日は兎に角府内を一見せらるべし又寺院に宿泊せられ
 たき望めれば府廳は之れか周旋を爲すべしとありたれども囊に領事館書記なる
 ナイウツプ氏より今夜は館内に一泊せられよとの言もありたれば再會を約して
 府廳を出たり副知事は玄關まで見送り明朝八時前後に吾等が私邸に來られよ夫
 迄には二君か旅行の便を計りて管内に告示する文書を認め置くべく尙ほ煎飯を
 も呈すべしと款待に至らざる所なければ坊等は深く其高誼を謝し此日は終日府内
 を巡遊して黄昏佛國領事館に歸れり
 嗚呼人間の萬事は塞翁が馬なり禍福の變轉實に瞬間に在り前途の事亦た左程患
 ふべきにあらずと
 磐谷を出で、十二日目始めて天井あり臥褥ある眞の屋内に安眠し快く明治三十
 年の元旦を迎へたり

コラット府

コラット府は暹羅國の殆ど中央に位し北緯十四度五十九分東經百四度十分の
 所にあり首府磐谷を距る北百六七十哩鐵道線或は云ふ二百二十三十哩二坊の通

過せし所は約二百哩西の方遙かにチヤンマイ市に通し東南佛國の占領せるチ
 ヤンタブンに到り北は直路ノンカイ市を経て湄公河を超れば上老樹に達す所
 謂四通八達之地なり市街は單線にして西南より東北に亘り約二十八九町北端
 にコラット河を扣へ至市繞らずに煉化製の古殘壁を以てす戸數四千餘人口殆
 ど四萬に近し概ね商を以て業となす居民は支那人其半數を占め其他の多くは
 暹羅老樹の雜種なり又支那人が營む所の商業は過半迄諸物産の問屋にて近傍
 各部落より輸入し來る象虎豹水牛普通牛の諸皮及び其牙角骨並に米樹脂樹木
 類を買集め之を磐谷に轉漕せり當縣は暹羅國中磐谷を除き第一の都府と稱し
 て可なるべくコラット鐵道全通の曉は商工業上北方第一の要地となるや必せ
 り而して此に最も怪むべきは暹羅政府が執る所の軍制如何にて北方の咽喉と
 も云ふべき當府特に佛領老樹よりは長驅十二日を出ずして到達し得べき當市
 に相當の兵員を置かざる一事にて坊等の知る所に依れば人夫の兵裝を爲した
 るものと稱するを適當とすべき政廳護衛の兵士十五六名を養ふに過ぎず是等
 の事は尙ほ下章軍事の部に於て詳述すべし

明治三十年一月一日晴 東天紅を告げ渡る鶏の聲は萬里同聲故山のものに異ならず夢覺め窓戸を排けば夜は既に明け放れて一天晴朗拭ふが如く吹く風さへも輕らかに感せられ青帝坊等を憐みて心に懸る愛雲の殆んど全部を拂ひ去りたれば其愉快さ云はん方なし乃ち手洗ひ口漱きて髪髻を剃り心計りに身を淨め先づ東方に向ひて遙かに我が皇の寶祚萬歲を祝し奉り次に親戚朋友の健康を祈りて書記ナイウツプ氏の贈りたる一瓶の葡萄酒を屏蘇に代へ一盃の菓子を雜煮と思ふて明治三十年の元旦式を濟したり行途を急ぐ旅の身の歳首なりとて空しく時日を過すべきならぬばナイウツプ氏に向て厚く前日來の情義を謝し領事館を出て、副知事ビニサラ子の邸を訪へり子爵大に喜びて直に二坊を饗應室に導き處狭き込山海否川の珍味を陳ね子爵夫人及び其二子をも食卓に陪せしめ夫婦交るゝ坊等を饗應せり只だ宗教上の大禁物なりとて一瓶の酒なかりしは物足らぬ心地せり二坊は磐谷を出で、始めて斯る珍味に接したれば無遠慮に飢腹を満し殘物を鐵鉢に收め兼て約束せし告示書をも受領し二坊謝辭を繰返して同邸を立出て北に向て進むと約一哩許遙か後方より頗りに二坊の名を呼ぶものあり何人

發

程

ならんと願みれば先刻別を告げたる子爵の令息が汗馬に鞭ち追來るにて近くがまゝ地上に飛ひ下り只今當府に居住せる、中部僧侶管長法親王殿下より貴僧等に面會し度との事を愚父の許迄申越されたり願くは杖を返へされよと云へり二坊乃ち踵を旋らし府の入口に到れば副知事を始め二三の僧侶出迎へ居り坊等を法親王の許に導けり法親王は國王の從兄弟にて年齢七十歳位高潔の性を温顔に現はし坊等に接し辭々遠來の勞を慰し紀念の爲めにとて法衣各々一領を贈與せり二坊厚く其恩を謝し殿下を始め陪席の僧侶に別を告げて再びコラットを出て、ノンカイ街道を進み行くと二哩前夜の露宿地即ち盜難に遭遇せし林側を過く二坊當夜の事を思ひ出て遺憾の念を押へつゝ行過んとせしが更らに想ひ起す處ありて露臥地を訪ふとに決し右折して彼の森中に入る蓋し聊か未練を被盜品に残し萬が一も其一品たも得んとを欲したればなり滿目遺憾の種ならざるはなき林中を徜徉し盜漢追跡の跡を行くと數歩三無一布囊を發見し驚喜飛行取上げて之を見れば紛ふ方なき鐵脚が行李にて而も一品の紛失なく且つ夜露に濡ひたる跡もなかりし餘りの嬉しさに二坊互に顔を見合せ再探の徒勞に屬せざりしを賀

しつゝ左右に茫々たる水田を眺め垣砦の如き道路を北に向ひ五時頃ワンセン村に着し副知事の告示を出して村長の家に投ず村長名をメイキンと云ひ能く坊等を待遇せり本日の行程凡六哩餘

一月二日晴 副知事告示の効能は忽ち村長をして非常の優待を爲さしめ早起先つ似茶茶葉に似て否らざる一種の樹葉を煮出したるものと砂糖とを持ち來り尋で四種の菜を整へて朝飯を供せり此邊總て生物を食す蕪菜葱の如き多くは生にて饑に供せり食事終りて此家を辭し釋尊の足跡をノムアン寺に覽る寺はワンセを距る里餘に在り二村童に導かれて寺門を入れば庭の西隅に一石屋あり廣さ凡そ八疊許りを敷くべし此に所謂足跡を安置す踵より趾に五尺一寸踵の徑二尺七寸なる足跡を大石に印したるものなり土人が此足跡を信仰する極めて深く香華絶ゆるとなく四名の僧ありて之を守る就て其由來を問ふも知るものなく製作の年代及び作者の名を知らず單に釋尊の足跡なりと云ふに過ぎず夫より捷路を取りて北方に向ひしが岐路に入りし爲め三四時間の艱苦を嘗め僅かに本道に出で薄暮サノントア村に達し破屋に投宿す里程大凡十二哩

發

程

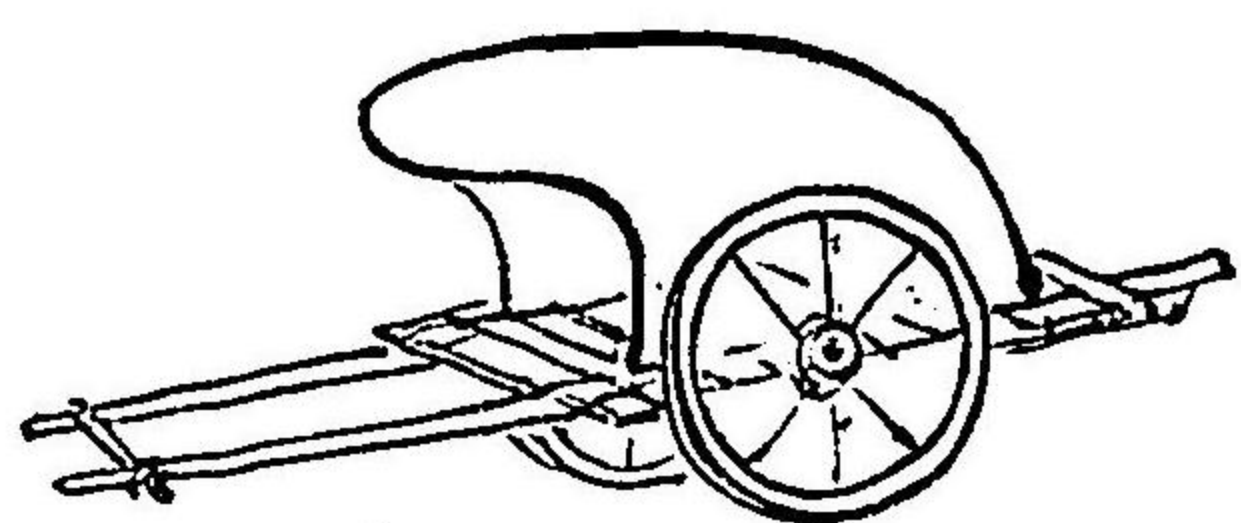
三日晴 メリクズシンア、痛いと足質の破るゝ音と三無が唸く聲なり鐵脚齧きて何事の發りしかと枕邊を探りて燐寸を點し三無の臥床を見るに彼は姿を失へりコワ不思議なりと唸聲の來る方向を考ふるに全く床下より來るに予即ち梯子を下りて牛小屋を窺ふに三無は水牛と豚との邸宅なる汚物中に横はり腰部を撫てつゝ唸き居り牛豚二氏は其安眠を妨害されしを怒りてか又突然の點火に驚きしか頻りに床下を狂ひ廻れり其光景の異様滑稽なるに鐵脚は思はず失笑す而して其失笑は聞らずも三無の怨言となり怨言又鐵脚の絶倒となりて夜は兩坊笑怒の間に明けたり三無の言ふ所に據れば暗中用を便せんとするに當り梯子に至るの途を誤り終に簀子破りて轉落せしなりと此時鐵脚戯て曰く彌次喜多は天井を踏抜て佛壇に落ち君は簀床を踏破て牛小屋に落つ俗者佛室に入り佛者却て畜生道に落つ蓋し君の信仰未だ足らざるに依ると三無苦笑して再び寢に就く拂曉の簀子踏破騒ぎに再度の夢を結びしかば坊等の起出しは九時前にて簀子一件を含みてか不平顔せる主人の持來る朝餉を濟し三無が牛糞を點する法衣を洗ひ北進凡そ十二哩午後五時頃森林中の露臥地に着す

四日晴 午前九時頃ノンプロー村に達し朝食を托鉢す是より有名なるトンヤイ(天森林)に入る枝少く葉疎なる大樹の下を九十五六度に近き炎熱に曝され日光の爲めに焼けて熱湯の如く深き踵を埋むる砂土を踏み搗て加へて一滴の飲料水もなきを以て屢々眩暈の爲めに卒倒せんとする危難に接し僅かに寶丹を甜めて午後四時頃ボンタクロー村の入口に着したり前途二哩にして人家ありと聞きたれども二坊の疲勞は此間の徒行を容さす終に森林中に露宿せり本日の行程約十哩餘

五日晴 早發ボンタクロー村に入る人家四個朝食の後森林を辿る昨日の如しボアノエ村にて午食す施主は熱心なる佛教家にして悉に坊等を遇し飯魚砂糖煙草等を饗せり是より北糯米を常食とす又居民は概ね老嫗人にて暹羅人は見ると稀なり此夜亦た林中に露臥す行程十四哩夜深く風死して天地寂冥聞ゆるものは豹の聲のみ二坊悚然終夜快夢を見る能はず

山中林裡の別なく象の棲息する所には虎住ます虎の棲息する所には豹の住むと殆ど稀なり虎豹の來襲を防ぐには焚火を以て第一とす故に露宿を爲すもの

圖 二 第



多くは後邊に小楯を取り前面の二方若くは三方に焚火を爲すを常とす又虎豹の來襲は多く薄暮と未明とに在り

六日晴 小楯にて表たる糯米の粥を食し例により北向林中を進む此邊滿目荆棘繁茂し其丈け人身を没して道路を分ち難し且人家なく飲料水なく剩さへ赫々たる日光頭上を直射すれば二坊の困難此上なく僅かに生米を嚙で飯を醫するも渴を止むるに道なきを以て疲勞の極稍々打開きたる處を相し茲に行李を解きて露宿するに決し會ま牛車隊の北方より來るに逢ひて少量の水を得しは午後三時頃なりし此行程約十二哩餘

牛車隊はノンカイ市附近より獸皮獸骨等を積載したる數十輛の牛車相伍してゴラツト府へ輸送するものにして車一輛を牛二頭に曳かせ又一輛に一人若くは二人の土人附き添へり又此牛車夫は大なる竹筒に水を盛り林中に渴を醫するの料とせり

七日晴 前日來の渴喉は今日に至るも同様にて四邊何れの處を搜索するも一掬

の水なきを以て曉起木葉尖端に置ける夜露を嘗め生米を噛みつゝ磁針器を出して方向を案し行けども萱原は盡きす時に或は牛車隊の足跡を印せし濁水の濁水を飲むに至り正午頃道普請人夫に逢ひて少量の食物と水とを乞ひ織に濁水を浚きてマイナビヤン村に達せしは午後五時過なりし此夜當村の一貧寺に投ず寺僧四名あり待遇頗る懇切なり磐谷を出で十九日寺院に投宿するは此夜を以て始とす行程約十三哩

此邊燐寸及ひ燧器なし土人が二本の木を摩擦して火を出すと南洋諸島の土人に異ならず

八日晴 晨起衆僧に伴はれて本堂に出て朝勤を始む三無は渡退前某寺院に寄食すると半歳能く般若心經を暗誦せり然れども鐵脚は元來不器用なる人物の處に陸軍に入て軍務を取るより外の業を知らざれば經文と來ては思ひも寄らず午去今日の場合黙して過し得べきにあらざれば三無坊に打合せ鐵脚は出語目を唱ふるとして本堂なる上座に招せられたる鐵脚先づ咳一咳して最も重々しく音調穩かに梅か枝の手水鉢を誦す之を繰返すと凡五六回三無は此間頻りに心經を誦

發

程

(五四)

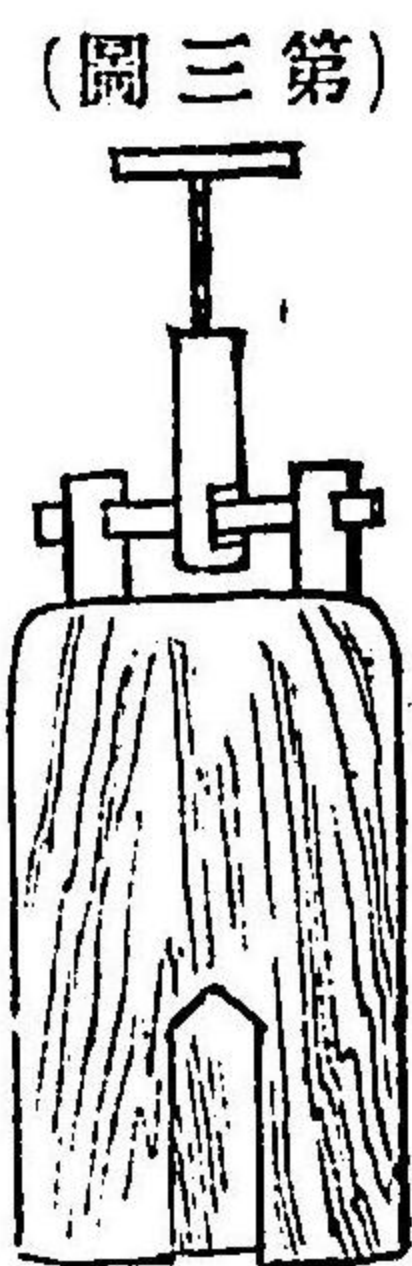
す而して寺僧の讀經は中々感にして何時果つべきとも見へざれば二坊愈々困し果て鐵脚は終に音頭を眞似て是より大津給節を始むべしと三無に通じ聲を揃へて「オーイ」老叟をの誦す次に面白半分は大関記十段目のさばりに移り恰も「もつそふ飯の切米も百万石にまさる」といふ處に至り衆僧の讀經漸く終りし休なれば二坊亦た「南無——」と唱へて看經を終へたり此時若し一人の日本語を解するものあらば其人の感情果して如何今日より當時の事を回想すれば有聲の鐵脚も冷汗の腋下に滴るを覺えざるなり看經終りて衆僧托鉢に出つ二坊亦之に従はざるを得ず嗚呼明治三十年一月八日は是れ如何なる日ぞ鐵脚三無の二坊は終に此日を以て正式の乞兒仲間に入り了ぬ歸院後朝飯を終へ本寺を發す

午後五時頃一村落到達す人家二三個就て之を見れば何れも空家なり而して其一半ば焼けたり又往く一哩餘道側に三個の人家あり然れども是亦た前と同しく空屋なれば二坊其何の故たるを知らずと雖も宿泊するの空なきに窮し更らに往くと一哩道の左方凡五六町の林中に白煙の上を見る乃ち歩を轉して其地に至れば一個の破屋あり時に日既に没して僅かに人顔を辨し得る黄昏頃なるに戸内

を窺へば四個の大漢爐を擁し此邊九十度前後の熱度なるに關らず爐中火を燒き食物を煮ながら家族團欒するを常とせりて何か頻りに雜談し居れり二坊が一泊を乞ふに當り彼等は快く之を諾し直に戸内に招せしが其挨拶何となく尋常ならず二挺の銃と四振の刀は壁間に懸り四個の人体惡相を表はして問はずも山賊たるを知りしかは素より無一物のとなれども誤て危害に逢んを恐れ忽ち一計を案し囊裏の無一物なるを示す爲め布囊を振ひ鐵鉢を覆へし法衣をも脱して其塵埃を拂ひしかば始めより其容子を瞻り居たる四大漢は漸く口を開きて貴僧等の財物なきは實に幸運なりしなり此先の人家は四五日前數人の強賊に襲ばれ家は燒かれ家内を殺し盡されたり又十日程前のと二名の旅僧は林中に於て虐殺されたり北方より來る凶賊は俗僧の別なく苟も錢ありと認むる時は多少を問はず居て之を奪ひ毫も假借する所なしと其言ふ所虛實固より知るべきにあらざれども兎に角好き程に挨拶し坊等亦た通過せし所の實跡に就て相當なる雜話をなし夜も已に更けたればとて何れも皆寢に就けり本日の行程約十四哩道路平坦左右を荒廢せる田畑若くは蘆茅の茂生せる沼澤なりし

九日晴 二坊の臥床を離れしは日出の頃にて彼等四個は此時既に朝食の仕度に忙はしく一個は米を炊き兩個は雞を割き居れり二坊は平然爐邊に踞し煙草を吸ひつゝ彼等の爲す所を眺め居りしに須臾にして盆に飯碗と雞の煮たるものを盛り恭しく捧げ來りて曰く邊陲の孤屋貴僧等に供すべきものなし只一羽の殘れる雞を割き聊か供養の意を表すと二坊其厚志を謝し飽まで食して行途に上り正午頃サナボット市に入る戸數三百許り人口二千四百あり

晝食後北進凡二哩餘會ま老邁國モントンラウポアン州知事クロマバチヤック殿下の磐谷に赴くに返る隨行員二坊の風体を怪み馬を下て來り問ふ所あり三無巧に暹羅語を練りて旅行の目的を告げ且つ囊にコラット府副知事が認め呉れたる告示書を示せしかは彼等大に安心の体にて相應の挨拶を爲し一鞭を加へ去れり午後九時頃ドン村に入り一寺院に投宿す院主稍々事瑣に通し語るに足れり彼頻りに西洋文字を書き呉れよと乞ふを以て二坊交々諸種の洋字を書き與へ夫より雜談に移りしが寺僧の言に依りて昨夜二坊が宿泊せし孤屋の矢張り想像通り山賊の棲家なりしを知り得たり本日の行程十四哩此邊陲を養ひ又た絹を産す



(圖三第)

十日晴 一槌の鼓聲に曉鐘を破られ此邊の寺院總て曉鐘に代るに太鼓を以てし
 晩鐘に代るに圖の如き木器を以てす起出れは寺院は已に供物を携へたる翁媪を
 以て混雜せり暹羅に舊「タマニ」新「マハニカイ」の二教
 あり前者は萬事嚴正にして後者は尤も寛なるを覺
 ゆ故に托鉢の如きも前者は寺僧戸毎に巡わり後
 は寺院の前庭に於て信者の捧げ來るものを受るを例とす二坊は寺僧と共に托鉢
 をなしドングトン村に向て疎林を進み午時同村に着す食後北進ノンウエン村に
 入り空寺に投す本村は昨年新たに開ける所にして戸數八空寺一あり土人の語る
 所に據れば本寺元と二名の住僧ありしが十日前何れへか去りて歸り來らずと元
 來暹羅の僧は我國の僧侶と其趣を異にし儀式的慣習に依りて僧となるものなれ
 は又何時還俗するも差支なし其次第は宗教の事を記する場合に於て詳述すべし
 本村の住民深く佛教を信し僧侶を遇する甚だ厚し殊に無住の寺院へ二坊の來合
 せしとなれば其喜び一方ならず交々來りて責ては一二月月留杖せられたしと懇
 請するに至りしが坊等の到底留錫せざることを知り父老等は更に種々の食物を持

(圖四第)



ち來りて饗應せり此夜月明に風清く村童月
 に乘して笙を吹く日本の器に似て非なるも
 の聲響懐然二坊をして轉た想郷の念を生せ
 しめたり曉より驟雨到る磐谷を出てより
 二十二日始めて雨に逢ふ行程十三哩餘
 十一日曇 驟雨緩かに晴れたれども密雲凝
 て未だ散せず朝來土人多く供物を捧げ來り
 更に留杖を乞ふと頻りなり二坊は百方之を
 慰諭し再會を約してノンウエン村を發す父
 老數人送て村端に來り別に臨みて戀々の情あり夫より森林曠野を進行し午後四
 時ニユ一村に達し一寺院に投す此邊牧場あり多く馬を産す行程十三哩
 十二日晴 例により托鉢を爲し午前七時發足此日日光赫々炎熱焚が如し日中の
 旅行は到底堪へ得べきにあらざるを以て十時過より樹陰に憩ひ午後四時頃途に
 上る行くと數哩大深林と名くる林中に入る薄暮一軒の「サラ」に達し此に宿す行程



(圖五第)

八哩餘此夜又遙かに猛虎の月に嘯くを聞けり
 「サラ」は旅人の雨露を滾く爲め處々に造りたる空
 屋にして丸木の堀立小屋なり四面壁なく葺又は
 樹皮を以て屋根を葺く床は丸木を組合せたる上
 に樹皮を布けり廣さ凡そ十七八疊位なり

十三日晴 吹き来る曉嵐に目を覺したる鐵脚坊は頭を擡げて何心なく四方を望
 ひに東方稍々白ふして曉景の爽快言はん方なり時に樹間に微動するものあり眼
 を定めて諦視すれば豈圖らんや二坊が恐れに懼るゝ處の一大虎にして彼は既に
 床下に迫らんとせりそれと見たる鐵脚は虎なりと叫びて三無の頭を打ち身を跳
 らして天井の椀に取付く三無亦其叫聲に驚きて牙破と飛び起き同じく頭上の椀
 に取付きたり此時虎は疾風の如く奮進し來り坊等を見掛けて飛上りしが二坊は
 已に二丈餘の高さある屋上に在りしかば彼は是を如何ともする能はず虎は能く
 一丈二三尺は飛上れり地上に蹲て頑然二坊を睥睨せり坊等の恐怖は筆紙の能く
 盡し得へきにあらざるも前日既に此難に遭遇せし經驗あれば稍々落ち着て返睨

し凡そ三十分間も睨み合しが夜は全く明け離れ且南方より十五名の隊商或は銃
 を肩にし或は刀を帯ひて來るに會せり大虎も此情勢に避易せしか忽ち林叢の間
 に姿を隠せり二坊も此に始めて蘇生の思ひをなし屋根より下りて危難の情況を
 物語れば隊商等別段驚きたる模様なく斯るとは毎度なりと云はぬ計りの挨拶を
 爲し共に北に向て進行せり

コンケン村は大深林の北端にありポン河に臨む河幅三四十間流急にして兩岸高
 く其風光愛すべきものあり是より一望千里の茅原を行く三四哩午後四時ピンへ
 ン村なる一寺院に投す此邊の住民男女の別なく多く耳朶に孔を穿ち草花を挿て
 裝飾と爲せりコラツト府を出でしより此に十三日止宿する處の寺院及び民家と
 も側を備ふる處なきを以て垣根又は竹籬の險にて用を足せしが本村に入りて始
 めて圃あるを見たり尤も汚物を拭ふに紙を用ゐず木葉若くは竹篔を以てする沿
 道皆然りとす行程十二哩餘

十四日晴 午前八時發途本日は十五名の商隊に二坊を合せたる十七名の同勢な
 れば途中頗る賑はしく暫く旅情を慰めたり又彼等は中々親切にして進行中は坊

等の荷物を分擔し食事の時も又供養し呉たれば其便利言ん方なかりし午後四時頃露宿地を定め或は薪を集め或は炊事の用意を爲しか折柄二十五臺より編成したる牛車隊北方より來り是より數哩を北行せば「サラ」ありて宿泊に便なりと告げしを以て一同更に歩を續くる事に決し打續きく林中を進みしが日暮に至るも未だ「サラ」を見ず加ふるに林は進むに従て濃密となり今更露臥地を定めんにも好地位なければ止を得ず夜を犯して「サラ」の在る所迄進まんと急に三四本の松火を作り前中後に之を照して凹凸劇しき小徑を辿り辛ふして目的地に達せしは午後十一時頃なりし健脚を以て稱せらるゝ商隊も本日の行路には幾分か疲勞せしと見悉「サラ」に入るや十五名枕を並べて直ちに眠に就けり行程或は二十二三哩にも達せしならん

十五日晴 過度の旅行に疲勞せし爲めか一行の朝起せしは八時頃にして夫より食事を爲し北進數町正午に至り始めて林中を出づ而して午餐せしは一大沼澤の東畔なりし午後三時コンタン村に着し寺院に投ず此邊一望千里の沃野にして多くは水田なり行程十一哩

十六日晴 十時過ぎハコー市に入る戸數七十餘人口四百に充たすといふ市長は商隊長の知人なり雞豚魚玉子等を出して坊等を饗應し食後市長は銀の延板を出し之に呪文を刻せんとを乞ふ二坊快く之を諾し種々の文字を刻み遣りたり延板は一寸若くは一寸五分の紙の如き簿板にて錐を以て彫刻するを例とす蓋し此邊の人民は大に銀板を貴重せり商隊は此地の附近へ煙草を買出の爲め來りしものなれば名發惜くも此時を以て袂を分ち二坊は北進して午後三時パンサンホー村に着し一寺院に投ず全体此地は僧侶の慣習にて兩僧相逢ふ時先づ得度せし年月を糺し一日にても早く僧籍に入りたるものを禮拜するを例とせり此夜寺僧の得度年月を問ひ彼五年と答へしを鐵脚は七年前なりと稱して終に三拜せしめたるは近來の上出來なりし行程約十哩

十七日晴 此日又林中を進むるに人家を見ず又飲料水の在る處に至らず坊等既に林中の旅行に饑渴の苦を嘗めたれば爾來糧食を鐵鉢に收め竹筒に飲料水を盛りて携帶するにとせしが今朝寺院を發するに當り本日の行路林中處々に水ありと告るものありたれば水筒を空にして出發せしに終日終に湧水に出

遇はす渴を忍びて薄暮カンキン村に着す戸數十二三村長の言ふ處に據れば此村寺院なく又目下熱病流行し四五日來日々一二名の死亡者ありと而して村長は村外の番小屋を致へて曰ふ老師等彼の小屋にて一夜の露を凌がるべし食事は調理して贈進すべしと傳染を恐れて直ちに當村を通過せんとしたる二坊の争て之を辭するとを得ん言ふが儘に該小屋に赴き此に行李を下したりしが須臾にして村長小屋に來り膝行禮拜病魔攘除の祈禱を乞ふ鐵脚は一二時間の後靈驗著しき佛符を與へんと約し其去るを待て二坊は日記帳の餘白を裂き二十二三の藥包を作りて之に少量の「キニ一子」を包み小屋の一隅に安置して殿かに僧貌を裝ひ合掌膜拜彼の來るを俟ち居たるに程なく村長は二三の村老を伴ひ恭しく二坊の前に跪けり此に於て三無は威儀嚴重に靈符の効能を説き斯る品は汝等が容易に受る能はざるものなれども佛陀は汝等の困厄を憐み坊等をして之を下賜せしむ宜しく清水を以て病者に飲まし佛恩の廣大なるを知らしむべしと彼等は喜色を滿面に表はし幾度か禮拜して辭し去れり坊等來る處の病人に「キニ一子」若くは「コロダイ」等を施して奇効を奏したると勘からされども箇様に多量を施行せしは此時の

みなり二坊は村長よりの供物に係る似茶を飲み砂糖を嘗めて寢に就く行程十二哩餘
 十八日晴 枕頭啼々頻りに啼くものあり何事なるかと頭を擧れば時は尙日出前なるに十七八名の老若男女幾個の籠を擔ひ村長を先に集り來りたるにて蓋し前夜の靈符偉効を奏したるの結果とは知られたり二坊の目覺るを見るや村長先づ口を開き頓首して曰く昨夜靈符を戴きしもの輕きは朝に到り殆んど全快し重きも床上に坐して佛恩を拜するに至る老師は眞に生佛なり林中の貧村洪恩に報ゆるに由なし不腆の供物幸に受納せられなば我等の幸福之に過ぎずと擔ひ來れる籠中より米魚砂糖野菜煙草等を取り出し二坊の前へ堆く積上げ且恐るゝ異口同音に數日間の留錫を乞ひ村民一統の哀願なりと叫ぶに至れり生來嘗て藥石を伴めたるとなき土人の「キニ一子」の爲めに熱を解かれ其効驗の著しきに驚きたるは左もあるべきとなり佛家の方便又此に至りて著大なりと云ふべし二坊は体よく留錫すべからざる理由を述べ供物中必要の品を鐵鉢に收め二坊の後影を伏拜し土人に名殘を惜みつゝ林中に入る

破村に達す此村は餘程の貧村と見え屋根破れ軒傾き利さへ各戸とも家人多く到底宿泊するに足らざれば止むなく村端の空家に入りて一宿す行程約十三哩

二十日晴 早發午後五時頃コンタン村に着す寺院なし例に依り村長の家に投せんとす此時鐵脚三無を顧みて曰く君暫く待て一の緊急動議ありと三無何事かと驚て路傍の草上に坐す鐵脚徐に説出して曰く回顧すれば磐城を出でより此に三旬餘幾多の危難災厄を凌ぎ死に頻すると亦一再ならず然れども幸にして退境を踏破し明日は其北端なるノンカイ市に達すべし豈祝賀すべきの至ならずや今宵は宜しく禁酒の戒を破り土人を欺きて聊か祝盃を擧べしと此意外なる動議には流石の三無も驚くかと思ひの外満面崩る、許りに打ち喜び雙手を擧げて賛成せり左れば之より其準備に取掛らんと先づ村長の家を叩きて番小屋此邊各村とも村端に番小屋あり借用の儀を申入れ其承諾を得て更らに曰く坊等が俗家の宿泊を避けて汚穢き番小屋に一夜を明す所以のもの蓋し衆生濟度の重きを知ればなり村内若熱病に罹り居るものあらば釋尊直傳の妙藥を與ふるを以て坊等の宿處へ參拜せしむべし尤も同妙藥を酒に混して飲むものなれば望のものは一瓶の

酒を持參すべしと告げ終て村端の小屋に入れり恐直なる村長は坊等の言を信し村内へ觸れ廻りし者と見え良久して五名の土人各々一瓶の酒を携へ來り只管妙藥を得んとを乞ふ鐵脚曰く徹宵祈願して然る後授與すべければ明且を以て來るべしと土人三拜九拜し去る此に於て二坊は茫然本質を顯はし計略の圖に中りしを祝しつゝ鐵鉢の蓋に酒を盛り鉢中の鹽魚を取出し且つ飲み且つ談し夜半臥を枕にして睡る其愉快なりし情勢は恐らくは二坊の外之を知るものなからん本日の行程十一哩餘

二十一日晴 釋尊直傳の藥取りは早や玄關否番小屋へ寄來れり二坊は早起飲殘りの瓶中へ水を盛り「キニーネ」と寶丹とを打込て來客を待ち居たれば勿体らしく之を目八分に捧げ扱て土人等に告て曰く汝等何の佛縁ありてか此の妙藥を戯くを得る病者一たび之を服すれば病立るに治すべし尤も不信の輩には毫も効驗なかるべしと甘く一道の遁辭を設け化の皮の剝けざる間に土上に踞して禮拜する土人を跡に番小屋を出たり

午前十一時頃ノンカイ市に着しシツクモン等に投す市は北緯十七度五十分東經

百二度四十分に位し暹羅の北境湄公河の南岸にあり戸數千餘人口一萬に超ゆ三分の一は支那人なり佛國コンミツセル及ひ天主教堂あり普通寺院亦十九を以て算ふ南はコラットに通し北湄公河を隔て、佛領老撾に到る佛國の小派船一週一度ウエンチャン市より此市を通し南東蒲塞に向ふ老撾并に暹羅北方產物獸皮牛角牛骨を最とすの集散地にて輕舟は十五六日程を以て老撾の首府ルアンブラバンに達すべし市街の繁華亦コラット府に次ぎ暹羅北方の一都會なり二坊は法衣を更めて當市在留の佛國コンシツセルポールマツセル氏を訪ふ氏は年齒四十五六老嫗にあると四年當市に在ると二年能く老嫗暹羅二國語に通す氏は先づ問ふに旅行の目的を以てす二坊答て曰く我國今や佛教改其の機運に際し國外佛教の状況を視察するの要あり坊等が此に来る亦暹羅老撾安南三國の佛教を調査せんが爲めなりとマ氏は是等の言を信せざるもの、如く微笑して曰く東洋唯一の文明國より來りて未開不文の當地方を巡回さるゝ御困難の程察すべし若し助力して宜しきとあらば遠慮なく仰せありたしと坊等其厚意を謝す氏又茶菓を出して響應せり此間種々の談話に亘り何時果つべしとも見えざれば明朝の再會を

約して市中に出て日没頃寺院に歸る

暹羅領内の旅行は此日を以て終る此間日子を費すと三十三日行程大凡四百三十七哩餘

此に暹領紀行を終るに臨み坊等が通過せし地方及び其附近の氣候人情風俗交通及び農商業軍事宗教地方制度等の概要を一括し左に記述すべし

暹 羅 紀 行 (一六)

氣候 暹羅は氣候を三期に分つ二三四五の四ヶ月を熱期と呼び華氏寒暖計八十四五度より九十四五度に及ぶ屋外にては百十五六度に昇るとあり六七八九の四ヶ月を雨期と稱して毎日の降雨日本の梅雨に似たり此候は寒暖定まらず時に或は裕を用ひ尙ほ冷氣を覺ゆるとあり十一十二の四ヶ月を冷期と云ひ七十一二度より八十度の間を昇降す十一十二の二ヶ月は暹羅年中の最好氣節なり故に十月より翌年五月に至る間は殆ど無雨にて残り四ヶ月は無晴と知るべし隨て八十九の三ヶ月は至る所の河川氾濫し到底旅行を爲す能はず内地旅行は十一月より五月に至る七ヶ月間を以て最も好時期とすコラット以北は之を南部に比して降雨少なく暑氣も南部の如く酷烈ならず

風土病 別段風土病と稱すべきものなし患者の最も多きは三四五の四ヶ月にして磐谷府近にては往々虎列刺赤痢熱病脚氣等の流行するにあり然れども其病質の傳染性なるに拘はらず概ね各自の不衛生より來る特發にして傳染は殆ど稀なりと云ふ其飲水の如きも上流社會にては雨期の時六なる水槽に充分天水を貯藏し置き之を用ゆれども中等社會に在つては蒸溜機械にて過濾せし湘南河の濁水を用ひ其下等社會に到つては過濾せずして其儘に河水を飲ひ而して此の河中に糞尿は原より種々の汚穢物を放擲するにも關らず之を飲用して毫も人身に害なきも亦た一奇と云つべし北部に至るに従ひ虎列刺赤痢等の諸病極めて少く單に林熱と稱する熱病のみ流行せり故に内地旅行者は該病を豫防すると同時に解熱の藥劑を携帶し又引用水に注意せざるべからず

衣食住 衣食に就ては之を南部磐谷よりコラット府迄北部コラット府よりノンカイ市迄の二部に分ち記述するを便なりとす

南部則ち磐谷府よりコラット府に至る男女は共に「バーヌ」と稱して丈十尺幅三尺餘の絹又は金巾の織物を腰下に纏ひ其端を捲りて之を臀部に挿み何れも裸體赤

足なり十一月十二月の冷氣を感じる候には男子は上部に布片を纏ふ女子は乳巻と稱し幅一尺二三寸丈六七尺の絹又は金巾の織物を以て乳を纏へり又男子の洒落ものは平常勁に手拭様の縞若くは形付の布切を掛け居れり上流社會に在ては男子は洋服の上衣女子は極めて細き狄袖の上衣を着し男女共に靴を穿つ然れども女子は靴足袋を用ひす只日本の上沓様のものを穿くのみ頭髮は上下男女共に斬髮なり而して上流の男女禮服は共に大に見るべきものなり

元來暹羅は一日二食にして食事に茶を用ゐず水を飲を例とす又箸を使はず拇中食の三指を以て食物をつまめり尤も現今磐谷に於る上流社會の男子は西洋風の匙を用うるに至りたれども女子は依然指食を爲す又熱帶地方の慣習として表者に多量の唐辛を用ゆれば始めての日本人は到底之を食し得ず尙食後甘蔗芭蕉實等の水菓子を喰ふ扱て其コラット府以南は米を以て主食物とし獸魚肉及び野菜類を以て副食物とするは日本に異なるなし雖も蠶油に乏しき地方にては大概調理に多少の鹽を用ひ不味きと中々口に適するに至らず其僻地に於る食物の粗なるは實に驚くべく野菜の如きは多く生にて食せり飯菜共に陶器の皿に盛り

て膳に供す

北部則ちコラツト府よりノンカイ市に至る男子の衣服は先づ南部と異なるなし只南部は裸体を常とし北部は着服するを常とするの差あるのみ女子は縞或は無地の幅廣き腰巻をなし其上部を長くして乳を掩ひ別に乳巻を用ゐず頭髮は男子は斬髪女子は不規則なる束髪にて之に笄釧を挿み男女共に裸足なり尙男女共耳朶に小孔を穿ち男子は之に巻煙草の類を女子は草花又は銀製の環を挿めり其他女子は銀若くは鐵製の腕環頸環等を用ゆ

食事は大抵南部に同じ其異なる處は米に代るに糯米を以てすると茄子黃瓜其他の野菜を悉く煮て食ふの差あるに過ぎず老嫗に入りては間ま膳に箸を添ゆる處あり又副食物は皿に盛れ共飯は小籠に盛を例とす

家屋の構造磐谷府に於る上流社會は多く洋清折中の建築をなせりは全國大概同一にして其磐谷附近は木材を用ひ漸く北するに従ひ竹木を並用す磐谷附近及びアユチア府には浮家と稱する一種異様の住屋あり其法筏の上に家屋を作るものにて涪南河の本支流に多く泛へり又雨期浸水の患なき處は直ちに床を土面に置

けども其患ある處は先づ丸木の柱を掘建て地面を離るゝと七八尺乃至一丈二三尺の處へ竹製の床を設け屋根は萱又は樹皮にて葺き天井はなく一方は竹或は樹皮を用ひて窓を作れり床上には藁を敷き又爐を切りて煮爇の便を取る尙浸水なき候は床下を雞豚等の家畜飼養場に充て居れり其建築用具は手斧と刀に似たるものゝ外一品もなく釘に代るに木栓と繩を以てせりコラツト府チヤナボツト市ノンカイ市等の寺院巨屋を木材を以て之を作り尙ほ北部は南方に比して巨屋多

性情 土人の性情に關しては南北大に異なる處あり要するに南部暹羅人は輕薄遊惰にして阿片と賭博を好み隨て秋毫の貯蓄心なく又閑を偷て白晝安臥を貪れり之に反して北部コラツト以北の人民は正直勤勉能く事に堪へ星を戴て出て月を踏て歸り農業に漁業に牧畜に伐木に各其業務に従事せり只彼等は處世の道を知らず蠢々機械的の動作を爲して他を顧みざるに坐するのみ之を教ゆるに道を以てし諄々誘掖教導せば恐らくは世界有數の良民たるを得べからん而して南北兩部に斯くも著しき差違を生したる原因は想ふに種族の異なるが爲めか蓋しコ

ラット以北には純粹の暹羅人なく暹老の雜種にあらざれば單純なる老邁人なり又風土の異變幾分か兩部の人民動念の上に影響する處あるなるべし

●物産 物産は米を以て第一とす糧材チーキは西北チヤンマイ附近に最も多く坊等か今回通行せし地方には此木なし其あるものは朱檀黑檀花栲其他名を知らざる珍木及び象虎豹水牛牛等の皮象牙水牛角象骨樹脂等にして極北に到れば所謂老邁絹なる一種の織物なり然れども差出甚た僅少にして産物としては見るに足らず

●農業 農業は到る處概ね同一にしてタッコン以南は未墾既墾の平原相連なりタッコン以北コラット府迄は深山にあらざれば大概ね森林なり其以北は森林原野及び沼澤犬牙錯雜既墾地少しと雖も概して地勢は平坦なりとす鐵脚が目撃せし處に據れば四百餘哩中森林は三四分にして他は皆な茫々たる沃野なり治水の法宜しきを得ば一年三度の收穫難きにあらざるも政府は之を度外視し居民亦其法を講せず目下只一度の收穫を爲すに過ぎず耕田は水牛を用ひ植付は雨期の初めに於てす而して一旦植付を終れば之に肥料を施すの要なく又草取を爲すの勞を

要せず然も尙ほ一反歩の收穫五俵より八俵に上る租税は二ライ一ライは我國の四百九十二坪弱なりに付二十錢より二十四錢迄なりとコラット以北白米一石の價磬谷に於て八圓内外の時二圓四十錢より三圓位なりと又最も牛馬の牧場に適すべしと信す只た雨期河水溢れて平地を浸し深き處は一丈餘淺き處も二三尺に到るを常とすコラット附近并に其以北は浸水せざる處あり想ふに今後日本人にして當國に殖民若くは牧畜事業を爲さんと欲するものは須らくコラット府以北を撰ふべきなり此邊にては年八十石の收穫ある良田を十二圓内外にて購入するを得べし此言殆ど虚妄に似たるものありと雖も其由來する處を究れば毫も怪しむべき處なし夫は後項地方制度の部に於て叙述すべし

●商業 コラット府は當國の中央に在て物貨の集散地なるとはコラットの條下に記載するが如し支那人の問屋商を營むもの盛に諸種の産物を収集し之を磬谷に送りノンカイ市は暹羅北端の好市場にて上部老邁又は其附近地方より出る産物を集め或は湄公河により水路東蒲塞交趾支那地方に輸し或は車輻を以て陸路コラット府に運送せり今や殖産の路未だ開けざるを以て此好市場も充分の効用

を爲さずと雖も他年機運一到せば其一大市場となりて隆盛を極むるや必せり此に聊か日暹通商に對する鐵脚が所見を述んに從來日本人が商業の爲め暹羅に渡航するもの極めて少額の織物又は雜貨類を持ち行き小商を爲すものなれば其の商業とは言ひ難し悉く皆な首府磐谷を目的として且つ單に賣込の一方にのみ傾き毫も買入と云ふとを爲さず今磐谷の人口を假りに四十萬と見做し其半數二十萬を支那人とせば殘餘二十萬人中日本品を購買するものは五百餘人の歐米人と幾百人の上等印度人馬來人及び少數なる暹羅の皇族貴族等に過ぎず蓋し支那人は日本商店の品と云へば手をだも觸れず下等暹羅人は生計の度低きが爲めに一圓以上の物品を買ふ能はず稀に買ふものありとするもコハ變体にして賭博に奇勝を得たるの徒か一時の奢侈を衒ふに過ぎざればなり而して此少數限りある華客には夙に歐米支那及び印度等の商人ありて娘一人に婿八人の類なる上歐米の商人には各々公使領事等の後援あり支那人は資本豊富なる上數十年の經驗を積み且耐忍結合の二力に富みて商界を馳驅すれば薄資無經驗にして且耐忍に乏しき日本人が到底商戰に勝を奏する能はざるや明かなり今日日本の小商人が僅

少なからも此間に於て利益を得る所以のものは他の外商等が日本人の商業尙ほ幼稚なるを看破し輕侮蔑視齒牙に掛けざるに是れ由れり若し夫れ他年眞正の日本商人にして堂々本式の商業を爲すに至れば彼等外商が如何に連結の策を講じ我商人を倒さんとするやは今よりして既に觀察し難きにあらざるなり鐵脚以爲らく將來日本が當國に對する商略は今日の如き賣一方の方針を改めて反對に大に買方に進み深く内地に入て歐米人若くは支那人の足跡到らざる處を發見し日本人獨占の好産物地を取得すにありと尙本項に關する坊が所見は他日別に發表して大方の教を請ふとあるべし

交通 首府磐谷より南の方南河口パークナムに到る迄と北の方舊都アユチアに到る迄は兩ながら小蒸氣船支那形船もありと鐵道を併用しパークナム迄二十七八哩は已設鐵道あり北方アユチアを経てコラット府迄の鐵道は布設中にて其タツコン村迄は一週一回貨車の通するあるのみアユチアよりコラット迄の貨物運搬は牛背によりコラット以北ノンカイ市迄は牛車の便を借る磐谷アユチア間の汽船は乗客を目的とし一人の運賃三十二錢貨物は多く支那船を用ゆ運賃一

定せず

アユチアコラツト兩府の間は貨物の運送に駄牛二頭若くは三頭毎に牛丁一人を附すを用ひ十二日間を要す運賃は駄牛一頭百斤十六貫を負ふもの一日二十八錢より三十錢迄とす

此の二府の間七十哩許に亘る山路を除けば他は大概平坦なり尙此の間街道と稱するものありと雖も或は荆棘道を塞ぎ或は岩石崩壊し行通頗る困難なり別て坊等は目下警谷に於て問題となれるコラツト鐵道線路を踏査する目的なりしを以て既設線は素より其樹木荆棘を伐り測量の便に供して今は早や以前に増して雑木の生繁れる小徑を辿り痛く困難を感じたり

コラツトよりノンカイに通ずる街道は想ふに往時一度之を作りたるも爾來人の通行する甚だ稀なるを以て終に其影をも失ふに至りたるものと認むべき處なり今や荆棘蔓延して甚しき處は人間の丈より高く街道と云はんより寧ろ甲乙の村落を連絡する畑道と稱する方適當なるべし叢地と道路の區別全く判然し難き處往々あれは旅人は宜く案内者を雇ふべし車輛隊又は隊商等尙且土人の嚮導者を

雇ひ及ぶべき近路を取り時に或は森林荳原等を横過するとあり

警谷ノンカイ間の郵便脚夫は一週に一回二人以上若くは護衛人夫を伴ひ通行せり又單線の電信は北に馳せコラツトを経てノンカイ市に達す

宗・教 人は言ふ暹羅を世界第一の佛教國なりと夫れ或は然らん然れども坊等原と宗教家にあらざるを以て其觀察亦た杜撰誤解のとなき能はず故に茲には單に其實地見聞に係る處の大畧を述るのみ

暹羅國は上皇太子の尊より下土民に到る迄一たび佛門に入りて僧となるを慣習となす而して大僧正以下夫々の位格ありと雖も日本の如く法衣の制を以て之を區別する等の事なし

宗派に「タマニ」(舊教)「マハニカイ」(新教)の二流あれども只續經の法法衣の工合托鉢の式等其他些細なる差違あるのみにて素より區別を立る程のとなし故に暹羅の佛教は一に釋尊の膝下に奉仕するの宗派と云ふを以て適當なるものと信ず旭日未だ微光を放たざるに早く已に數名の僧侶幾群となく鐵鉢を肩にし戸前に立ちて托鉢するを觀る元來暹羅の僧は朝晝に食ふて午後に至れば流動物の

外口にするを許されず又飲酒は嚴禁なれども肉食は差支なし僻陬の地にては托鉢は一つの儀式に止り人民より朝晝共食物を寺院に持ち運ぶを常とし全體朝食は托鉢物を喰ひ其殘物を晝食とするを法とす渠等は之を以て其義務と爲すものに似たり法衣及袈裟は悉く香染黄色にて大僧正以下毫も異なる處なし只たネン日本の小僧に同じく沙彌の如きものは袈裟を用ふるを得ず去れば日本の如く緋紫黒杯の法衣金襴又は錦の袈裟を以て僧の身分を區別するとなし僧侶の職務は説教祈禱及び葬式に與る等にして磐谷に在りては時に或は博識の僧ありと雖も一たび去て地方に入れば僧徒の無學無識實に驚くべく只た朝夕佛前に讀經を爲すと葬儀に與るとを以て能事終れりと爲し學理上より佛敎の眞理を研究するとか衆生濟度に心を傾くるとか云ふとは毫もあるなし嘗て聞く暹羅の佛敎は小乗にして腐敗極まれりと乍去此國の僧侶は上下を問はず都鄙を論せず塵外に脱然として無欲澹泊戒律を保つの嚴なるに至ては人をして坐に尊敬の意を起さしむ實に彼等は他力によりて生存するものと自信し人之に食を與ふれば食ひ衣を與ふれば被る餓凍餒は殆んど念とせざるもの、

如し人之を見て生佛となせば彼れ亦た釋尊の代表者を以て自ら任ず其有様實に奇なるものあり又人民の僧侶を尊信するは如何なる點に依るかと云へば只た頭髮と眉毛とを剃り香染の法衣を纏ひ佛に仕ふるものは宜しく之を尊はざるべからずといふ遺傳的頭腦に過ぎず鐵脚の見る處によれば此國の政敎は全然別物にして國王の尊と雖も尙ほ大僧正に對して三拜の禮を取る佛敎の勢力偉大といふべし佛人の慧眼なる早く已に之を看破し新殖民地老邁に施す處の政略中之を利用せんとする事跡歴々として掩ふべからざるものあり此時に當り日本より熱心有爲の僧侶を暹羅内地及び老邁國に派し専ら布教に従事せしめば其力を費す處少くして功を收ると極めて多からむ蓋し從來日本僧侶の印度若くは暹羅に行くもの悉く皆な彼れに學びて我に資せんとするに外ならず此事たる固より不可なる處なしと雖も今日迄幾十人の僧侶か數年間の艱苦を嘗め而して彼より得たる處の利益は果して幾干かある若し之を轉倒し我を以て彼に資せば其收め得たる好果は想ふに尠少ならざりしならんと信す既往は追ふべからず日本僧侶今後の奮發一番を望む

軍事 暹羅の兵制は其模範を英國に取れり而して其兵員を取るの法は徵兵と志願の二あり又警谷には步騎砲工の四兵種を備へ其他學校病院等更に角餘形丈は備はれり兵數に至ては鐵脚か知人なる武官某の言ふ處と實地に就て探究する處と大差あるを以て其實數は知り難し要するに暹羅の軍事は此に言ふに忍びざるなり何となれば其情態殆ど見處に類し甚敷は兵士の服役中一回の實彈の射撃を試みしとなきに到る海軍に至ては尙ほ之より甚敷ものあり

首府警谷府よりコラット府を経て北境ノンカイ市に至る六百餘哩間武装せる一の兵士を見ず暹羅政府が國防を顧みざるの甚しき實に人知を以て測るべからざるものなり之に反して彼の三色旗は湄公河の北岸に翻り餘影は延て南岸暹羅領を掩ひ一朝風雲の機あらば幾百の老練兵無人の野を長驅してコラットを衝くと恰も物を囊中に探るか如きの概なり況や南境チャンタブン軍港に堅艦を浮べ以て陸軍に應せんとするものあるに於てをや

地方制度 暹羅は中央政府の下に地方大臣なるものありて各地方の行政を分管す而して其制度は郡縣と封建とを混同したるが如き觀ありて知事の如きも

中央政府より派出するものあると思へば地方在來の貴族を以て之に充るあり鐵脚か通過せし地方にてもナコンシヤシマ州の知事は其州在來の伯爵にしてモントンラウボアン州の知事クロマバチャック殿下は五ヶ年前警谷より來りしものなりと書記官以下は大抵警谷より派出するものゝ如し

元來暹羅國の事は萬般表裏其趣きを異にして「ダイリクトリ」の示す處に據れば行政の組織司法裁判の權限陸海軍の制度等總て完備せるが如くなるも雖て其内幕を見れば殆ど驚きに堪へざるものあり乞ふ其一斑を述へしめよ縣官寧ろ州廳か(の)下に直に村長ありて郡衙等の設なし而して村長は官撰ならずして民撰なるか如し又村役場と稱するものなければ隨て事務を扱ふ様子もなし村内事の起るあれは村民は之を村長の自宅へ訴へ村長は村民中の物識りと識して處斷するを常とす村長又一札の帳簿を備へず就て土地の所有租税の取扱戸籍の調査等は如何にして之を爲すかと思へは總て縣官の爲すに任せ村長等の與り知る處にあらずと答ふ道路の修築橋梁の架設及び寺院の修理等の公共事業は悉く一村の協力に成り毫も官費を煩はず

教育の制度に至ては鐵脚一言も之を記述するを得ず何となれば磐谷には嚴然たる文部省ありて大臣パスカラウチングス侯は方今暹羅内閣員中の敏腕博識家と稱せらるゝにも關らず一步地方に踏出せば學校どころか日本古流の寺小屋もなく直言すれば地方には一冊の書籍なしといふも敢て謬言にあらざる有様なればなり

太古の民に似たる無邪氣無教育の土民を遇する官吏の酷薄は野蠻無政府の地にあらざれば恐らくは其比を見るにもなからん土民相議して官有にもあらず又民有にあらざる荒廢地を開拓し稍々收穫を見るに至れば官吏は忽ち苛税を課し收支相償はざるに至らしむ故に開拓者は折角の勞苦も之を顧るに暇なく去て他の荒蕪地に移轉し蛇蝎音ならざる官吏の目に留らざる間の小收穫を目的とするが故に一年八十石の收入ある良田を十二圓内外の金に代へて得々喜べるものあるに至る豈憐むべきの極ならずや彼等公然揚言して曰く一日も早く暹羅の綱絆を脱し外國政府の下に屬したしと暹羅の國情日に非なる以て知るべきなり而して之が救済の道を講ずるものスリサグデーモントリ侯あり

と雖も地方官の多くは王弟若くは王の從兄弟にして他も皆中央政府に離れ難き因縁あるものなれば陶汰洗滌亦容易の業にあらず大厦の倒れんする争て一梁の能く之を支ふるを得ん眼を東方の大勢に注ぐもの豈に之を忽緒に付して可ならむや

× 佛蘭西領上老樞

一月廿二日晴 午前八時再び佛人マッセイ氏を其官舎に訪ふ偶在ノンカイ市の牧師カテー氏外二名の佛人來會せり主人マッセイ氏は暹羅服を着し夫人老樞貴族の女を伴ひ客間に來り葡萄酒と二三の菓物を饗し坊等暹羅人老樞人に對しては強て禁酒を装へども歐人と會する時は憚らず飲酒せり六名の主客一卓を圍みて相歡語すマ氏先づ杯を舉て二坊の爲めに旅行の恙なからんとを祈り併せて其目的を達するは信じて疑はざる旨を述べ大に此の壯快の旅行を賞賛す次で牧師カテー氏起ちて身は是れ耶蘇教を奉ずるものなれば教義に於ては或は相容れざる處あらんも兎に角大日本人たる岩本山本兩君は此空前の壯舉を企てられしは

大に同情を表する處なり余は誠實に兩君が健康に此旅行を終らんとを祈ると述べたり於是鐵脚坊は不完全なる佛蘭西語を以て二氏の厚意を謝し且つ坊等今回の旅行は單に其初階に屬するものにして是より所在佛敎國を遍歴し法の爲に斃るゝの決心なりと述べ又列席諸氏の健康を祝せり夫より本邦外務省に於て受領せし旅行券は當官廳よりの手を以てルアンブラバン府迄送るととなし更に佛蘭西文にて記せる旅券を受取り別を四氏に告げ洲公河岸の渡川場に出づ

マッセー氏の官舎は政廳の構内に在りて洲公河岸頭の好地位を占む二坊は四氏に送られて岸下に到り只見れは一艘の輕艇船邊に三色旗を翻し渡頭に懸して坊等を待つものゝ如しマッセー氏指し示して曰く貴僧等を前岸に送らん爲め特に政廳所有の官船を泛べ置きたりと又舟子と呼び一封の書面を交付して彼岸に達すれば兩師を村長の家に導き本書を示すべき旨命令せり既にして船は河心に進み四氏は暹羅飯の南岸に立て帽又は手巾を振り坊等亦手巾を振りて互に惜別の情を表す須臾にして坊は急流を横過し北岸佛國新殖民地に達す

洲公河一名をカンボシヤ河と稱す源を淸國雲南に發し暹羅國の東北境を流る

と數百里終に南の方カンボシヤに至て海に入る暹羅國二大河の一なり坊等が渡りし處は幅約二千尺にして兩岸の高さ殆んど二三十丈此河元と暹羅に屬せしが明治二十六年暹佛交戦の結果終に佛國の割取する處となり且つ此河の右岸より暹羅内地へ二十キロメートルの間は殆んど中立地の如き姿を爲せり舟子は坊等を導きて村長の家に到り示すに彼の封書を以てす村長一讀大に驚きたるものゝ如く只坊等を僧として崇信するのみならず官吏にでも接するが如き様を爲せり總て膳部を整へて朝餐を饗し且二名の入夫を連れ來り恐るゝ告る様伊國コンミセル貴下より貴僧等を村次としてウエンチヤン市迄送るべしとの命令あり御荷物は此人夫に負せられて然るべしと坊等其故を知らず始めは之を辭退せしが村長は尙ほ佛國官吏の命令にて坊等を町陣に取扱ひ相當の嚮導人夫を出すべしとの事なれば是非とも引率せられたしと頻りに乞ふて止まされば終に其意に従ひ人夫に荷物を擔はしめて河岸を發し午後五時過タツロアン村に入り同名の寺院に投ず當村の戸數百戸に近く稍々見るべきものあり又タツロアン寺は原と相應なる大寺なりしが數年前回祿の災に罹り目下佛國政廳の助力に

より再建中なりとて村民等相集り煉瓦を作り竹木を運び頗る混雑を極めり乃ち假普請の本堂を以て二坊の宿所に充てらる既にして篝火此邊篝火を以てランプに代ふを點する頃沙彌來り拜して沙彌の僧に對する言辭を發する前に先づ一拜するを禮とす日ふ寺主居室に於て龍茶を獻じたければ御入來を乞ふと乃ち導かれて居室に行く室は假容殿の片隅に在る假家にて階に依て登るべく廣さ七八疊敷くに佛國製の毛織を以てし飾るに同製の花瓶を以てする等は迄見たる寺院とは大に其趣を異にせり寺主年齡二十八九人品亦た高雅なり已にして相互の挨拶終り茶を喫しつゝ談寺主の身の上及びしに彼少しく其答に窮せし体なりしか良久して口を開て曰く余は原と當國皇族の家に生れ名をチャンミーと呼び幼にして孤なり妹レンと共に叔父某の家に寄寓せしか叔父余が家の資産を横領せんと企て余等同胞を遇する實に酷虐を極めしも寄邊落の捨小舟他に取付べき處なければ悲惨の内に四星霜を送りたり一日亡父の代より余が家に仕ふる老僕余を小蔭に招き寄せ竊かに告るに叔父が余等を毒殺せんとする摸樣なるを以てせしかは數年來の忍耐も此に至て最早繼續する能はず意を決して其顛末を老邁政府

に訴へたるに腹黒の叔父は兼て斯る事もやらんかと充分手配せしものと見へ余等は逆捻に誣告を以て嚴責されたり是より以後叔父の酷薄益々甚しく到底堪へ得べきにあらざれば或夜竊に老僕と示し合せ妹と三名其家を出奔せしに天は余等の不幸を憐まざるか余は辛ふして虎口を脱れたれども妹と老僕は端なく叔父の家人に見咎められ哀れ其場に於て捕へられたり偕て余は幸に虎口を脱れたるもの、兼て老僕より聞き居たる落着先を勿卒の際とて全く忘れ何處を當と定めもなく暗に乘して奔りしが夜明けて見れば身は是れ原野の中に孤立して問ふに人なく行くに道なく妹の身の上老僕の事なぞ想ひ起されてしかすがに便なき身の愈々憂を重ねたれば茫然天を仰て何とぞ知らず只暗涙に咽び居たり折柄一老僧二人の沙彌を隨へて通り掛り泣居る余を見て懇ろに其由來を尋ねられたれば余も包ます身の上の一伍一什を物語りし處老僧は甚く余が不幸を憐み兎に角我が寺に來れかしと伴ひ歸れしは則ち此「タッロア」寺なり余は其後本寺の沙彌となり日夜恩師に仕へしが師の遷化ありし後不徳ながら其後住となり今は斯く安穩に暮し居るなり人傳に聞けば老僕は終に叔父

の爲めに打ち殺され小妹は其後與しき農家へ送られたりと嗚呼觀すれば夢の世なり榮華得失實に是れ泡沫夢幻と昔を忍びての長物語に二坊も坐るに法衣の袖を絞りたり鐵脚曰く御物語に依りて御素性も承知致し嘸かし御殘念の事と恐察仕れり併し佛家の所謂前世の宿業と諦め給ふより外詮なかるべし扱又貴僧が其頃の御住處は那邊なるや令妹目下の御居處は御承知なさるかどチヤンミ一師は答て當時の住處を物語るは聊か差支なきに非されと御免を蒙りたし尙ほ妹は是より遠からざる處にありと聞きたれ共と云ひ掛けて何か思ふ處あるものゝ如く長の旅路の御疲れをも氣に懸けず心なき長物語に嘸や御退屈なりしならん去來御息あれかし余は此れより看經を始むべしと沙彌を呼んで其用意を命じたれば二僧も左れば明日再び御目に懸るべしと辭して本堂に歸りたり本日の行程八哩餘

廿三日晴 二人の役夫に案内せられて旅程に上る道路は目下新造中にて其幅三間より四間に至る十時頃ウエンチヤン市に達し直に佛蘭西政廳を訪ひコンミセールモ一ラン氏に面會す氏曰ふ昨夕ノンカイ市より貴僧等の事を申來れりとて

待遇頗る厚く事務官ボアレ一氏亦た席に列れり少時して屬吏は坊等を當市第一の寺院シーサケ一寺に導けり院主ニヤクラカン僧正又能く坊等を優待す午後第三時頃二坊は再び政廳を訪ひしが長官事務官どもに不在なりしを以て寺に歸れり此日近隣の寺僧七八名も來訪し種々面倒なる挨拶に日を暮し更闌けて寢に就けり本日の行程二哩に過ぎずして殆ど村落續きなりしウエンチヤン市は涓公河の北岸にして北緯十七度五十五分東經百二度三十五分の處に位せり一千餘の人家岸に沿て東西に軒立し佛蘭西語學校ありて無月謝の教授を爲す聞く處に據れば本校に入りて稍々佛語を解するに至るものは直ちに採用して地方の屬吏に充つと人口は約一萬(丙支那人二百に満たず)に及ぶと云へり別段市街の体裁を爲さずと雖も佛國政廳あり政務を取れり政廳長官ビユルモ一ラン氏年齒三十四五印度支那地方(重に安南東京等)に在ると十年老總に在ると殆ど三ヶ年能く英語に通じ又老總語を練る長身瘦軀才智眉宇の間に表はれ一見して尋常人ならざるを知る之をマッセ一氏に比すれば彼は豪邁にして此は智略に富めりと評すべきか

「コンミセール」は其地方に於て行政司法の二權は素より兵權をも掌握し恰も日本の地方長官にして裁判官師團司令官を兼ねるが如し氏亦たマツセールの如く老嫗を著せり又當市に九個の寺院ありて其廢頽せるものは佛國政廳より材料を給し居民に嚴達して之を修繕せしむるといふ

廿四日登 本日は政廳長官モ氏より午餐を供したしとて強て一日の滯留を申越されたれば二坊足休めを爲す事に決し早起ニヤクラカン僧正其他八九名の僧と共に托鉢を爲す是れ上部老嫗に入り始めての托鉢なり當市家屋の構造概ね暹羅に同じく又商店と目す可きものは僅に十四五軒に過ぎず他は悉く農家なり産物は山藪製の絹及び米穀にて其他見るべきものなし正午頃院主ニヤクラカン僧正を伴ひ政廳に赴く長官及事務官等出て迎へ直ちに食堂に導きて盛大なる饗宴を開かれたり主客五名談話漸へずモ氏頻に二坊の行を賞し暗に僧正を諷して奮起せしめんとするものゝ如し尙ほモ氏は二坊が眞正なる僧侶にあらざる事を看破せしにや語次往々外交并に軍事の及びたれば坊等は化の皮を剥れんとを恐れ巧みに談話を切上て政廳を辭し寺に歸る此夜又僧侶數名來話せり

廿五日晴 院主ニヤクラカン師に別れを告げ滯在中の辭を述べ去て佛國政廳に出頭して旅券を受領し茶菓の饗應など受けて前十時ウエンチヤン市を發すモ氏屬吏をして二坊を市外に送見送りしむ行く數哩二三土人の路傍の樹蔭に團坐して竹筒の水を傾け且つ飲み且つ語れるものあり二坊は立寄りて少量の水を請ひ受け且つ其群に入りて彼等の語る處を聞き坊等亦雜談を爲して其喜びを買ひしか中にも頭立ちたる一人頻りに佛國政廳の施政を賞賛し此地の嘗て暹羅領たりし頃官吏妄りに我等を虐げ苛重の租税と人頭税を徵收するを務めどなし人民の休戚は殆ど知らざるものゝ如くなりしかば盜賊叢橫行し人を殺し財を掠め居民安き心はなかりしも佛蘭西の領地となりてよりは四圓八十錢の人頭税を二圓に減せられたるを始めとし其他の諸税も大抵廢せられ加之三十人乃至五十人の兵士時々巡廻し來りて惡漢を捕拿すればさしも甚しかりし盜賊も今は全く屏息し夜戸を閉さす途遠たるを拾はず具に太平の世と成れりと以て暹羅政府施政の如何を知るべきなり

午後五時クンラサイ府に着す寥々たる寒村戸數統に八九個村の入口に廢寺あり

屋根半は破れ柱梁亦傾きて朽床歩むに堪へざれとも露臥に勝る萬々なるを以て此に一夜を明すとせしが村民中坊等の之に入りしを見たるものありと見へ五六名相携へて來り拜し擧云ふ様本寺は一昨年迄二名の住僧ありしも突然去て今に歸らす爲めに荒廢に任せて顧みざりしが貴僧等にして若し此處に留杖し玉はんとなれば明日にも村民協力して修理すべしと最と懇に申出たり坊等は例の通り間に合せの挨拶を爲し彼等の捧げ來りし煙草甘蔗等を味ふ内年給十七八の婦人似茶と砂糖とを携へ來り恭しく之を二坊の前に供し一禮して去れり其容貌の秀麗なる進退の穩雅なる何となく他土人に異なる處あれば呼止めて其素性を聞かんとせしも僧の身として妙齡婦人の身の上を糾すは憚る處なきにあらずと其儘に黙し居しに同じ思ひの三無坊は暗に鐵脚の心中を察し朽床に踞して餘念なく坊等に話頭を向け居る一老人に向ひ徐ろに彼女の來歴を尋ねたるに彼は俄かに鼻打かみ涙片手に説出る様彼に就ては哀れなる一條の物語りあり事長くも聞きねかし想ひ回らせば早や十年の昔とはなりぬ頃は二月の末つかた吾は或る朝秣刈りにと只一人竹籠を肩に野に出しに行途に當り頻りに子供の泣聲の聞へけ

れは往來斷へし此曠野然も今明放れたる許りの此曉に子供の泣くは不思議なりと聲を知邊に辿り行きしにコハそも如何に五十餘りなる農夫体の男が半刀半刀は丈け二尺許の刀にて土人は何れも之を帯びて護身器とし又竹木を伐り或は建築の用にも供せりにて處撰はす斬り殺され其側に六七歳の女兒ありて前後も知らず泣き居るにそ吾も一時は餘りの慘狀に恐怖して魂も天外に飛ばんばかり少時は茫然爲す處を知らざりしか良久して人心つき何は兎もあれ小女を救はでは叶はずと恐るく死体に近き泣叫ぶ兒を宥め賑かし百方其始末を尋ねたれども何を云ふにも頭是なき小兒のとどて只た他處の人か五六人追掛け來て箇様に老爺を殺したりと云ふに過ぎず到底其顛末を知り難ければ取敢へず其兒を村迄連れ歸り村長とも談合して先づ老夫の死骸を埋葬し又女子は子のなき村人の懇望に任せ其家に養はしむるとせり而して其後屢々家處并に父母の名を尋ぬるも老爺の言付なりとて更に語らず然れども當時着用の衣類を見ても由緒ある人の兒なるとは疑なく老夫は察するに其家僕にて盜賊若くは遺恨あるものゝ爲めに慘死を遂けたるものなるべし又女兒は名をレンと呼び一人の兄あれば之に違ひ

たしと十年一日の如く言ひ暮せり今の婦人は其の女兒なりと
 二坊は共に充分老嫗語に通せされども老人の熱心なる物語に依り前後を結合し
 て前記の事實を解し得たり而して坊等は互ひに顔見合せ義にチャンミー僧正が
 一人の妹ありて此邊の貧家に養はれ居ると云ひ此婦人は一人の兄ありて頻りに
 慕ひ居ると云ひ彼是タツロアン等に於る同僧正の物語りに符合する處あれば坊
 等は今更の如く其不幸を憐み再び法衣を濡したり扱二坊は談合の末彼婦人に兄
 僧正の居處を告げやらんとしたりしかども僧正の心中計り難く又爲めに如何な
 る事情の發し來りて却て彼女の上に不幸を重ねしめんも知るべからずと先づ書
 面をチャンミー師に送り兄妹の再會を勸むるとし彼老人を止め置きて竊に一
 伍一什を語り聞へてチャンミー師に會ふ迄の秘密を守らせし三無は勿々師に充
 てたる書面を認め老人に托したるは其夜の十一時過なりし此日の行程八哩餘
 廿六日晴 一ヶ年前よりの廢寺に高僧の宿泊ありたるとして朝來供物山の如く
 彼の可憐なるレン子嬢も他の田夫野婦と共に無邪氣に奔走周旋せるを見たり午
 前八時クンラサイ村を出で正午一大池の岸邊に到る只見る三名の行商荷物を卸

し面白氣に釣を垂れ居るあり坊等亦其側に行李を下し腰打掛けて憩ひしに一つ
 二つの話しより何時しか心安くなり彼等の行く先を尋ぬればカシ市の方向なり
 と云ふ坊等も亦た同市を通過するものなれば頓に同行を約したるが是を他日の
 大失敗を來す原因ならんとは神ならぬ身の知らざりしなり馳て池邊を發し明日
 の都合なりとて三時頃ナカ村の寺院に投宿す同行々商の言によれば此邊片皮
 一枚三十二三錢なりと行程六哩餘
 廿七日晴 僧俗五名の同行は四方山の話の中に十哩餘の森林を通し午後五時頃
 ドンサイ村に着し寺院に投宿す行程十三哩餘
 廿八日 夜來行商の一名胸痛に腦みしか例の「キニーネ」コロダインを投して奇効
 を奏したり併し爲めに出發を後らし寺院を出しは午時を過る頃なりし薄暮ボン
 ニアン村に着す此日の通路は極めて平坦なりしか徒渉すべき細流沼澤頗る多く
 草鞋を穿つに遠なかりし行程八哩餘途中土人の語る處によれば佛國政廳の命を
 奉し電柱材一本を伐り出せは一末凡六十錢を給せらるど
 廿九日晴 暹羅老嫗の僧侶か無學無識なる事は前已に記せり然れども流石經文

丈は孰れも習得し無意味に暗誦せる爲め今日迄讀經に差支ふる僧侶に出會はざりしが今朝一笑事こそ出來したり二坊は例により寺僧一名と共に前庭に於て托鉢せり老嫗の俗托鉢の後讀經するを例とすれば三無坊は得意の心經を唱へ鐵脚坊は例の大津繪經を誦ひしに先達の和尚は半途にしてお經の文句を忘れしと見へ顔色宛然土の如く左顧右顧頗る狼狽せし体なれば餘りの可笑しさに鐵脚思はず失笑せしより施主の一人氣の毒トヤ思ひけん大聲にて彼僧の行き詰りたる經文を續け導き和尚之れに力を得て夫よりは何の苦もなく讀み終りたり二三の小村落を通過し一小山を越へ午後三時頃ボンシー村に着す里程十一哩コラツトを出てより今日に至る迄坊等の通過せし處多少の森林なきにあらざれども概ね平坦開潤にして田畑も亦能く開けたり

三十日晴 本日は此邊にて有名なるパー山を越ゆる日なるを以て味爽起て行厨を謂へ二哩許にして山麓に達すパー山は上下十五哩にして猛虎の巢窟と云ふを以て稱せらる此時朝霧四邊を鎖し數尺を隔て、同行者を辨する能はず彌々登れば霧愈々深く坂路益々急に一步を過れば數仞の深谷に顛落するを免れず辛ふじ

て我々たる小徑を辿り或は岩角を攀ち或は樹根に縋り其山巔に達したる頃は太陽僅かに濃霧を破り樹間に不時の電光を現はし來れり

驟雨に似たる朝露に恰も濡鼠の如くなりたる一行は僅かに山險を凌ぎて此に再び水厄に遇へりソングツクと稱する洲公河の支流に係り幅五六十間深さ乳を洩す僻遠の山中素より渡舟のあるべき筈なし乃ち一行悉く裸体となり行李は或は頭上に縛し或は肩頭に懸け前後徐々として中流に進みしか淺きも腋を没し深き處は胸邊に達し分けて中央は流れ急に水深きに折しも三無は風の爲めに笠を奪はれ二三間後れて進みたる鐵脚の前に飛來りしが此時の鐵脚の行装は法衣はたゞみで頭に戴き鐵鉢と行季を一荷として左手に捧げ右手に長き竹杖を携へ居たりは俄かに之を如何ともする能はず歩を止めて杖を左手に持ち添へ右手を延て笠を取らんとせし刹那元狂ひて横さまに倒れしかは今は三無の笠はものかは自分の生命の危ければ思はず知らず救を呼べり此体を見る行商等は或は來て鐵脚を援け或は笠或は荷物と各手近の働きを遂げ先は無難に前面の河岸に達するを得たり此の騒は獨り鐵脚か不幸に止らす一行殘らず荷物を濡したれば河岸に

上りて之を解き日光に焚火に乾しつゝ、五個打揃ふて水中に狼狽せし体を語合ひ果は一大笑に終りたり此時偶ま二個の土人より成れる一漁舟の網を投しつゝ來るに會ひ三無は乞て大さ尺に近き鯉に似たる魚三尾を得ければ一行大に喜び燒きて午餐を爲し再び一山を越えて午後五時頃ナボーム村に達し廢寺に宿す此日の通路は東南より西北に向て進み二山一河を越て行程も殆ど十六哩に近く頗る疲勞を感じたれば水浴を取るの勇氣もなく日没後直ちに寝に就けり

三十一日晴 徹宵の安眠未だ昨日の疲勞を醫し了らずと雖も苦痛を忍て出發し又候山路に分け入れり坊等も此頃は日に旅慣れて足も堅まり居たるが昨日の險阻に又候二三の血腫を踏出し行歩頗る困難なり漸くにして正午頃トントン村に着し某寺院に午餐す側に一老翁あり懇に坊等の來路往道を問ふ坊等仍てウエンチヤン市よりカムシー市を経てルアン普拉バン府に行くものなりと答へけるに翁は訝氣に眉を蹙め同行の行商を見遣りつゝ扱て言ふやう此人々を措て斯く申すは異なるものなれども抑もウエンチヤンよりルアン普拉バンに至るには二道ありて一は平坦にして四五日程近く一は險難にして四五日程遠し貴僧等は彼坦に

して近を捨て、此險にして遠を取られしは何の故乎今日迄の處は險惡とは云へ左迄にはあらざれども前途の困難は其幾層倍なるや知る可からずと

黙して之を聞き居たる鐵脚は大喝一聲鐵拳を振り上げ行商を執へ罵て曰く咄奴輩汝等何の恨ありて我等を此窮阨の地に誘ひし答辯に依りては此鐵拳一百を喰はせ聊か自ら慰むる處あらんと叫びたるに彼等は駭々色を失ひ曰く實は我等も此道は始めてなれば出發の際隣人に就て尋ねたる位なり毫も惡意を有して貴僧等を導き來りたるにあらずと低頭平身罪を謝し三無も亦老翁と共に鐵脚を宥めければ漸くにして怒を押へ此上は進行の方向を定むるが必要なれば更らに老翁の意見を叩きたるに彼は黙考の未答けるには貴僧等是より引返して本道に出んとなれば其本道の岐路にまで四日程を要し夫より更らに三四日程進まさればウエンチヤン村に達する能はず又此方向の前進を續けナーヤー村の間道を行けば先にも云へる如く道路は極めて險惡なるも四五日程を歩いてウエンチヤン村に出るを得道程に於て前後七八日の利益あるべし其何れを取らるゝも貴僧等か意の懸ふ處に従はるゝを可とす此に於て坊等は相議して曰ふ假令へ前途如何に險

惡を極むるも兎に角人間の往復する道なれば進行し難きとはあらざるべし況や再ひ四五日程を引返し空しく時日を費すの愚を學ぶの拙なるに比するに於てをや去來運命を天に任せ奮發一番前途の險惡を踏破すべしと老翁に對して厚く謝辭を述へ行商と袂を分ちて西北に向ひ再び重き足を運べり行商等は本道に引返せしか夫れども此道を進みしか終に其消息を得ざりし四時過ぎナーン村に入り寺院に宿す行程十二哩院主は恐に坊等遇し爐邊に蒲團を敷きて坊等を坐せしめ似茶を進めて雑談に時を移せしが院主の談話中此邊猛虎甚た多く一週に二三回は必ず村内を襲ふて人畜を脅かせり尤も幸に人の害を受たるもの未だこれなしと雖も牛馬豚犬の擧み去らるゝもの其幾頭なるを知らず故に村内各戸とも鳥銃を具へ家畜の飼養場には嚴重なる垣を作り以て之に備へ居れり拙翁も一頭の犬を養へるが夜は常に屋内に臥さしむると其言未だ終らざるに尤然一吼猛虎は前面の山中に跳り室の一隅に退縮せる寺犬は悚然呻吟の悲聲を放てり此時に於る四邊の動靜を窺ふに牛馬豚犬の悲聲寂寥たる天地を破り來り次て世間何となく騒がしく之に續て來るものは處々に起る砲聲にて院主を始め他の寺僧迄終

に起て小窓を排し暗中屋外を窺ふに至りしか間もなく砲聲も止み尋て豚犬の悲鳴も次第く薄らぎ來り僅かに敵の圍中に在る心地して就眠せり
 二月一日時 本日は十餘哩に亘る溪谷を跋渉せざるを得ずと聞き及びたれば其心組にて未明に寺を立出て紅餘せる樵路を過ぎて直に一溪流に會ふ溪流を徒渉すれば前面忽ち嵯峨たる岩山來り僅かに岩山を越ゆれば轟々たる谷川又迎ふ坊等も始めは左程迄に思はざりしか愈々行くに隨て彌々困難を層倍し來り谷川の如きも幅十二三間餘り深さ乳に達し急流失の如きもの往々あり殊に困難を極めしは水底の岩石尖錐状をなし一步は一步より足裏を刺し驚行を學ひて前岸に達するにありき夕陽樹梢を照す頃辛ふしてケン河の上流に出でしか此河幅二十間に達し深さ兩肩を浸すに至りしかば坊等は囊にリツク河を渡りし行装を爲し漸く向岸に達せしも脊丈延たる萱草は行路を埋め何れに行きて可なるべきか其方向さへ別け難く裸体の二坊は少時茫然施す處を知らず世に所謂途方に暮るとは實に坊等か現況を云ひしものなるべし三無僅かに口を開きて云ふ猛虎の巢窟なりと呼べる此山中を別けて日没後進行するは危険なり今宵は再び後岸へ引

返し川原に露宿するに加かずと鐵脚も此譚に同じ又もや深流を涉りて東岸に返りしが此に一の難儀といふは鐵鉢中餘す處の米は明朝の一飯に充るに過ぎず然るに斯る山中に彷徨して空しく日數を經過する時は行途の艱難に加へて餓餓の困厄來るは必然なれば此の如き場合に處するは只前進の一策あるのみ加かず今一度彼岸に渡り突進萱草を掻き分けて行途を求め差し得ざる時は其場に露宿し一步でも前村に近きて鐵飯の厄難を免るべしと又々ケン河を渡りしか若し人ありて此有様を見たらしかは恐らくは二坊を以て狐狸に魅せられたるものと思ひしなるべし

此時に當り日已に暮れて四方薄暗くなりたれば二坊は萱草を集めて幾多の松明を造り行途を照して只管西に向ひ進みしか天幸にも萱原は約一町餘りにて盡き且小蛇の如き一小路の西北に向ひて蜿蜒するに會ひしかば此時の坊等が喜ぶは實に譬へんものではなく行くく松明を造りて尙ほ頻りに進みたり行く數町又一溪水に出會ひしが當時は最早困難と疲勞の度を通り越し殆ど機械人形的の二坊は無意味に足の運ぶに任せ只何となく溪水を涉り午後八九時と覺しき頃哀むべ

し又々茫々たる萱原に辿り入れり此に至て坊等も失望の餘り斷然露臥するとに決し之が準備に取掛らんとせし折柄遙か向ふに微光ありて螢かと思はるるにさばな

くて折節萱間を射來るに會へり一旦全く消盡せし二坊か氣力は之か爲めに再び揮ひ起され火光を當途に四五町を辿れば嗚呼神助か佛助か荒原中一の假屋ありて内にて柚人体のもの三名燈を圍で何か頻りに喋々せり

非常の喜びに打たれたる三無先つ入口に立ち聲高らかに云ふ様我々は山路に行暮れたる旅僧なり一夜の宿を報給あれと彼等は突然の呼聲に打驚き兎角の返詞もなかりしか其ありて坊等を異の僧侶と認めしと見え我がか起ちて坐を與へ湯茶杯酌みて心限りの饗應を盡し呉れ於是坊等始めて蘇生の思ひを爲したり此日は拂曉より十五六時間を間斷なく歩行せしに拘はらず柚等の云ふ處によれば其通過せしは僅々八哩に過ぎずと如何に其行路の險難なる又坊等が疲勞の甚敷か讀者宜しく察すべきなり

二日晴 朝餉の支度調ひて山腰は坊等を揺起せり乃ち手洗口嗽きて食事を終り夜來の禮を述べて立出んとせしに彼等の一人用事ありてナヤナ村に歸るとの

事なれば二坊は之に案内を頼み山又河又山を跋渉して一高山の頂上に達す是より或は峻坂を下り或は空谷を亘り油繪的連峯の間を辿りて正午ナヤイチ村に着し寺院に投す里程七哩餘院主懇ろに勸めて曰く前途三個の險山あり加ふるに此の間人家稀に特に虎害の恐るべきあり現に二ヶ月前五名の行商虎に襲はれ一人は傷き一人は殺されたり貴僧等今日は本寺に休息し明朝勤めて發足するれば夕景にはウキンヤン村に達するを得べしと昨日の難路に懲果たる二坊の争で此の勸告を容れざらん直に厚意を謝して此に一泊するに決す寺僧又起て大鼓を撃ち珍客の來院を村民に報す客僧來れば太鼓を撃ちて村民に報し供物を捧げ來らしむるが此邊の風習なり須臾にして村民の一群二三の大籠に飯或は菜物を盛り擔ひ來る飯は例の糯米にて菜は青苔唐辛小魚名も知れざる葉の蓑付等なりしが就中一鷺を喫したるは青蛙油蟲野菜の三品より成る吸物にて皮の儘なる丸煮の蛙か手足を締め白き腹を露出し仰向きに汁の中に浮び居る様は一瞥嘔吐の氣を催ふし俄虎に似たる有繫の二坊も箸を投して閉口せり食事終りて臥床に就き稍々快夢の來らんとする頃本堂の方に當りてドン／＼カン／＼の響俄かに起りた

れば何事ならんと寺僧に問へば這は村内の少女が寺内に集り錦太鼓を叩きて熨むものなりとありたれば三無諸共本堂の方へ行き見しに十四五より十七八歳の村娘秘藏の腰巻に上衣を被り土耳古形の帽子絹又は木綿片にて巧に折りたるものなりを戴き其數無慮十二三人或は太鼓を打ち鐘を叩き鏡鉢を搥る等己か知る得意の技を演じ坊等か耳には錯雜紛擾壺も聞くに足らざれども彼等は左も面白相に飽くとを知らず興に乗して遠來の珍僧か客間にありて迷惑し居るをも顧みず終に翌曉の二時頃迄戯れ居たり此に一の不思議なるは此間一名の男子も來らず又一人の老婦を交へず悉く皆妙齡未婚の婦女のみなりし

三日曇 曉露を踏んで程に上れば涼風徐に法衣を吹き快味云ふ可からず行くも未だ二三哩ならず一の險山に會ふ是より或は上り或は下り溪を渡り小徑を辿り午後五時頃ソソ河の畔に出つ此河亦た涸公の支流なり幅三十間餘深さ腰に至る徒渉して彼岸に登り沿岸を行く十五哩餘ウキンヤン村に達す一月廿七日誤て岐路に入り今日に至る八日間幾多の艱難辛苦を嘗めて此に始めて本道を踏むを得たり當村戸數二十四五想ふに近邊の大村なり此邊水を酌むに桶を用ひず竹筒又

は狐を以て代用せり行程十五哩餘

四日曇 本日よりは郵便線路を北に向て進むとなれば昨日迄の行路に比すれば
 峻易の差箇に霄壤のみならず行途斷續人家あり三々伍々往來の人を絶へず又日
 ならず電線を架するもて電柱建設の準備を爲す等數日間人跡を絶へる山間を經
 過せし二坊は見ゆるもの間くものに愉快を感じ久敷振にて土人の惡口は口を突て
 出で其極三無が得意の名古屋甚句を聞く迄に至れりハボ一村を初めとして三四
 の村落を打通りソソ河の左岸に沿ふて兩山の間を進む此間奇峯異嶺新陳代謝し
 風光の絶佳なる殆ど應對に暇あらす後四時過タバン村に着す十四哩餘村はソソ
 河の右岸に在り此の附近に有名なる金鑛ありとは豫て耳にしたる處なれば土人
 に就て其在所を尋ねたれども坊等の聞きし人には之を知るものなかりし

五日晴 タバン村を發してより或は河岸に出て或は山路に入り谷を亘り水を越
 へしも流石は郵便線路丈ありて道路の体を存し居れり正午頃後方より足早に來
 る三名の旅人あり彼等は坊等と同じく今夜ポンブツク村に宿するとのとなれば
 乃ち同行を約し雜談しつゝ一森林へ入りしに一匹の小鹿大樹の陰より飛び出し

一行の前を横りて谷間に向ひ馳せ行けり之を見たる旅人等は大に勇みてヤ一鹿
 が出たソレ追へアレ殺せと勢銳く追逐せしか鹿の運や惡かりけん彼は奔湍を起
 ゆるを得ず頭を回らし引返さんとする處を三人等しく追纏り終に之を撲殺せり
 彼等は交るゝ獲物を擔ひ意氣得々ポンブツク村に着せしが如何なる譯か此村
 は往古より他村人の宿泊を禁ずるとて村内に入るを許さず村外特に小屋の設あ
 りたれば一行は止むなく其處に入り鹽麩の鹿に空腹を肥せり行程十四哩

六日曇 早起托鉢を爲せしも他村人入る可らずの村規は僧侶なりとて之を許さ
 ずと堅く執つて動かされは同行の旅人より一片の鹿肉と少許の鹽とを買ひ受け
 前途食に有付く處まで進まんと早々にして小屋を立て問もなくハサン村に入
 る路傍に一貧寺あり院主は今しも托鉢を終り將さに朝餐に向はんとする處なり
 しが二坊の入り來るを見て朝餉の濟みしや否を問ひし故未だ食前なりと答へけ
 れば然ればとて先づ坊等に饌部を供せり仔細に見れば食は院主と沙彌との二人
 分にて之を食ふは心なき業に似たれども背に腹は代へられず無遠慮にも喫了し
 て同寺を飛び出し正午頃ナテン村に着し一寺院に投ず里程六哩許蓋し當寺の院

主は十日前に病死し目下沙彌のみ在住すれば暫く留杖ありたしと土人の懇情黙し難く此に一夜を明すとにしたれば斯くは早刻に投宿せしなり

七日晴 ナテン村よりカシー市に至るの間は概ね山間の踏路にて又稀れに田畑を見たりカシー市は戸數二十に満たず寥たる一村落のみ然るに之を市と稱するは蓋昔時は繁なる市街なりしが故なりと午後三時ナバー村に着し一庵寺に投す此夜偶々一暹羅人尋ね來れり彼は嘗て英國人に従ひ暹羅内地の地圖を製する爲め北境を跋渉し後久しくルアンパン府にあり兩三年前より此村に移住せしと云ふ暹羅人彼れ前途の景況を説く極めて詳密なりし行程九哩餘

八日 朝來濃霧咫尺を辨せず其の晴るゝを待て十一時出發有名なるラチピー山脈に入る此日山河を跋渉し夕陽に至りて尙人家なし山中に露宿す行程八哩餘此邊の旅人は銅釜を携へず何れも竹を以て飯を炊き或は汁を煮る其法大なる竹を一節置に切り其上部へ糯米を入れ適當に水に浸して焚火中に立つるなり竹筒の大小に依りて遲速ありと雖も二十分若くは三四十分にして強飯を炊き得中部に水あれば竹筒の焚け損する憂なし

九日晴 今日には是れ本街道中第一の高山ラチピーの首嶺を越るの日なり聞く處に據れば土人の健歩と雖も日中之を越るものなく剩さへ虎害に遭もの往々あれは旅人は此嶺を稱して危難山と云へり南麓より北麓まで上下十五六哩の間一軒の人家なく又一滴の水もなしと此に於て竹筒には充分飲水の用意を爲し旭日未だ上らざるに曉霧を破て發足し坂の小口に差掛りしか聞きしに勝る峻坂にて國道の事とて巾の廣き處は四五米もあれ共處としては茅茨繁茂して道を埋め藜藿たる大樹は空を覆ふて晝尙暗く搗て加へて黎明の事なれば置殘る夜露立置むる朝露は心なく法衣を濡ふし左なきだに苦しき旅に一層の哀を催さしめ杖を力に辿り登りて漸く山嶺に達せしは恰も午後一時頃なりし嶺は灌木に茅茨の類を雜ゆるのみにて一の蔭なす樹木はなく輝々たる日光坊等か巔頭を直射し時に眩暈せん計りなりしも又折節涼風の來るあれば之を力に岩根に憩ひ暫く息を休めたり此時一天晴渡りて凝雲の目を遮るなく眼界萬里幾千里に亘りたる大樹小樹は煙霧縹渺の間起伏蜿蜒し其狀恰も波動少なき青海原を見るか如く豪快實に言ふ可らず少憩の後山嶺を下る降り坂は上りに比して勾配稍緩なれども道程は長

し午後五時過ぎ北麓に達し是に露宿す里程十五哩許是より先鐵脚誤て頭顛し其際鐵鉢の米を半は失ひしかは無入境の旅行心細さ言はん方なし去迎詮術あらざれば三無の愚痴を耳にしなから少量の砂糖粥に飯を満し谷水に沐浴して寝に就かんせしか虎害の噂高き街道なれば之を防ぐ爲めに枯木を集め三處に焚火して二坊は交代する火の番を勤めたり

十日晴 人は云ふ餓渴と鐵脚は實験に依り文字を顛倒して寧ろ渴餓と云はんとす餓は一日位は之を忍ぶを得べし炎熱燃るが如く加ふるに熱帯地の峻坂を上下するもの半日も喉を濕す水なくしては堪られず且這般の旅行中最大唯一の希望は何かと云へは食ふと飲との外に出す百萬の黄金も細腰の美人も又裁裁たる金殿玉樓も餓渴に惱める坊等には一點何等の風情なし此紀事中飲食に係る事柄の多きも自然其勢に駆られたるに過ぎず閑話入題早起して一握の粳米を粥に煮立て腹半分は満たしたれども不幸にして此日の中に人家ある處に至らざれば餓に迫るは必然なり蹶起せよ足の續く限り走らんと溪水に沿て西北に向ひ峻坂を攀り溪流を徒渉すると例に依て例の如く山腹の狭路兩足を並べ難き處は樹根岩角

に縋りて進み激流奇巖を嘯む處は飛沫に法衣を濡はせ仰げば危岩頭上を壓せんとし臨めは千仞の深壑足下に在り急坂を上下する二十餘溪水を渉る十有八午後四時に至て儘かに平坦の地に出たり此時坊等は少量の朝飯業に已に消化し盡して谿水の下腹にゴボク音を爲すに過ぎれば疲勞の度頓に勢を加へ今は一步も進み難く止むなく土上に困坐して其塲を今宵の露宿と定めぬ折しも路傍の草原より二村童現はれ來り一は草籠を負ひ一は水牛の背に横さまに坐す其情景一幅の古畫に似たり之を見たる二坊は疲勞も餓餓も打忘れ其側に立寄りて人家のある方を尋ねたるに牛背の童子遙に前方を指し彼處に見ゆるはラナビー村にて是より五六町に過ぎず我等も同村に歸るものなれば御案内いたすべしと又佛法を崇拜する俗は兒童の心をも化し了し僧と見れば敬ふべきものなりとの性を備へたれば坊等の疲勞せる姿を見て健氣にも水牛を勤め背合せに二坊を乗せて嬉氣に村内に導き一寺院へ案内して歸り去れり行程十三哩餘

十一日晴 今日は是れ我皇祖神武天皇の即位紀元節に相當すれば味爽起て水浴し遙かに東天を拜して皇運の無窮を祝し奉れり又此日一日當村に滞在し村實と

して大變應を受けしか其由來を説けば下の如し
 昨夜投宿間もなく一婦人の狂犬に噛まれたるものを連れ來り之れか治療を乞ひ
 たれば鐵脚は忽ち醫伯を氣取り兼て聞き覺へ居たる黒砂糖を本劑とし「カミン」黄
 色のものにて冷劑に用ゆ其他の藥味を混化して與へたるに不思議にも之を塗る
 と間もなく苦痛を減したれば舉村俄かに信仰心を増し供物を捧げ來る山の如し
 此に於て紀元節に祝する旁々數日の疲勞を休むる爲め一日滯留するとはなせ
 しなり終日村人交るく來訪し其言ふ處によれば明日の行程に一高山あり「カサ
 ック」と稱し峻峻ラナビーと伯仲せり又村端を流るゝ河はカン河に續き之に筏し
 て急流を下らば直ちにルアンブラバン府に達すべし而して陸路を取れば四日程
 を要し水路に依れば二日程を出すと若し之が普通の旅行なれば無論陸行の險を
 捨て、水行の易を取るか適當なれども元來坊等は徒步旅行を主眼とし行くく
 土地の風俗人情物産兵事等を觀察する目的なれば村人等が懇切に筏行を勸むる
 に拘はらず山路を徒行するに決し就眠せり
 十二日曇 黎明行李を裝ふて直ちにカサツクの南麓に進む此時曉霧全く晴れ日

光直射して炎熱堪ゆべからず道の峻峻亦多くラナビーに譲らす途中二群の土人
 に逢ふ一は老總人にして一はカー人なり
 「ラナビー」山より北方老總の地方に「カー」なる一種の人類あり骨格に於ては別に
 老總人に異なるなしと雖も言語は全く相通せず女子は腰巻の上部に黒色の「コ
 ー」を着し長き頭髪を不規則なる束髪として鈿様のものを挿み男は年中裸体
 にて一帯の極其陰部を掩ふのみ其女子と同じき長き頭髪は小櫛に依り頭上に
 束ねられ男女共に裸足なり身体強健山谷を行く平地の如く其輕捷なる猿猴の
 梢を且るに異ならず文字宗教共に無く只た奇体なる土偶を作りて祭れり好ん
 て山中の高處に住し糯米と獸肉とを常食とす別に職業なし獸獵又は伐木を以
 て日を送る性質は純良にして能く事に堪へ坊等時々之を人夫に雇ひしか手眞
 似の談話も能く解し甚だ愛らしき人類なり
 是より先き三無の顔色常を失ひ呼吸急しく頗る困難の体なりしが午後二時頃
 至りて愈々劇しく「キニーネ」寶丹も其効を奏せず脈搏急に熱度高まりたれば鐵脚
 の心痛一方ならず何は兎もあれ一時も早く人家ある方に進んと諫め勵まし坂路

を下り五町行きては足を止め十町歩みては休息し果は三無の荷物を一纏めとし
て鐵脚之を擔ひ羊腸たる坂路を下り辛くも北麓に達せしは晩別の峠に歸る頃な
りし此時三無は路傍の草上に打倒れ氣息奄々容体次第に悪しく鐵脚は勞はり
まして是非とも前村にまで進まんとすれども三無は呻吟一步も進み難しと云ひ
終に僕が此に死するは天命なり此行草原の露と消ゆるは發途當時に豫期せし處
なりと叫ぶに至れり此に至て鐵脚も大に狼狽し大樹の下に草を敷き此に三無を
臥さしめて己が毛布を併せ被ひ更に「キニーネ」を與へて解熱を試み傍ら虎書を防
ぐ爲めに焚火を初め又湯を沸し粥を煮て僅かに夕餐を終りしは夜の九時過にて
もありしならんか此夜は三無の看護と焚火との爲めに徹宵を合さず三無が苦
痛に煩悶せる唸き聲を聞く時は實に斷腸の思ひありし嗚呼人世遠征を企る勿れ
百年の壽命を異域の露と化し去らんも知るべからず思へば磐谷にある知人本邦
に於る一部の人等は坊等が箇程の苦酸を嘗め居るを知らず磐谷逃亡の乞食坊等
は今にも行途の困難に避易して歸來らん彼等の山は到底張り切れるものにあ
らず杯嘲り居らん過去を顧み未來を想へば轉た感慨の情に堪へず本日行程十哩餘

十三日晴 三無が苦痛の狀を見つゝ既往を思ひ將來を考ふる時は不平の念物々
禁する能はず夢幻の間終に一夜を明したるが只見れば三無に被ひたる毛布は濡
々たる夜露に濕ひて宛然水に浴したるが如し然れども彼は夜來の疲勞にスヤス
ヤ眠り居る模様なれば靜かにして容體穩かならざれば心苦さ遣る方なく起て朝
餉の用意を爲んとせしに恰も耳し北方より三人の旅人來り此體を見て懇切に訪
ひ慰め呉たれば鐵脚は昨夜來の難儀を語り又彼等か惠み呉れたる乾牛肉を小鍋
に入れて「ソップ」を作り三無を搖起して之を勧め杯する内彼等は始終病人を介抱
し此大病人を斯る山中に置くは惡念の至なれば我等の内一人此坊を負ひ參らせ
此向にテンと呼びて瘦村なからも人の住む小村あれば夫迄伴ひ申さんと甲斐甲
斐しく早や其支度に取り掛りたれば鐵脚も大に力を得て行李を肩に其後に隨ひ辛
ふして村端の廢寺に入れり扱彼旅人は三無を竹床の上に臥さしめ纏て三名の村
人を伴ひ來り其介抱を托する等其眞率淳朴なる中々文明人の及ぶ處にあらず鐵
脚は心を殘して南に行く彼の後影を拜し心中深く其高誼を謝したり夫れより村
人は何くれとなく持ち來り親切に世話し呉れたれども戸數三軒に過ぎざる山間

の貧村なれば素より滋養物のある筈なく、緩かに四個(是れも全村擧ての數なり)の鶏卵を得て三無に與へ青天井に等しき破屋の下に只管彼の平癒を祈れり

十四日晴 冷氣甚し三無少快村人交々來り訪ふ

十五日晴 滞在記すべきとなし

十六日晴 三無漸く快方に赴き糯米の粥少量を食ふ且此分なれば明日は出發を試みんと云へり

十七日 三無強て出發せんといふ仍て村人に行途の難易人家の有無を問ふに是よりルアンブラパン迄は道路平坦に且處々に村落ありとのとなりしかば終に本村を出發するに決し厚く村人の日來の介抱を謝して午前九時頃發足す道路は村人の云へる如く平坦なるも徒渉すへき小川少からず病後の三無又もや大患に陥らんとを恐れ六哩を行きて午後三時過ナバー村の寺院に投ず

十八日晴 午夜過る頃より覆盆の大雨あり出發の時は全く晴れたれども道路泥波を揚げ頗る困難せり蓋し此邊近日地方長官の巡視ありとて道普請最中なればなり玩具に等しき橋梁を架し居るかと思れば別段差障りなき路傍の大樹を伐倒

し居る等其狀甚だ奇觀なりムツ村に入る戸數二三十稍々見るべき村落なり此處にてカン河に會ふ下流はルアンブラパンに至る巖にラナビー村民か筏行を勧めたるは此河に出でしむる爲めなり午後三時頃ナバー村に着し寺院に投ず此夜村長より三無の藥料として少量の酒を贈り來る行程十哩餘

十九日晴 老總の首府ルアンブラパンに入るの日なり途中に二小山ありとのとなれば早發して緩々歩行すべしと未明に寺を出たり正午昨夜村長より惠まれたる一塊の乾肉を焙る爲め焚火を爲し居たるに後の竹叢より突然小牛の如き巨鹿飛出たれば肉も辨當も其儘に抛ち洋傘取て立向ふ瞬間一發の銃丸鐵脚の耳邊を掠め來れり愕然飛丸の來りし方を眺むれば一獵夫銃を肩にして歩み出て逃れたる鹿を逐ひ行けり此危險と騒動との爲めに肉は灰に化し飯は土上に散じ終に午餐を食ひ損せり夫れより二個の小山を超へ午後四時ルアンブラパン府に入る先つ佛蘭西總督府を訪ひ總督バツクル知事گران二氏に面會し其厚意によりて當府第一の寺院ワットマイに案内せらるる住職は大僧正グータン殿下にて厚く坊等を遇せられ一室と二名の沙彌を附せらる坊等は四五日滞在するとに決す行程十

二哩餘

ルアン普拉バン府

ルアン普拉バン府は老撾國の首府にして東北カン河に枕し西遙に湄公の大河を控へ北緯十九度五十分東經百二度十分に位す戸數四千人約三萬佛蘭西總督府を始めとし郵便電信局學校兵營等あり學校は首として佛蘭西語を教へ目下教員は佛人安南人各一名生徒は四十人なり兵營には百五六十人の土兵在營し尙ほ二千人は當府近傍に散在し孰れも佛國政廳に附屬す此外に老撾舊王の宮殿あり寺院の如きは其數無慮五十の上にあり

總督をバツクルと云ひ(本春更迭ありて目下ラリス氏總督たり)上老撾全体佛蘭西新殖民地に於る行政兵馬の兩權を握る府知事をグランと云ふ他に文武官軍醫等合して十四名ありと聞けり

此國往古の歴史は茫漠知る可からずと雖も元と當國は老撾とウエンチヤンの二部に分れウエンチヤンは今を距る事二千年前チヤウアン王の建設に係り降て千六百年前チヤウフツゴム王始めて老撾を征服し其子プラチヤイセタに與ふ之

を老撾王の始祖とす其後數百年間ウエンチヤンの屬國たりしが百八年前ウエンチヤン王暹羅と戦ひ老撾之を援て勇戦せしもウエンチヤン市の一戰終に獨立を保つ能はず併せて暹羅の半屬國となれり明治廿六年(千八百九十三年)暹佛の役後暹羅は此地を以て佛國に割讓し爾來佛國は總督府を置き道路を修め土兵を募り以て遂に南の方柴昆と相對峙し北方の重鎮とせり

當府は東の方安南東京に出るに水陸三條の道あり一は安南の中央ヒウ府に其二は東京の首府河内に通ずるもの西の方亦た水陸二道あり一は湄公河によりチヤンマイ市を經一はナン市と暹羅國の有名なるチヤンマイ市とを經て共に緬甸に通ず南の方亦た同じく二條あり或は陸に或は河によりノンカイ市を經てコラツト磐谷二府に通じ湄公河を下れば柴昆東浦塞等に達す北の方大小水陸幾多の道路ありて遂に支那の雲南に通じ實に此れ四通八達の要地なり宜なる哉佛國が山中の重鎮として全力を此地に注ぐや

ルアン普拉バンとは佛の國と云ふ義にてルアンは國普拉バンは佛像の名なり傳へ云ふ此國の開闢と同時代より此地に二体の黄金佛あり一を「プラケア」他を「プラ

パンと云ふ共に体中に釋尊の遺骨五個を納む而して「ブラケア」は坐像にして「ブラバン」は立像なり

今より數十年前故ありて之を暹羅磐谷府リツサンブルームの寺院に移す爾來府内廢事多く易者占て云ふ「ブラバン」佛の爲す處ろなりと國王大に恐れ直に之を老繼に返せしが其途次渡舟轉覆して佛体河中に沈み搜索効を奏せざりしが後三年リエンチヤン市の河濱に出現せしを土人は奉迎して當府に致し今や坊等が寄寓せるワットマイ寺に安置すと尙ほ一の「ブラバン」佛に關する戯説に類せし物語を聞きが儘に記載すべし

昨年總督は之を巴里博物館に出陳せんとせしに六十人の人夫二尺の佛像を動かす能はず終に止みたりと現に寺僧等は之を目撃したりと云ふ此像に就ては他に種々の説あれ共左迄にはと茲に畧しぬ

廿日晴 午前十時バツグル總督を政廳に訪ふ總督喜び迎へ坐定て左の問答を爲せり

總督 見受け參らする御旅装にて千里の險路を跋涉せらるゝ無かし御難義の

事なるべし余は未だ貴國に遊ばざるも知友の談話に依りて其國柄及び國民の氣風等を推察し欽羨の念斷ゆる時なし然るに今貴僧等と膝を交へて親しく談話するは頗る余の満足する處にして相應の御用もあれば御助勢致すべし遠慮なく御話しあれよ

鐵脚 御厚志の程感謝に堪へず拙僧等暹老安三國佛教視察の目的を以て磐谷を出でしが風土變り言語亦た充分通せざるゆへ途中種々の困難を感じたれ共老過に入りてよりは到る處貴國官吏の保護と公衆の懇切に依り勘からざる便宜を得たり……………

總督 貴僧等の見らるゝ處に於て暹羅人と老過人とに就て何れか著しく相違せる點あるか又た地形其他の御見聞に關して高示を乞ひたし

鐵脚 拙僧等は素より佛家の事にて觀察亦た其範圍を出でず今試に宗教眼を以て兩國の人民を較し見るに共に此れ佛教を尊信すると雖も教理を知りて如此ならずものにあらず釋尊を崇め僧侶を敬ふは只だ遺傳的の俗を爲せるに過ぎず而して彼我人民の性質上大に異なる處は暹羅人は先天的懶惰にして各自尊

崇する佛者の命と雖も働くと云ふ事は成る丈け廻避せんと欲するの傾きあり之に反して老邁人は凡そ人間は働きて衣食するを常とし遊んで過すべき者にあらずとの觀念を有するが如し故に拙僧は甲を以て教ゆべからざる民としては其方法の宜しきを得ば度して善其の民たらしむるを得べしと信ず抑も暹羅は沃野千里到る處ろ天産物に富み人の來つて之を開墾するを待つもの如し老邁は之に反して山嶽重疊原野の開くべきなく産物の國を富すに足るものなし故に暹羅は其國を以て寶とすべく老邁は其人を以て寶とすべし

總督 暹老兩國中貴僧等と膝を交へて談するの僧ありしや
鐵脚 不學無徳の拙僧等固より批評すべきものにあらずと雖も若し憚らず言ふを得ば當府のクータン僧正を除きて他に談すべきの僧なく拙僧等の如きものにてすら其無學無識には驚きたり敢て問ふ當新殖民地には貴國宣教師の來住せらるゝものあるを聞かず剩さへウエンチャン市其他にては貴國政廳より材料を興へ廢寺を興復せらるゝを見る拙僧等聊か奇異の思ひなき能はず如何

總督 當國僧侶の無學無識なるには余も大に驚けりクータン僧正に至ては貴

説の如く余も雞群の一鶴として之を認めり宣教師を入れず佛院を興復するは施政上古來の慣習を破らざらんが爲めなり……

鐵脚 四通八達の當府にして然かも地球上行渡らざる處なき清國人の片影だも見えざるは拙僧等が大に疑ふ處ろなり御高教承りたし

總督は此間に答へず話頭は轉じ他の雜談に移れり

總て辭して室外に出れば會々府知事گران氏ありて紀念の爲めに近日坊等を撮影せんと云へり蓋し氏は寫眞道樂にて此技を以て無聊を慰め居ると云ふと雖も恐らく辭を設けて坊等の人相を寫し置く爲めならん夫より府中を徜徉し寓寺に歸りしは午後一時頃なりし

廿一日晴 托鉢後府内を巡視せんとせしに會々老邁皇族チヤウビン氏來訪せらる氏は舊王カサリタ殿下の近親にして嘗て三無と共に磐谷の貴族學校にあり又たハノイ府の佛蘭西學校に學びて暹佛兩國語を語る依て相伴ふて寓寺を出で處々を散歩して「プラバット寺」に至る此寺にも暹羅ナムアン寺と同じく釋尊の足形石あり寺は府の中央小丘の上にありて府の内外を眺望すべし

已にしてチヤウビン氏の邸に至る本邸は目下新築中にて坊等の入りしは其假寓
なり三名卓を圍て笑談に時を移せしが氏は云へり府内に商人なきを以て必要の
雜貨は半商半農の老搦人が非常の高價を以て安南邊より輸入するものか折節來
る支那行商の物品を購ふより外なければ日本人にして若し來て商業を爲さば府
民は喜んで之を迎ふべく當府小なりと雖も四千の戸數に三萬の人口あり且附近
の村落をも得意と爲し得れば随分面白き商業を營み得べし坊等は此の談話
に對し充分に研究せんと欲したるも當時の身分を顧みて商業談の柄になきを悟
り程能く挨拶して晝食の饗應に預り再會を約して寺に歸れり
坊等が寓寺なるワットマイ寺住職なるクータン僧正は年齒五十八之れ亦舊王カ
サント殿下の近親にして性豪邁時務に明なりとの評あり思ふに老搦第一流の人
物ならん嘗て陸軍總督たりしとき兵を率ゐて反賊を征し股に負傷せしものとな
るが後ち何か感ずる處ありて佛門に入り今や大僧正として老搦第一の寺院に住
職たり陽には塵外に遊び人寰を冷視せるが如くなるも陰に佛人を掄擲して己れ
の欲する所を爲さしむるの事蹟は歴々見るべきものあり

廿二日晴 午前總督を訪ひ明後廿四日出發の旨を述べ各村への告示を求む總督
快く之を諾し出發迄に認め置くべしとて金員藥品等を贈らる坊等更に舊王カサ
リント殿下へ謁見の紹介を乞ひ置き歸院せしに午後二時頃總督府より使來り本
日午後三時假宮殿に於て謁見を許され且つ僧正の禮を以て貴僧等を遇せらるれ
ば其用意にて登殿あるべしと云へり僧正の禮の如何なるものかを知らざる坊等
は大に當惑せしが今更躊躇すべきにあらざれば三無と協議の上臨機應變の禮式
を作り使者に伴はれて寓寺を出でたり
宮殿はワットマイ寺を距る四丁許に在りて門前には二人の衛兵三色旗下に立
坊等に肩銃の禮を爲し門を入り左折宮殿の入口に至りし時使者先づ入て二坊の
參殿を通じ侍臣出で、坊等を應接間めきたる一室に誘ふ待と凡十分侍臣再び來
りて客殿に導けり正面一段高き處の南北に各坐席を設け坊等は北面して南方の
坐に着き殿下は南面して北方の坐に着くべく準備され南方には二個の坐蒲團を
敷き前に黄金製の喫煙具を置けり侍臣の指圖に依り其席に着くと問もなく殿下
も出で、着坐せらる殿下は年齒五十七容貌温和鼻下に疎髯を蓄へ長身豐臍金釧

燦爛たる白の上衣に老摺絹の袴を着し白の沓を穿たり後には三名の侍臣
居威儀堂々明かに數年前迄此一國の主權者たりし名殘を留められぬ三無先う口
を開き暹羅語を以て

大日本帝國の僧岩本鍛脚山本三無佛敎取調べとして當府に來り此に殿下の拜
謁を賜ふ二僧が深く光榮とする處なり

と述べしに殿下亦暹羅語を以て

日本は東洋唯一の文明國にして其人民は純良敏捷又深く佛敎を信するは兼て
聞及ぶ處にして實に欽慕の情に堪えざりき今日計らず貴僧等に見ゆるを得し
ば余が深く欣喜する處なり

と答られ夫れより殿下は日本の風俗人情より教育宗教軍事等の事を尋ねられ三
無一々奉答して相互の間答凡そ一時間餘三無は

拙僧等明後朝を以て當府を出發する豫定なれば此に謹んで御暇を乞ひ參る尙ほ
今日のとは拙僧等が面目あり光榮ある紀念として永久に忘るまじく終に臨ん
で殿下の御健康を祈り併せて御壽命の萬々歳ならんとを祝す

と述べ殿下は

貴僧等又是より雲山萬里を跋涉さるゝとなれば随分注意して恙なき旅行を遂
げられよ思ふに一度相別れば又た相遇の期なかるべし尙ほ今日の事は永く余
が家の記録に留め紀念とすべし茲に貴僧等が無事健全に日本に歸られんとを
佛に祈る

此間茶菓煙草等の發應あり坊等が退殿する時殿下は階段迄立出でられ悄然後影
の消ゆる迄見送られたり

如聞佛國政府は頗る殿下を優待し年金六千圓を始め寄贈物甚だ饒に且つ目下總
督費を以て美麗なる宮殿を新築中なり又行政司法の大權は總督自ら之を掌握
するに關らず裁判權は依然舊王に委ね慣習によりて處斷せしむ以て佛人が老摺
に對する政策の如何を知るべきなり

廿三日晴 午後三時約を履て知事گران氏を總督府に訪ふ氏は先づ坊等を撮
影し仕上げの上旅券と共に安南總督の手を経て日本外務省迄送達するとを約さ
る又序を以てハツクル總督より沿道各地に充てたる諭告書を受領せり而してグ

ラン氏は退食後坊等を其官舎に招き酒菓を饗しつゝ、頻りに日本人の美術を賞し別るに及んで自製の寫眞數葉を贈られたり此夕より鐵脚少しく發熱を感せり

高岳法親王の事

ルアンブラバン府の記事を終るに臨み此に特筆すべき一條あり高岳法親王御墳墓の事之れなり坊等日本東京に在るの日屢々北澤正誠氏より高岳親王の御事蹟を聞く毎に其御墳墓處在地の明かならざるを痛歎せし事あり實に氏が此事に專意熱中せる況く正史野乘を涉獵し私費を抛て高岳親王羅越國墳墓考を著し普く世に問ひたるを以ても知るべき處なるが氏は坊等が屢々暹羅國に往復するを見若し時機の投すべきあれば幸に探究し呉れよと依頼し別けて三無は先年日本出發の際榎本子爵よりも懇々本件に關する委囑を受けたり今左に北澤氏著高岳親王羅越國墳墓考中の要點を抜載すべし

(前略)三代實録を讀むに及び高岳親王入唐し法を求め流沙を渡り羅越國に到り堯すと云ふに至り歎じて曰く此れある哉親王は我國の法顯慧生なり料らざりき千載絶へて無くして僅にあるものを萬乘の皇子に得んとは眞に曠世の偉

事なりと喜び極て而して哭するに至れり

已にして謂らく流沙は沙磧の名地球上到る處此れあり羅越國其安くにあるを知らず想ふに五天の途中ならむ(中略)此處後唐書地理志瀛環志畧海國圖志等を引證する極めて詳なり其地今の老撾緬甸兩國に涉りしなるべし老撾の音羅越に近し其地果して古の羅越國たるを知るべし

(前略)然れば則ち親王當時北道に依て玉門陽關を出でずして東道により羅越より怒江に向ひしや明なり(中略)當時親王の渡らむとし賜ひし流沙は玉門陽關の流沙にあらずして老撾の流沙河たるや明了なり(鐵脚坊曰く三無嘗て磐谷に於て其支那儒者に聞きし事あり云ふ古傳渭公河の上流には金色の沙あり水底の淺きとき之を望めは燦として恰も龍の水中に潜むが如く依て龍沙と稱す云々記して參考に供す)

嗚呼親王は平城天皇第二の皇子にして一旦嵯峨天皇の皇太子たり萬乘の寶祚を踐せらるべきに中途藤原仲成尙侍藥子の亂に連累し儲位を去り桑門に入り航海して唐に學ぶ事實に二十年猶未だ足れりとなさず遠く五天竺に向ひ流沙

に於て薨す(御歳八十なりと云ふ)當時其志を果し賜はずと雖も其壯氣苦節我邦千古求法の第一人と推さるるを得ず(此れより羅越國に於て虎害に逢ふと云へり)

方今皇運中興六百年武臣專權の弊革まり萬機の政親裁に出づ三百餘家の割據變して一政府の下に歸す兵に千載の一時なり此時に當り皇室特に一介の敕使を老嫗緬甸に遣り親王の墳墓を流沙河上に訪問し千載未死の英魂を追吊あらば世に聖代の一盛事ならずや余(鐵脚)日余とは著者北澤氏自ら指す(嘗て深く之を思ひ)中略茶や素と桑門の徒にあらず佛敎の盛衰我に於て甚だ關する處ろなし然りと雖も竊に高岳親王の事に感あり(中略)且つ我帝室の皇子に係るを以て(下略)

氏は其後北畠道龍師稻村英隆僧正の印度に航するに當り御墳墓搜索の事を囑托せしも二師共に事故あり老嫗に至らず歸朝せしと云ふ

坊等がルアンブラバン府に入るや總督バツクル氏及びグータン僧正に就て本件に關する意見を問ひ且つ書籍口碑等の依るべきものなきや否やを探究せしも親

王薨去は今を距る事千百餘年にして老嫗には八百年以前の歴史なければ折角の機會も終に効を奏せず或は今少し上流の方に進みなば何かの手懸りを得んかとの説もありしが今回は聊か事情ありて之を果さず遺憾ながら再探の時を期し厚く總督及び僧正に依頼し聊かにて手懸となるべき事實を發見すれば直に通報せられん事を請ひ置き終に當府を辭し去れり

廿四日晴 鐵脚の發熱未だ止まざるも愈々本日をして當府を發する事に決し別を僧正に告げ滞在中の優待を謝し將に寺門を出んとせしに適ま舊王カサリンタ殿下の侍臣某氏及び在ソン市地方長官佛人モンペーラツト氏相伴て來り別を告げらる蓋し侍臣は殿下の命によりモ氏は坊等が其管轄内を旅行するに當り便宜を與ん爲めに總督の注意により書を載して事務官たるエーラン氏に送るの添書を持ち來り併せて告別を爲すためなりし尙ほ氏は明後廿六日を以て水路歸任すと云へり

扱て坊等は厚く諸氏の好意を謝し僧正よりの寄贈に係る法衣煙草蠟燭其他種々の必需品及び總督より贈られたる諸種の藥品舊王殿下より賜りたる名煙等を一

包とせし新荷物を肩にし名残惜しくもワットマイを立ち出でしは午前九時頃なりし體て府の東端を流るゝカン河を渡り東北に向て進む本道は目下普請最中にて坦砥の如く又た一條の電線道に添て馳す行く〳〵后方を顧ればブラバット寺の塔高く雲際に見えて坊等に別れを惜むものゝ如く坊等亦た五日間の滯留に幾多の知人を得たる事故何となく戀々の情なき能はず振返り〳〵歩む内鐵脚の熱氣増加し來り頭重く目暈み顛倒せんとする事屢々なりしも責めてはテン村に迄赴かんと勇を鼓して進行せり三無は此體を見て大に心配し無理押しは策の得たるものに非ず殷鑒遠からず僕が前日の事に見よ決してテン村に迄到るを要せず人家の在る處にて加養すべしと鐵脚亦た苦痛に堪へざれば其勸めに従ひ人家ある方を志せし中恰も好し一小村落の入口に荒寺あるを見出し就て一泊を求めたるに一老僧出で來り如何に感せしか當寺は貧寺にして筵衾食物等を供するに堪へずとて冷然謝絶したりしかば此に總督の告諭を示したれども彼れ文盲にして讀む能はず鐵脚は其無情を怒り三無の宥め賺すを聞かず袂を拂て飛び出だせり三無も餘儀なく其跡に従ひ行く事大凡半町斗り土人に逢ひテン村迄の里程を尋ねし

に此れよりは一哩足らずと云へり此に於て鐵脚は病を勉め三無は之を慰めつゝ辛ふじてテン村に入れり村は涪公河の左岸にして戸數八九寺院一あり此日通過せし處の道路は徹ね平坦にして左右に原野若くは田畑を控へ此の間涪公の支流に或は合ひ或は分れしが本村に入りて全く其方向を轉じたり坊等試に老總總督の告諭書を出し寺僧等に示したるに三僧四沙彌終に之を讀む能はず使を馳せて村夫子を招きしが先生亦容易に讀下すと能はず千思萬考辛ふじて大體の意味を採知するを得たり元來此告諭書は總督の注意に依り何人にも讀み得る様極めて平易に老總文を以て綴りたれば日本なれば小學生徒も尙ほ容易に讀み得べきものなるを彼の僧等人民を指導すべき任を負ひながら之を通讀する能はず村中第一の博識家にして緩に其大意を了る首府を距る七哩に滿たざる村落にして尙ほ如此其無教育の程知るべきのみ實に告諭書の有力なるは驚くべきものあり之を讀みしより言語動作頓に鄭重を盡し先づ坊等を本堂に導けり日本にて本堂と云へば如何なる山間僻地と雖も常

人の住居に比しては幾分か立派なれども此寺の本堂は床もなき掘立て小屋にして
 単に雨露を凌ぐに過ぎず土上に筵一枚を布きありて發熱燃るが如き鐵脚は抛
 るが如く其上に倒れたる後の事は夢幻に屬し覺束なくも一夜を明せしが寺僧等
 の介抱に至らざる處なく三無の如きは終齊安眠せざりしと云ふ本日里程六哩
 廿五日晴 鐵脚の熱度未だ下らず夜に入りて多量のキニーネと一椀の熱湯を
 呑み毛布は勿論ありたけの法衣を纏ひて發汗を試みしに此療法時に取ての妙案
 なりしか夜半に至りて流汗瀧の如く曉の頃は頭痛も減じ熱氣も降り身体大に輕
 快を覺へ居たり
 廿六日晴 此日午後ルアンブラバン府より寺院建築に用ゆる伐木の爲め十四五
 名の僧侶來り混雜云ん方なし鐵脚の病ひ追々快方に赴けども本日は尙ほ滞在加
 療す
 廿七日晴 鐵脚の病頗る快く且つルアンブラバンより來れる多數の客僧同居す
 る事の苦しさは押し出さず發する事とし午前第八時頃東方に向ひ發す且つ進み且
 つ憩ひ三時頃コクアン村に入り一廢寺に投ず村長を呼んで彼の告諭書を示しけ

れば村長に之を苦讀し其命令にや須臾して土人の砂糖煙草等種々供物を捧げ
 來るもの多かりし
 此邊道路能く開け勾配緩に道幅亦た廣く機道豁谷の少なからざるにも拘らず甚
 しく疲勞を覺へざりきコクアン村戸數十一二行程七哩餘
 廿八日曇 朝來村民の捧げ來りし布施物の中必需品のみを鐵鉢に收め道に上る
 嶽々たる兩山の間に谷川に沿って造りたる道路を進み岩角又は石片のため歩行に
 困難なる處なきにあらざるも幸にして鐵脚病後の經過よく加るに旅慣れし身の
 此れ程の事は苦にもならず出發の際村民の言に今夕の宿泊はトライ村可なるべ
 く尤も其間には二三の村落ありとの事なれば病後の露宿は可成避んものと只前
 道を急ぎたり而して日は既に西山に没せんとするに未だ人家を見當らず哀れ今
 宵は露宿すべきかと心細くも辿る中幸にも谷川の向ひに一軒の倒れかゝりし小
 屋ありたれば雨露を凌ぐには最屈竟と終に此に一泊する事とはなしぬ行程十二
 哩餘
 此夕遠近に豹の吼る聲夥多數聞えければ其來襲を防ぐ爲め竹木を集め小屋の入

口を塞ぎ屋内に焚火して天明を待てり

三月一日晴 猛虎一聲山月高と吟唱するときには如何にも雅趣あるに似たれども深山に露宿して面たり虎吼を聞く甚だ面白きものにあらず豹聲に夢を破られ曉起谷川に沿ひ兩山の間を上下し午後第四時サビ一村に入る戸數十二行程十一哩餘村長に告示書を示し廢寺に入りて宿す村長は崇佛家と見え坊等を遇する甚だ厚く加ふるに總督の命あるとぞて或は坐蒲團を送り越し或は薪を持ち来る周旋に至らざる處なし坊等は之に酬ゆるに少量の「キニー子」を以てし又明日の行途は山路峻坂多しと聞き及ひたれば總督より喜捨されたる淨財の幾干を供し人夫の使役を依頼して就眠せり

二日晴 左なきだに此邊は氣候稍冷なる處へ寝ながら星辰を數へ得へき廢寺の宿泊夜氣いと身を襲ひて半夜毛布のみにては寒冷を覺へ終宵焚火を爲して暖を取れり朝來村民種々の供物を捧げ來る坊等此中より必要の物を鐵鉢に入れ昨日より命じ置きたる二人の人夫に手荷物を持たせ村長と袂を分て道に上る思へば袈きの日ノンカイよりウエンチャンに到る迄は佛人マツセー氏の厚意により

二名の嚮導人夫を附けられ今は又總督注意の結果箇様に御伴連れの旅行を爲す必竟新勝帝國の臣民と云ふ名の下にあるの幸福にして偏に我が陛下聖徳の餘澤によるものなりと感泣坐に法衣の袂を濡しつゝ昨日よりも昇降多き道路を辿り正午頃ソブチャ一村に着し一寺院に投す里程七哩餘止宿の時間には尙ほ早けれども明日はブーン山と稱する有名なる高山を越ゆるとなれば其準備と足休めをも兼ね扱ては半日の早泊りとなしぬ

坊等がルアンブバン府を出るとき總督の云ふ様貴僧等途中にて若し熱病に苦み居る村民あれば何卒之れを與へ賜へとて「キニーネ」二瓶を托され居れば此れまでの間病者に逢ふ毎に之を與へて盛に總督の恩恵を説き聞かせたるが今日亦た例に依り村長に投薬の事を囑せしに村長大に喜ぶ之を村民に傳へ薬取りに來るもの頗る多し此れ坊等が總督の厚意に酬ゆる爲め聊か御鼓を叩きしのみならず他日仕事上の伏線を書きしものにして決して無意味の提燈持にはあらず扱て此に坊等が願る閉口せしは脚氣痲氣等の病人にして一度は薬なきとて斷りたれども彼等中々聞き入れず薬なければ咒ひにても頂戴し度とて請て止まざれば儘

よ旅の恥は掻き棄てなりと度胸を定め乞ふに任かして咒を書き與へしに追々火の手熾になり始めは病氣の呪ひのみなりしも後には災難除け盗難除け等の呪ひをも求めらる騎虎の勢ひ中止するを得ず大凡十八九枚も咒符を書き與へたり然るに最も笑ふべきは彼の村民共坊等が與へたる咒符を持ち寄り互に之を引競べ見しに何ぞ計らん同じ盗賊除け又は肺病等の咒符にて其文字老過人は文字なるか何なるか分らざれ共坊等は種々出たらめの文字を書き與へたり(の恰好相違せんとは彼等之を見て頓に疑念を發し恐るゝ其譯を尋ねける故坊等抜からぬ顔色にて善哉く汝等性ひ勿れ年輪違へば咒符の文字も同じからず此れが名僧の難有處なりと村民之を聞き彌々信仰の念を増し三拜九拜せしは當日の一奇なりし

三・日晴 本日は當街道第一の高山たるブリン山を越ゆるとなれば村長は兼て命じ置きたる二名の入夫を率き連れ食事飲水等萬般の用意を爲し坊等が宿處に來りし時は旭日縷に微紅を漏したる頃なりし體て坊等は入夫と見送り僧一名とを連れソブチャイ等を發す

聞く處に依ればブリン山は十三個の峻峯相連り西方より東方に向て越ゆるものにして此麓より彼の麓まで殆ど二十五六哩山中にはメヤウ人の一群屋あるのみにして他に一軒の人家なく又た飲水なしと坊等一行は充分の仕度をなせし事なれば互に相勵し峯傳ひに進み行くに一步は一步より峻しく聞きしに勝りし天険にして加ふるに直射する日光は笠を透し流るゝ汗に手拭を絞る漸く道の半を過ぎし頃豫て携帶せし水筒には最早一滴の水をも残さず餘りの苦さに寸時も早くメヤウの家に入り飲水に有附かんと困難は却て勇氣を増し法衣を脱ぎ腰衣のみとなり杖を方に曳き聲出して進み行く有様には流石健歩自慢の土人も餘程閉口したり思へば今日は是れ三月三日にして日本にあれば櫻花に對して佳節を祝し一杯の醇酒に微酔を買ふの日なるに憐れ幾千里の異域を旅行する坊等は只縷に時得顔に咲き亂れたる名も知れぬ異草の花に心目を慰るのみ午後五時頃漸くメヤウ人の部落に着す里程十二哩餘今日の道路は其困難彼のラナピー山に譲づらざれども道路の改築器は成りたる後なれば歩行の便利大に彼れに勝る處あり見送の僧疲勞の爲め食事も充分になさず土間の片隅に困臥せるも亦た氣の毒なり

メヤウ人とは老邁國の山中に住める一部落の名稱にして其風俗衣類言語等は老邁人ガ一人とも大に相違し寧ろ安南人に似たる處あり彼れの社會には宗教も文字もなく只一種異様の言語ある耳坊等之と談話を試みるに少しも解する能ざりしも幸に隨伴せる寺僧屢々此邊を通過し稍々メヤウ語を解せしを以て其通譯にて不完全なる問合を爲したり彼れの容貌は安南人に類し男子の衣服は支那安南の折中にして頭髮は支那の如き辮髮を黒色の布片にて包み女子は袖の容き上衣を被て腰巻を爲し尙ほ之に折目ある白の前垂の如きものを纏ふ亦た丈けなる黒髮を奇妙に束髮となし種々の鈿釵を挿み兒女は頸に鐵製の環を緝め其環に方二寸許りなる薄き鐵札を結び付け多くは之に孔雀の如き鳥類を彫れり其骨格支那人に類似する處を見れば彼等は安南邊より來りしものか又た自ら曰ふを聞けば彼等唐黍を以て常食と爲し好んで脂肪物を食す其常業は(ケシ)を作て阿片を製し之を安南東京より來る旅商に販賣し側ら農業を爲すカ一又はメヤウ人は糯米を作るに山腹の樹木を焼き拂ひし其跡へ蒔付る故出來

米は日本の岡穂に似たり此の山中にメヤウ人五六十戸あり冠婚葬禮を始め總て他族と交通を爲さず也
如此無宗教無教育のものなるにも關らず所謂性は善なるものか彼の輩坊等に對する取扱ひ頗る懇切にして例の唐黍を煮て之を勸め又た熊の皮を出して蒲團となせり此夜深更に至り外方何となく騒々數犬の吠る聲人の奔る音等端なく客夢を破りければ枕を欬て、側らの人夫に問に彼れは云ふ何一に虎が牛馬か豚かを執りに來りしならんと坊等起て壁間より外方を窺へば村民等三々伍々隊を爲し松火を携へ棒又は竹切れ杯を掲げ虎追ひと稱して彼方に馳せ行くを見たりしが須臾して騒動も靜りたれば再び夢路に入り翌朝家人の嘯を聞くに一週間に大概一二回は猛虎來て牛馬豚等を攫ひ行くとあり此のときは養犬先づ吠て豫報を爲し村民等此報を得て箇様に松火を携へて驅逐するを例とすと尤も最初は銃器杯を用意したれ共追々慣るゝに従ひ虎は火を恐るゝと云ふとを實験せし後は最早武器は用ざるに至れりと
村民又た曰ふ佛國政廳は旅人若し虎害に逢ひしどの報知を得れば直に多數の

兵卒を出し虎狩りを爲すゆへ此頃は虎も銃器を認めれば大に恐怖し逃避するに至ると素より當てに成らざる嚇しなり

左にメヤウ語の二三を擧ぐ
(天 カウワウ) (地 プテ) (人 カフム) (男 コンチヤン)
(女 チヨムクン等の類なり)

四日晴。メヤウ人は坊等を非常の珍客として優待し唐黍の辨當を各人に贈り且つ大なる水筒二個に水を充たす等注意頗る周到なり此日亦た東方に向ひホーッ嶺を始め六個の連峯を越へ午後第四時頃漸くナゴイ村に着し此處にて見送りの僧と袂を分ち人夫を取代へポー村に向ふ道路稍々平坦一二の小丘あるのみポー村に着せしは日没頃なりし里程十三哩餘本日道路は昨日と略ほ同じ只だ其ナゴイ村迄は多く降坂にして路の左右は萱と灌木生ひ繁り大樹は少し元來暹羅老撾二國の僧は朝晝二回のみ食事を爲し其他は固形体のものを食すと出來ざる習慣なるは前已に述べたる通りにて坊等亦た之を習ひ居たりしが本日は何故か非常に空腹となりたれば一工夫して時ならぬ食事に有り付き度種々

智囊を絞りて村長を訪ひ總督の告諭を示して云ふ様坊等今朝食を爲せしのみにて晝食は未だし希くは急に食事の用意あれと村長唯として去り馳て饌部を持ち來れり坊等飽迄食らひて餓を凌ぎ爾後此の妙案を利用し時々朝晝夕三度の食事を爲すとせり此夜村内に葬式あり坊等寺僧の懇請に依り之に立會たれば今左に葬式の概略を記さん

死屍を棺丸木を穿り抜き之に蓋を作りたる臥棺なりに修め兩三日を経て隣人相集り煙草花蠟燭米魚類野菜等を佛前に供へ僧を請して終夜讀經をなし大概は夜明方に土葬するを例とし磐谷府の莊嚴なる式には似もやらす實に單簡極まる者なり魚類を供ふるは日本人の考にては或は異様なれ共暹羅老撾等の僧は肉食する故佛前へ亦た之を供す他の僧は終夜讀經をなしたれ共坊等は旅中の疲勞もあれば半夜辭して寺に歸り不完全ながら蒲團を敷ける寐臺に臥し久振りに夢魂暖に一夜を過したり

五日晴。今日亦た人夫二人と寺僧とに送られて發しヒエン村を経て北に向て進みテン村に着せしは午前第十一時頃なりしが明日の路順に依り時間早けれども

此寺に宿るに決す里程六哩餘道路昨日に等しく起伏は稍々少なかりし此れより
 六日晴 寺僧の嘶によれば本日の道路は其三分の一は谷川を行き三分の二は山
 又山を越へ随分困難なる道路なりとの事なりしが其言真に坊等を欺かず脚を没
 する溪水と馬背の如く如く如くも樹陰少き半禿山は何れ劣らぬ行路難恨言難りの放
 歌高吟に縋に憂を慰みカ一人の家に到着せしは午後四時過る頃なりしカ一種々
 の木芽を焚雞卵を焼て坊等を饗し且つ曰ふ明朝は雞を料理して貴僧等に供せん
 と無智昧禽獸に近き彼等なれども其信切には殆ど感服に堪へず里程十一哩餘
 七日晴 愚直なるカ一人は約を踐み雞を煮て坊等を饗す時に陰霧四方を照して
 晝尚ほ暗く坊等止を得ず其晴るゝを待て發す今日は始めてカ一人を人夫とせし
 に彼等の身成りは頗る異様にして丸裸に襪をしめ一振の山刀を帯び荷物は總て
 籠に入れて之を背負ひ峻坂溪水の嫌なく足に任せてちよくと進み行く其身
 の軽きと猴に似て足の早きは章駄天に彷彿たり坊等亦た七八十日間の長旅に充
 分鍛ひ上げたる足前なれば如何でか彼れに遅るべきと奮發一番草鞋を脱ぎ素足

となり腰衣の裾を短く裳げ足を限りに辿り行き或は先じ或は後れ夢の間に八哩
 餘を通過し午前十一時過ぎレノン村に着し廢寺に投す本日の道路は多く山間に
 して溪水を渡り峻坂を昇降し頗る嶮峻なりし當村人家十二軒悉く佛敎信者にし
 て村長ペンなるもの先達となりて坊等を町噺に饗し懇に五六日間の滞在を請求
 せられたれども坊等前途を急ぐを以て之を謝絶し明一日丈け留錫するとに決す
 此邊は眞に山中の深山とも云ふべく晝間は左迄にも思はざれども夜に入れば天
 地寂寞松風の聲溪水の音終宵枕に響き一入の淋しさを増すのみ
 八日晴 此日御馳走として村端の谷川に三艘の竹筏此邊舟なし悉く竹を結合せ
 る筏を用ゆを泛べ捕魚の催しあり不完全なる編なれども其投げ方の巧なるか魚
 族の頓馬なるか兎に角二時間斗りにして五六寸より一尺位ひなる鯛に似たる魚
 三四十尾を得たるは頗る愉快なる遊興なりし
 村長ペンは談話を好む閑あれば坊等を訪ひ來り手眞似半分に老過語を交へ我面
 白の人泣せ嗚をなせり曰ふ暹羅に屬せし時分は諸税の徴集頗る寛なりしが佛頭
 となりてより中々嚴重なり其代り世話方も行き届き此頃は盜賊杯の沙汰も聞か

ず人頭税は一ヶ年四圓にしてメヤウカーは二圓なり此頃安南より來りし人に不思議なる噂を聞けり夫は

暹羅王は兼て安南王のト筈を善くすると聞き頃日使を安南王に遣り暹羅國の保護は何れの國に依頼する方得策なるやと尋ねたるに安王之をトして獨逸と日本とに保護を托すれば國家安全なりとの返事を爲せし由貴僧等果して其眞偽を知らるゝか杯取り留めもなき嚇しに永き日も厭はず過したり此夜地方長官の荷物ソブサツプに到着する豫定なりとて大勢の人夫を出す爲め村長先

生頗る繁忙を極め居れり

九日晴 村長を始め村民一同今暫時と引き止むる袖を振り拂ひ再會を約してレイン村を發す路幅廣くして歩行に便なりと雖も全体の山勢頗る急峻にして恰も屏風を立てたるが如く羊腸たる坂路或は岩角により或は樹根に攀ぢ五歩に一休十歩に一憩疲勞の爲め數々卒倒せんとせしも幸に恙なく二個の險山を越へ午後五時頃纔にソッコク村に達し廢寺に投宿す里程十四哩餘

本日午前第九時頃途中ソツサツプに於て去二十四日ルアンブラバン府にて別

れたる佛人モンベイヤット氏に逢ふ氏曰ふ余は貴僧等と分袂せし三日後同府出發ビロツク輕船のとに乗りソン河を溯り種々の困難を嘗めて只今此處に到着せり此れより陸路ソン市に歸任する積なれば貴僧等の都合に依り同行しては如何と坊等其厚意を謝し曰く貴下は乘馬にして坊等は徒歩なれば足力相適せず却て御迷惑ならん故に一步先きに御免を蒙るべし自然途中にて御一處となれば其時御同行を願ふべし其實坊等は徒歩にてモ氏の騎行に先んじ同市に着し居り彼れをして其の健歩なるに一驚を喫せしめんとの内必ありたればモ氏の一行は荷擔人夫三四十名にして天幕寢具より食料飲水に至る迄之を携へ尙ほ副馬二頭を率ひ隨行者五名も亦た乘馬なりし然るに氣の毒なるは道路急峻前記の如くなれば騎行の出來得るは全路の一半に過ぎずモ氏の失意は頗る坊等の得意となれり此夜終にソッコク村に着せず想ふに途中に露宿をなせしならん

十日晴 此の日の道中も有名なる山路なりとの事故充分の用意を爲し拂曉に出發す天氣晴朗一點の雲もなく炎熱燃るが如くにして恐く華氏九十度ならん加ふ

るに起伏多き道路の傍には大樹木なく一面に葦草生ひ繁りたれば吹き来る風も自ら火炎に等しく緩に携ふる處の水と寶丹とを嘗て喉を濕し午後五時頃宇赤土に着す通過里程十三哩餘兼ては此處に「サラ」ありとのとを聞き居れば今夜は之れに一泊の豫算なりしが來りて見れば如何に頼みに思ひし「サラ」は八九分通り燒失し殘木尙ほ白煙を揚げ居れり此時坊等一行の失望せしも理なる哉此邊は禿山のみにして露宿を爲すにも夜露を掩ふべき大樹なく若し適好の場處を撰べば進んで今一つ小峯を越へるか二三哩引返すかの二つなれば何れにせよ時間遅れたる上は此の疲勞にては到底實行しがたき事なれば坊等人夫に命じ之れ迄途中にて見置きたる事ある假小屋を作らしむ彼れ等命を聞き直に彼方の谷間に降り行きしが暫時にして芭蕉の葉十四五枚を持ち來り竹木を斬りて急に小屋を作り葉を以て家根を葺き又は敷物となしたれば天晴れ一時雨露を凌ぐに足るべき一軒の假小屋出來せり大凡旅人が露宿を爲すに時間あれば箇様の假小屋を常とす坊等亦た屢々此の中に止宿せしとあり

此夜月白く風清し幸に蚊軍の襲撃をも受けず快く夢を食れり

十一日晴 早起人夫を促し芋を燒き飯を炊き携帶辨當を作らしめ昨夜モ氏一行は何れに宿泊せしか此の様子なれば今夕ソソ市へは彼等より先着し居り東洋人の健脚は馬足をも壓するを示し一番彼が閉口せし顔色を見る亦た一興なり扨打語らひいざ出發せんと假小屋を立出ればモ氏の荷物を擔ふ人夫三四十人早や已に續々南方の坂を下り來る彼等の言に依ればモ氏は昨夜四五哩後に露宿し今夕是非共ソソ市に着の見込なりと坊等之に追ひ及ばれんとを恐れ人夫を促して北方に向て進む此れより一個の高山と四個の小丘とを越へワット村に着せしは午後二時頃なりし此間の地形昨日と同じく里程十哩餘兼ては本日ソソ市に入るの豫定にして時間亦た充分ありしも途中一名の人夫足痛の爲め荷物を擔て隨行すると能はず坊等止を得ず交も之を持ち尙ほ人夫を扶けて徐々に歩みしとなれば此れより先途は一層困却ならんと配慮の餘り終に本日は此の村に宿し明旦ソソ市に入る事となせり

老總に入りてより以來其形小蜂に似たる毒蟲多く旅行中面部手足の癢なく露出せる處は無遠慮に螫し一時出血多きのみならず其跡は血腫れとなり痛疹甚

敷く此れを防ぐの術に困却せしがルアンブラバン府以東には此の毒蟲少なき代りに蝶の族非常に多く其種類は千差萬別にして羽色赤黄薄墨紫縞等ありて其美麗なると一見目を奪ふが如く大小亦た一様ならずして大なるものは殆ど蝙蝠に比すべく日本にては到底見ると能はざるものなり

十二日晴。今朝はソソ市に入るの日なれば餘りに見苦しき身成にて政廳に行くは不都合ならんと兼て洗濯し置きたる法衣を更め午前九時頃ワット村を發し暫し時にしてソソ市に着し直に長官モンペーラット氏を政廳に訪ふ政廳は市の西隅勝地を占め風景頗る好し馳て取次人に誘われ事務室に到りモ氏に面會し互に手を握て別後の情を述べ無事の旅行を相賀すモ氏先づ口を開て曰ふ貴僧等の健歩には驚き入りたり余は貴僧等に追ひ付ん爲め餘程馬を急せられ共終に其隻影をも見ざりし故定めて當市に先着せしと思ひしに如此遅延せしは途中にて何か故障ありしか鐵脚之に答へて曰ふ兼ては貴下より先着の豫定なりしが人夫足痛の爲め思す延着したり坊等決して健歩と稱するものにあらず現に日本の兵卒杯に至ては充分の武装を爲して一日二十哩餘を歩行し尙ほ戰闘に堪へ得べしモ氏之

を聞き愕然たるものゝ如し馳て其指圖に依り市内ソソ寺に投宿す須臾にして市長老過國伯爵タマウサ氏市民三名を率ひ來訪備に長官の命を述べ何事にも遠慮なく申付けられたしとの事なりし本日の道路は平坦にして頗る良好里程三哩餘

ソソ市は山間僻地にありと雖も戸數五十人口四百に垂んとし市外の原野畑畑等頗る廣し他年充分に市境を擴張するに足る政廳は今より六月前にヘット市より移轉し來りたるものにして四十名の兵士構内に宿營す此地の居民皆な農を以て業となし一つも商估なく目下は市と云はんより寧ろ村落の如き有様なれ共思ふに他年必ず小繁華の土地となるや疑ふ可からず

市長タマウサ伯は別に學識なしと雖も資性鋭敏能く事務に勉勵し市の利益を計畫する事少からずと云ふ辭て長官モ氏が施政の順序を見れば地方の交通を開くを以て第一となすものゝ如く現に道路改築橋梁架設等氏が管下は他管より目立ちて注意能く行き届き居るを見ても知るべきのみ

十三日晴。午前市の内外を散歩し午後一時兼てモ氏より坊等が爲めに宴を開く

とて案内ありたれば約を踐んで之を訪ひ主人及び事務官エーラン氏并に坊等と四名食卓を圍んで談笑種々の響應あり殊に珍敷覺へしは安南醸造の麥酒にて其味ひ頗る美なりし故覺へず數盃を傾けたりモエ兩氏の談柄は相變らず日佛和親の一點張なりし

已にして宴止みたればモ氏より旅券并に管内人民への告示書喜捨の淨財物品等を受納し深く其厚志を謝し再會を期し別を告げ寓寺に歸りしは夕陽已に西山に昏く頃なりし

十四日晴 今朝當市長伯爵タマウサ氏(老邁國が嘗て暹羅の屬國たりし時は此國にも爵位ありて之を假合ば往昔日本に於る地方豪族の如く其地に居住して其附邊を打ち従へたるものには爵位を與へて之を支配せしめしものゝ如し)の招請に應じ午前第七時其居宅に到る素より田舎風の粗屋輪奐の美なしと雖も慥に市中第一等の大厦と見受けたり坊等と膳を共にするものはソンの寺の和尚にして陪席の俗人は他膳に就けり之れ暹羅老邁等に於ては如何なる貴紳と雖も僧侶と食饌を共にするは可成遠慮するの習慣なればなり食事終て煙草砂糖等種々の喜捨あり

り坊等能き程に切り上げ九時過ぎ發程市長の家族市民等十四五名送て市外に到る

此日炎熱焼くが如く正午頃に到り鐵脚が荷物を擔ぎし人夫暑氣當りの爲め俄かに腹痛して到底隨行する能はざるを云ふ鐵脚止を得ず自ら荷物を荷ひ病者を扶けて愚痴ダラ／＼行くと大凡二哩餘り空腹と暑氣とは劇敷此の可憐坊子を襲撃し流石の強情も最早堪へがたく只有る樹陰に立寄り市長より贈られたる辨當を開き纒に飯を慰する折柄後邊より七名の女子隊此方を差して來掛り坊等が病氣人夫を引連れ迷惑氣なるを見隊長たる年増婦人坊等の側に來り云ふ様貴僧等はソンの市よりカウ市に赴かるゝ日本高僧と御見受け申す妾等亦た同市に行くものにして見奉れば人夫病氣の爲め御迷惑の様子御荷物を妾等に持たせくだされたし妾等の一行七名なれば不都合なく御届け申すべしと元來鐵面の鐵脚なれ共餘りの氣の毒さに一時は堅く辭したれ共彼れ等の熱心中々動すべくもあらざれば乞ふが儘に荷物を渡し此れより二坊と人夫二名女子七名を合せ同勢十一名の一隊となり頗る賑敷女子等の笑ひさゝめくを聞きながら覺へず三四の峻坂を越へ

午後二時過ぎに至り後方より二人の従者を連れ馬上豊に歩み来る老人あり近きて馬より下り坊等に挨拶するを見れば此れ予ソ市長タマウサ伯の父にして彼亦たカウ市に行くものなり仍て更に此の人数を加へ彌々愉快を覺へしに五時過に至り一天俄に掻き曇り眼を射るの電光耳を聳するの雷鳴一行の膽を奪ひあはやと云ふ間もあらばこそ大雨車軸を流すが如く今朝より空晴れ渡りしとなれば雨具の用意なき彼の女子連は狼狽周章避くるに途なく或は樹枝を折て被るものあれば或は萱原に頭を隠すものあり坊等亦た携ふる處の笠にて荷物を掩ひたれば破れ蝠傘より漏り来る雨に身体丸で濡れ鼠の如く三十分を經れども中々晴れる景色なし然るに此れよりカウ市迄は尙ほ三四哩もある由なるに時已に五時を過ぎ此儘晴るゝを待てば恐らくは夜に入らんも計りがたし如かず雨を衝て早く市に達せんにはと相談頓に一決し人夫を督勵して道に上り暴風猛雨を事もせず點燈の頃漸く市中に達す時に雨纒に止み風亦た収り候々たる明月は烏帽岩頭を離れ雨餘の涼味快言ふ可からず

曰にして人夫の導きにて一の大塚に到り只見れば一婦人周章數階を下り來り坊

等の前に蹠蹠再拜して曰ふ様貴僧等は定めて日本高僧にて御在すべし今朝ソ市市長よりの通知もあり勞々妾が家にて御留杖を乞ひ奉る準備も已に整ひ居ればイザ御入りくだされたと先きに立ちて案内しければ事の意外に少しく驚きたる坊等も今更辭するは却て厚意を破るならんと乞ふが儘に坐に通ふれば當家の主人は伯爵ボン氏にして市長を勉るもの婦人はソ市市長タマウサ伯の令妹にして當市長の妻君なり流石は豪族の事とて總ての調度等山間僻地に不似合なるものあり客間と覺しき處には結構なる老摺絹の敷物を布き詰め雌雄二枚の大なる虎の皮あり土製の大花瓶に満開せる奇草花を挿む杯一見目を驚す計りの接待の手厚き注意の周到なる中々侮るべからざる有様にして主人夫妻はイソくとし坊等が爲めに馳走す

已にして男女八九名の一隊ガヤク入り来るを見れば途中にて分れし老伯と鐵脚が荷物を托せし女隊なれば其故を問ふに彼等も皆な此の家の近親にして明日の婚儀に列する爲め來りしものなりと云ふ主人の伯は坊等に對して云ふ様全体當市民は老摺人にあらず皆なタイ人種の後裔にしてタイ人とは後に詳述す

より無宗教の事なれば古來より寺院なく又た僧に供養せし事もなし去りながら貴僧等は日本の大聖人なりと義兄タマウサ伯より懇々通知あり幸に今夕御一泊を許されしは實に當家の光榮なり此上ながら何卒明日我が妹の婚儀に御立會願ひ度と思ひ入て述べける故坊等無氣に斷る譯にも行かず儘々よ何と臨機の工夫あるべしと決心し快く承諾の旨を答へければ主人夫妻は素より親戚隣人等も大に喜び夫れより茶菓等種々の饗應あり寢に就きしは三更の頃なりし本日通過せし道路は三四の昇降坂路ありと雖も流石は道路縣令の管下丈けあり甚敷歩行に不便ならず左右の山頂多くは赤禿にして時に灌木と荳とを見るのみ里程十一哩餘

十五日晴 朝來雲霧甚敷冷氣頓に増し單衣にては寒さを覺ゆる程なりしが十時頃天氣全く晴る此日は當家の婚儀なりとて家族は大概徹夜せしと見へ朝來數十人の市民手傳の爲めひしくと詰め掛け其混雑名狀すべからず今左に坊等が今回の旅行中に遭遇せし第一等の奇談を述べん

多人數の笑ふ聲叫ぶ聲東西に奔走する足音等頗る騒々しければ坊等は何事の

起りしかど戸外に立ち出んとする刹那一塊の芭蕉芋風を切て飛び來り危ふく鐵脚が面を掠めて後方の竹壁に當る不意を喰ひし鐵脚は驚て其方を見れば十五六人の女子銘々芭蕉芋を入れたる籠又は水桶等を携へ左に馳せ右に奔る白髮の老嫗は此女隊の指揮官と見へ頗りに早口に號令を傳へ手配最中なり遙に向ふの方を見れば此處に亦た老爺の指揮せる十六七名の男子隊あり各々小籠を携へ隙を窺ひ今日婚姻を爲すと云ふボン家に行んとし女隊は水を撒き芭蕉芋を抛ち彼等を防止せんとするものゝ如く互に鬨聲を擧げて相對す已にして男隊の指揮官大喝一聲進めの號令を下すや各々小籠を頭上に差揚げ踴躍して竊地に女隊の中央を突貫す其勢ひ猛烈當り難く見へしかば女隊は周章狼狽暫時之を防ぎしも勢ひ終に支へず紛々として四方に散亂す男隊の若者十人計り隙に乗して早已にボン家の階を上る之を見たる女隊の指揮官怒氣滿ち溢れ穢き味方の振舞哉何程の事かあらん飛び道具を棄て接戦くと金切り聲を絞りて怒鳴るや否一人のデクくと肥たる村娘籠を投げ棄てイキナリ一人の男子に組み付けば之れを手始めとして逃げ遅れたる五六人の男子と十五六名の女

子とは互に金剛力を出し此處彼處に組打を始めしか女子の力量侮る可からず
男子亦た必死の勇を出し或は「バーヌ」腰巻ナリを引解かれ陰部を現はすものあ
り或は膝頭を擦り剣き血を流すものあり男女共に散髪となり顔色青ざめて此
儘に置けば眞の喧嘩となりやせん最初は抱腹絶倒して「アマウサ」老伯及びボ
ン伯夫妻等も興ある事と見物せし坊等も今は打ち棄て置き難しと思ひ老伯に
勸めて仲裁を爲さしめ事漸く止を得たり後にて老伯に問へば伯得意氣に述べ
て云ふ様此亦た婚儀の式にして婿方は男隊嫁方は女隊にして双方同じき人数
に分ち之に各指揮官あり男隊は種々の酒肴を携へ婿の到らざるに先ち嫁の家
に入らんとし女隊は之を防いで入れず此際萬一男隊女隊の爲めに防ぎ止らる
れば此日の婚式は延期し更に吉日を撰びて幾度にも男隊の勝利を得る迄婚
式を舉行せず此勝敗は頗る彼等の面目に關するものなれば互に競争して或は
眞の喧嘩となる事あり今日の式は男隊の一部嫁家に入りたれば終に女隊の敗
に歸し彼れ如何計りの遺憾ならんかと果ては大笑となりし
已にして此の第一式の濟みたる頃恰も好し花婿の入來を報じ來りければ今朝

より來會せる一家親類市民の重なるもの等百二十三人悉く出で、之を市外に
迎ふ花婿は此人數に擁せられ意氣揚々として入り來る其面を窺ひ左に人相書
を作る

婿殿 色赤黒き方 顔丸き方 眉小さき方 目丸き方 鼻低く平なる方 口
大なる方 耳小さき方 髪濃き方 體中肉齒亂杭なる方 年齢十八九
右の人相書によれば餘り立派なる色男にあらざるべし次に花嫁の人相は

花嫁 色淺黒き方 顔丸き方 眉小さき方 目尋常 鼻尋常 口小なる方
耳尋常 髪濃き方 體中肉 歳十三四

之を婿殿に比すれば驚と鳥の差あり嗚呼美人薄命は老總的の美人なり何處も
同じ造化の惡戯が花嫁の爲に氣の毒の涙を澆ぎしは坊主の癖に無用の世話な
らん阿々

午後二時頃老伯并にボン伯夫妻衣服を更め來りて云ふ様昨夜御願ひ申し置き
たる婚式只今より始れば何卒御臨席を希ふと坊等仍て十五條の法衣を着し
十七條の袈裟を掛け嚴然たる僧正の正装を爲し徐々婚席に進み入り只見れば

正面に一壇高き場席を設け之れに毛氈と虎皮を敷き詰めあり坊等請に應じ壇に上り席に着すれば大凡百二十三人の主客一同三拜の禮を行て躡て坊等が命に應じ清水を充たせる金盃を捧げ出けるゆへ之内に小銀塊二個を投入し鐵脚は左手に念珠を爪繰り右手に蠟燭を持ち三無は兩手に念珠を押揉み兩坊共聲爽やかに讀經を始む此間坐者悉く頓首敢て仰き見るものなし讀經已に終り鐵脚端然新夫婦を呼び之に告て曰ふ善哉汝等夫妻の相貌を見るに長壽富貴疑ひなし我等此目出度席に連りし紀念として汝二人に心許りの贈りものあり謹て受領すべしとて彼の金盃と蠟燭とを示し更に曰く夫れ天地の間に生あるものは悉く水火二物の恵によらざるはなし殊に人間に至りては其生活を圓滿ならしむるには金銀の助を假るを要す故に水火金の三者は人生に取り最大必要のものなれば今之を汝等に與ふ汝等謹て此の事を忘るゝ勿れと咳一咳南無と唱ふ當人なる新夫妻は素より此れを見たる親戚隣人等喜び極て哭するものあり是於手坊等が鼻高き事三尺
智徳圓滿なる大和尚と成り濟したる鐵脚三無は餘り長居して尻尾を出すは妙

ならずと好き程に坐を立ち客間に歸れば種々の御馳走を運び來り堆積山の如し殊に婚姻式の慣習なりとて屠りたる小水牛の肉は味頗る美なりし此夜は早く寢に就きたれ共隣室にて盛に酒宴を張り鼻唄亂踊其騒々敷耳を聳する許りにて中々夢路に入る能はず十時過ぎとも覺しき頃崩るゝ許りの騒動頓に靜まりしと思へば多人數ガヤ／＼と外方に出る様なればコソ不思議如何なる事をなすならんと三無を揺り起し戸隙より覗き見れば奇妙／＼醉歩蹣跚たる來客は或は筵蒲團枕煙草盆等を持つものあり或は新夫婦を擁するものあり一統階を下りて外方に出る様子なれば二坊亦た竊に寢間を出で此の大勢の後に追從せしに大凡一丁許り山手の方に新築せる小屋あり纏て一人の老嫗新夫婦の手を取り此の中に誘ひ入れ蒲團其他の物品も同じく此に入れ置き取り巻きの大勢は口々に何か分らぬ事を言ひ唯し新夫婦と老嫗とを殘し置き主家に引返し又々酒筵を開きたり後に聞けば此れ亦た儀式にて凡そ婚姻の夜より四五夜間は新夫婦を離れ小家に泊らせ其後花婿は花嫁を連れて己れか家に歸るの慣習なりと

十六日曇 徹夜の酒宴騒ぎに坊等亦た碌々眠る能はず半睡の夢覺めしは已に七時過ぎなりし主人は親戚等と共に是非共今一日滞在ありたしと懇請頻りなりしかども坊等行途を急げば強て之を謝絶し二名の入夫に主人より贈られたる夥多の食品と手荷物とを適はしめ午前十時頃出發新夫婦始め二伯其他の親戚十七八名送て市端に到り再會を約して袂を別ち坊等四名東北方に向て進み午後五時過ぎ只有る谷川の邊に出て竹橋を渡りて露宿を爲す此の邊の谷川は大休竹を編みて橋板に代へ大なる丸竹又は木材を以て橋桁と爲して架橋す又は藤蓆にて作りし釣り橋等あり本日の道路は多少登降坂ありと雖も概して良好なり里程九哩餘

十七日晴 早朝露宿地を發す元來カウ市よりレン市迄の間には二道あり一は山頂を取り一は溪谷を行く坊等溪谷には大に僻易したる經驗あれば山路を取るに決し大なる山脈三つを越へ非常の疲勞を覺へ午後五時過ぎ山麓の森中に露宿す里程十三哩餘

十八日晴 本日亦た山路を行く道路昨日に同しく別に記事なし峯を攀ぢ谷に下り夕方山中に露宿す里程十二哩

十九日晴 三日間の山路旅行に流石の土人も頗る僻易せしと見へ始終坊等に遅れつゝ午前十時頃漸くシン村に着す戸數十二三村長某は是非共己れの家に止宿せんとを請求したれ共坊等俗家に宿するは却て面倒の嫌あればとて強て山腹の廢寺に投宿せり途中の景況昨日に異なるとなし里程六哩餘

二十日晴 村長始め信者等に昨夜來の厚志を謝し九時頃出發北方に向ふ午後三時過ぎナザン村に着す此村には寺院なき故村長の家に投す里程十一哩餘

己にして水浴も終れりイザ一休みと爐邊に横臥する際遙に西方に當り唄を聲囀しの音等喧敷聞ければ何事なるかと側への人に問へば彼れ答へて曰く此の村の西端に一人の婦婦住みしが二ヶ月前に何故かは知らねを毒を仰て自殺したり素より貧家の獨身ものなれば家屋は其儘にし少し許りの家財を村長の世話にて悉く賣却し其金をヘット市の寺院に納め新佛の爲めに追善供養を依頼し其後は何事もなく打過ぎしが此に最も不思議なるは此頃に来り夜々彼の空家の棟に隠火の燃へるを見しとか又た時として家内にて鬼哭を聞きしものありとて始めの中は左程もなかりしが追々大評判となり心弱き婦女兒杯夜に入

れば戶外に出でざる迄に至りければ遂に一昨日より村内の若者等陰鬼退散の爲め寄り集り毎夜々様の騒ぎを爲し居るものなりと語りければ耳敏て、此の怪談を聞き居たりし三無は臆て彼の人に向ひ鐵脚を指して云ふ様此の御僧は大日本國の名僧なれば如何なる妖怪變化たりとも一邊の讀經功力を以て消滅退散疑ひなし併し依頼なき時は物好きらしく御世話様もなされまし杯態と勿体らしき嘲しを爲しければ彼の者大に驚きたる様子にて直に辭じ去りしが暫時にして以前の男は七八名の同勢と供に入り來り中に一名の老人坊等の前に頓首し扱て言ふ様私は當村の世話役にて村長不在の爲め代理として罷り出たり承れば貴僧達は日本高僧に御在よし妖怪嚇しは只今此の男より申上たる通りなれば何卒當村民助けの爲め御讀經願上ると

好しなき三無が戯言より意外の面倒を惹起したりと思ひたれども今更辭退も成り兼ねたれ止を得ず之を承諾し陰鬼の供物と稱し一瓶の酒と二三皿の魚を空家に運び來る様命せしに素より信心肝に銘せし村民等如何でか違背すべき薄暮に至る頃用意悉く整ひしを報じ來る坊等仍て明朝迄祈禱中は何人たりと

も此邊に近づくべからざるを嚴重に申渡し置き二坊徐に供物の酒肴に旅情を慰めしは又た近日の大出来なりし酒瓶已に倒れ皿亦た殆んど空敷なる頃兩僧爐邊に横臥し其後は只だ狡鼠の殘皿を荒らす音を聞くのみ夢魂今頃は家山に歸るや如何を知らず

二・十一日晴 一瓶の粗酒に快夢を貪りし坊等は竹壁の破れ目より侵入し來る旭日の爲め坊子頭を射られ驚き醒れば日已に三竿に垂んとす仍て空瓶殘皿等を片付け宿に歸れば已に早や十四五名の村民來り居坊等之れに向ひ終夜尊き讀經を爲したれば最早幽鬼の出る氣遣ひなしと眞面目に言ひ聞せ喜ぶ彼等を後に見て今暫くと引留る法衣の袖を振り拂ひ逃るが如く宿を出でしは空瓶殘皿の秘事露見を恐るゝ爲めにして天晴れ三十六計を學びしものなりしに村民此の魂膽を夢にも知らず坊等に不快の念にてもありしかと誤信し總代三名種々の供物を捧げ息を限りに追ひ掛け來り終に彼等は送てヘット市に到れり此旅行中如此彌次喜多的の出來事三四にして足らざれども繁を厭ひて大概は略しぬ

ヘット市の入口に近くや十七八名の人數路傍に蹲て坊等を迎ふものゝ如し坊等

其故を問へば彼等云ふ昨夜ナサン村より報あり貴僧等同村に於て陰鬼を祈禱せられ今日當村に杖を引かるゝとの事故我々は此の處まで御出迎ひ申せしなり其は當市長老過國伯爵ブルンと申すものなりと言語應對極めて丁寧なり坊等之を謝し相伴てヘット川を渡り(川幅五十間竹橋あり)先づ市長の家に到り午食を喫し終て寺院に入る暫くして市長の子タナケチ氏來れり氏は嘗て佛國士官に從て佛蘭語を學び後僧となり居二年前に還俗せしものにして中々面白き人物なりし市長並に信者の懇請により明一日間當市滞在に決す本日の道路は溪谷に沿ひて造り良好にして只多少の坂あるのみ里程十哩餘

二十二日晴 午後タナケチ氏始め市民多く來て坊等に説教を乞ふ坊等言語の通ぜざるを以て辭すれども聞かず止を得ず三無不完全なる老過語に手具似半分を雜へ小學生徒に嘲すが如き説教を爲せしに彼等謹聽頗る感動せしものゝ如く之れが爲め喜捨品非常に多かりし

當市には多く樹脂を産出するを以て之を安南東京地方に輸出し頗る利益を得るものゝ如く現に市長の子タナケチ氏の如きは東京に於て之が賣捌に従事し

あり市の北端に支那人の商店三軒あるを見る皆な樹脂を買込むものにして悉く老過の女子を妻と爲し居れり
當市并に其附近二三の村落を合すれば戸數百餘人口七百に垂んとし現に當市のみにても六十戸を越ゆ市民大概農を以て業と成し支那人は商業を營む曩に政廳をソン市に移轉されしは彼等が千載の遺憾なれども今日となりては之れ又た十日の菊花ならん二個寺あり一は政廳より材料を給せられたりとして近日修繕に着手すべしと云ふ

二十三日曇 人夫の請求に依り朝食を携帶して發す從來の實驗によれば坊等が健脚なる爲め人夫先づ疲勞して日々の用を飲く事少からず仍て昨日市長に協り可成健歩のものを出すとに談し置きしが夫れかあらぬか今日の人夫は頗る健歩にして動もすれば坊等之に後るゝ有様なればコソ近日の不思議なりとて人夫の素情を聞き糺せば左もあるべし彼等は郵便脚夫なりと

道路の左右に二三の小村落あり正午頃ダン村の入口に到る此村を以て老過國と東京との境界となすダン村はヘット河の右岸に位置するを以て人夫に命じ舟人

を呼しめんとする折柄村民八九名四艘の小舟に乗り此方を指して渡り來り舟の岸に着するや否紫色の上衣を被たるもの一人一番に上陸し坊等の前に蹲きて言ふ様貴僧等が此地を御通行のとは昨朝ヘツト市より發せし郵便脚夫の嘶にて承知いたしれば村民一同より聊か晝食を獻せん爲め拙者村長を始め惣代を出して御迎へ申すなりイザ御乗船あれど坊等敢て辭せず一行之に乗りて幅三十間許りの河を渡り前岸に達すれば此處には村の老若男女大凡五六十名許りにて坊等を迎へ導ひて寺院に入り此れより種々田舎相應の御齋に預れり

佛國保護地東京領

此村より以北は悉くタイ人種にして宗教なければ寺院もなし午後四時頃サイ村に着し村長の家に投宿す本日の道路は兩山の間に流る、溪川に沿て下り二三の徒涉場あり道路良好にあらざるも幸に平坦なり里程十哩餘

坊等が爰きにカウ市にてボン伯の家に宿せし條下に序開きし置きたる所謂タイ人と云ふは思ふに安南人の一種ならんか其骨格老邁安南兩人種混合せるも

の如く男子は長き頭髪を結び黒布にて鉢巻を爲し女子は日本の割り祭田の如き曲に結び袴を用ゆる等より衣服飲食に至る迄頗る安南人に類す文字は老邁文字の如く毛筆を以て左より右に横書す言語異にして宗教なし其他は大概老邁人に似たりタイ人素より僧侶の何ものたるを辨せざりしも幸に従ひ來れる人夫が郵便用にて數々此地を通過し能く彼れ等と相親み居たるを以て其の説明により頗る叮嚀なる取扱を受けたり爾後八日間の旅行中ブー村に到る迄は言語毫しも通せず筆談も出來ざりし爲め恰も啞子同様なりしは亦た旅中の一笑話なり此邊の女子は日本と異にして臀部を溪水に冷す奇と云ふべし

二十四日半晴 今朝出發に際しタイ人の云ふ様夕方より必ず雨降るべし貴僧等其御用意なれば途中極めて難儀なるべしと坊等仰て天氣模様を看れば旭日輝々として大空晴れ渡り降雨杯は思ひも寄らざれば彼等の注意をも馬耳東風と聞き流せしは近來の大不出來なりし午後三時過ぎナウアツに露宿す例により竹木と芭蕉の葉を以て假小屋を作れり里程十二哩餘

己にして小屋も出來上り人夫に命じ今朝發せし雞を割て之を煮さしむる中

鐵脚頸を擧げて風と西方を見れば舉大の妖雲夕陽を掠め見る中忽ち四方に散
 亂して一天黒闇の裏に電光閃き迅雷耳を裂き驟雨條を突くが如し忽ちにして
 露宿地變して池水となり椏枝を吹き折りし暴風の餘勢は折角葺きたる屋根の
 芭蕉をも掠め去り纒に表へ上りたる雞肉の鍋は雨水の爲め蓋を漂すに到れり
 一行之を如何ともする能はず漸く雨を樹下に避け雨水交りの雞肉を食せしは
 時に取りての珍味なりし

二十五日雨 樹根に腰掛けて漸く一夜を明したる坊等は今朝雨を衝て出發せん
 とせしも人夫行途の泥濘にして雨中到底歩し難きを説き雨の晴るゝを待て出發
 せん事を請ふて止まざれば暫らく其意に任せ先づ朝食の仕度を爲んとすれ共生
 憎途上は水の深きと七八寸にして竈を作るとも出来ず薪は雨に濡れ火を移すと
 能はされば止を得ず四名共に生米を喫し纒に飯を慰めり

午前十時頃稍々小降りとなりたれば何時まで斯てあるべきかと奮勇一番人夫を
 叱し雨を衝て發し幾多の坂路を昇降し途上赤土の爲め歩行頗る困難なりしも幸
 に無事サンヒローアンに着しガノ一家に投宿せしは四時過にして里程八哩餘

二十六日晴 曉起窓を排て望めば猛雨盆を覆すが如く四面驟風勢甚き凄し人夫
 畏縮行を肯せず三無は怒聲之を叱叱し鐵脚は温言之を慰諭す人夫合掌涙を流し
 て曰ふ貴僧等の命なれば大概の事は辭退仕らざれ共如何せん昨日にてすら困難
 なりし道路を今日此の雨を冒して出發したりとて到底一步も進む能はざらん萬
 一途中にて進退谷れば死を待つより外に致方なし何卒一日の御滞在を乞ふと實
 に彼等の言理なきにあらざるも行途を急ぐ我々なれば空敷此の山中に日子を費
 すに忍びず強て人夫を催し終に出發に決す總て戸を排て猛雨の中に飛び出した
 る坊等が其日の出立を見れば丸襟に腰衣を裾短かに一着爲し笠を以て荷物を掩
 ひ頭には大なる芋の葉を被り笠に代用し荒繩にて兩足の土附かすを堅く縛ばり
 滑走せざる用意を爲し蠟燭傘を疊んで杖となし車軸を流す雨中に突立ちし有様
 は實に此れ宛然たる一幅のポンチ畫も三舎を避ける許りなりし
 坊等が此の身仕度を見て人夫等も最早脱るゝに路なくと決心せしか今は一生懸
 命互に負けず劣らぬ勢ひにて夢中の間に漸く八哩餘の惡路を辿りボツク市に着
 せしは午後三時四十分にして市長カタノ氏の家投宿す當市はタイ人種のみ

て戸數十九頗る殷富なるが如し本日旅行の困難は昨日に勝る途上の赤土降雨の爲めに滑走し一步を誤れば輾轉幾尋の溪谷に陥る亦た知るべからず鐵脚は出發の際途中にて負傷或は氣絶せし事の爲めヨードホルムと寶丹とを用意せしを以ても如何に危険なりしかを證するに足らん
二十七日晴 前日來の降雨は跡なく晴れ一天さながら拭ふが如く雨後の新緑滴るに似て滿目の壯快言ふべからずヘット市より従ひ來れる人夫には此地にて暇を遣り通辯兼帶の爲め更に郵便夫にて多少老拙語を解するものを雇入れたり市長の請に依り今朝家族と共に食事を爲し午前九時十分發午後五時頃ラー市に着し市長の家に投宿す里程十一哩餘此内通過せし道路は重に山間を溪川に沿て行き途中五六の村落處々に散在するを見る就中坊等が驚るきしは割合に開け居る水田に河水を仕掛る爲め極めて巧妙なる水車を用ゆると之を利用して精米を舂くとの二事なりし山間僻地なりとて侮るべきものにあらず
二十八日晴 坊等が異様なる身成を見んが爲め早朝より多くの市民續々詰め掛け來る中に安南人杜生なるものあり少しく文字を知る無鳥土の蝙蝠先生頗る坊

等と相見せしを喜び支那字を以て筆戰を挑み或は惡詩を書して次韻を求る杯頻りに學者振り居れども坊等に取りては少しも面白からず好き程にあしらい漸く切り抜けて九時過き出發午後二時頃ラー村に着し村長の家に投す里程七哩餘全體此地は北緯二十一度十四五分の處なれば氣候亦た從て烈熱ならず磐谷近傍には四時絶へず螢を見れども漸く北して漸く少く其老拙より東京飯に入るや此旅行の節は皆無にして一點の螢火を見ず又た毒蛇は(丈七八寸位にして茶褐色を情び非常に激烈なる毒性を具ふ人若し此れに喫るゝときは即時其傷口より少くも五六寸の上部を切斷せざれば毒氣瞬間に全身に充ち終に治すべからざるに至る土人の無法者と雖も頗る之を恐る(暹羅國に多く毒蟲は老拙國に多し其東京飯に於ては虎豹を除くの外人畜を害する猛獸毒蟲等殆どなしと云ふ
二十九日曇 此日は佛國政廳の處在バンブー村に着する日なれば早發人夫を督し北方に向ひ山腹をブー河に沿て進みバクチヨン村に到てタイ河の右岸に出で小舟を以て之を渡り午後一時頃バンブー村に着し直に佛國政廳を訪ふ當時長官

は歸省中にして代理書記官サンチナクシー氏に面會旅券を示して具さに旅行の目的を述べ此日里程八哩餘

先是ソソ市に於て長官モンペーラット氏は信切にも坊等に教へて日お様貴僧等之れより東京河内府に出づるには水陸の二道あり若し陸路を行んとすればヘット市より分れて東方に進みシヨポーに出づべし又た水路を取れば同市より真直に北方バンブーに出で小舟に乗りてタイ河を下りシヨポーに到り此處より小漁船に乘代へ河内府に到るを願路とす擬て今日送費僧等は深山幽谷を跋渉して備に艱難を嘗められ陸路の旅行は最早充分の經驗もある事なれば寧ろ少しく迂路にてもバンブーに到て同地滞在の地方長官に依頼し官船に便乘してタイ河を下る方極めて便利ならんと坊等之を首肯せし故擬てこうサンチナクシー氏に就て舟便を與られんとを請ひしに氏は快く之を承諾して日お本日御用ありて上手に遣したる數艘の小舟は明後日頃歸る筈なれば夫れ迄余が官舎に止宿して相待たれよとサ氏の隣室を以て坊等の居と定む
今夜主人サンチナクシー氏外佛人二名坊等の爲めに小宴を開きサ氏の洋樂に

合せ他の佛人ガチオンキナく節を頓問なる大辭にて唄ふに連れ今一人は無暗に手を振て踊り狂ふ杯頗る興を添へり杯盤狼藉各々歡を盡して散せしは十時過ぎなり酒間彼れ等が暹羅安南に關して放言大語するど日佛兩國人相互に親睦を説くは例に依て例の如し

三十日發 午前近郊を散歩すバンブー村はタイ河の左岸にして北緯二十一度三十分東經四度三十分の處にあり水路東京よりルアンブラバン府若くは雲南省に通するの要地となす政廳は小丘の半腹を占め遙かに河水を瞰下す村中安南人の家屋十四五軒あり大概兵士の需用品を商ふ不完全なる兵營には安南兵三十名許りあるを見受けたり土人は此の近邊に三四百人の兵士屯在すると云ふも坊等終に之を發見し得ざりし監獄電信局等は政廳構内にあり今や此の地塞々たる寒村に過ぎざるも地勢の然らしむる處他年必ず小都會となるは敢て疑ふ處にあらず而して其物價の高直なる實に驚くべきものあり假令ば日本にて一箱二錢五厘の摺附木十八錢なるが如き其他推して知るべきなり
サ氏の云ふ處によれば之れより陸路東京河内に出るには早くも十二三日を費し

若し水路を取るときはシヨボ一迄四日間此れより小湊船に乗り代へ一日を要し都合五日間に河内府に到着すべしシヨボ一迄は全く山間の溪川を下るものにして處々に奔湍激瀨多く舟行餘程危険なるのみならず若し逆風に出逢へば殆んど舟を進ると出来ざる場合尠からずと

三十一日曇。サ氏の厚意により今朝出發の官船に便乗する事を許され加ふるに氏は懇切にも煙草マッチ牛豚肉野菜米鹽等四五日分の食料を舟中に積み込み呉れ用意充分に整ひたれば坊等は深く滞在中の厚情を謝し馳てサ氏等三名に送られ政廳を出で岸下に来れば三色の小旗を朝嵐に翻し待ち設けたる輕舟は郵書と坊等を乗せ舟子四人掛りにて早くも河岸を離れ遙に中流に出づサ氏等岸頭に立ち大音に二僧萬歳を呼ぶ坊等又た願てサ氏并に佛人萬歳を呼び互に帽と半カチーフとを打振り惜別の情を述べ坊等昨日迄峻山峻峯を攀ぢ連日北方に進みしが今日よりは舟に棹してタイ河を下り却て東南に向ふ昨は山今は水思へば人世行路の變化亦た如此ならんか風蕭々として征袂涼し亡國の山河何んぞなく哀れに亦た物淋し

タイ河其下を黒河と稱すは其源を支那雲南に發し東南に向て流るゝと數百哩タチカームの二大河を修め河内府の東北端を過ぎハイホン市に到て東京灣に朝す其幅廣き處は五六百間狭きも五六十間に下らずシヨボ一より上流は底深しと雖も奔湍處々にありて大船を遣るに便ならず其下流は些少の障害物なきも水淺ければ航行に苦しむ現今小蒸氣船は一週一回シヨボ一河内間を往復す坊等を乗せたる舟を「ピロック」と稱し木製此邊竹製の船あれば殊に斷り置くに於て長さ四間餘幅五尺に過ぎず之に竹製の丸き屋根を設け舳舻四挺の櫂を供ふ

此邊の溪川は幅百間を超ゆ流急にして舟行矢の如く奔湍激瀨に逢ふ毎に舟掀翻して進水舟中に打込み繩に之を脱れ出づれば忽にして突兀巖岩來り迎へ其危険なると坊等をして脇下に冷汗を流さしむ然れ共舟子の巧妙なる亦た驚くべきものあり此間一髮の危険をものどもせず左右櫂を繰り美事に乗り脱く手際中は中々の見物なりし

日中六々處の難場を無事に通過せし坊等一行は午後五時頃只有る河濱に立ち

寄り夕食を爲し更に發して八時頃上陸露宿を爲す舟小にして其中に寐る能はざる故なり本日水路二十八哩餘

四月一日晴大風 夜己に明け、れは露宿の用意を解き舟行中も夜間は適當の河濱に上陸竹にて編みたる舟の屋根を卸し竹木を立て、雨露を凌ぐ丈の掩ひを急造し此内に眠るを常とす舟に歸り直に解纜流を下る十時頃に至り遙に前方を眺れば岸上には數流の三色旗風に繼り多人數の往來奔走するあり河中には十餘艘の舟並び泊す坊等何事かと恠み近きて能く見れば中に三名の洋人あり坊等舟子に命じ舟を岸邊に寄せしめ以下河濱を營するは河の兩方岸にあらずして水涯より山麓迄十四五間又は三四十間砂地のある處を云ふ鐵脚上陸して彼の洋人に面會せしに彼等は皆佛國人にして只官私用を帯びルアンブラパン府に行くものなりと云ひ其詳細を語らず鐵脚亦た強て之を尋ねず早々告別して舟に歸らんぞすれば彼れ數本の葉卷煙草を出して鐵脚に喜捨せられたり思ふに彼三名の佛人は通常人の服裝を爲し可成黙して何事をも言はざれども其言語動作より推測して必ず軍人と見しは併目か十二時と思ふ頃又々下流より十一艘の舟溯り來

る此れにも亦た鐵脚に三色旗を懸し先登の舟に三名の洋人ありて頻りに他舟を指揮しつゝあり舟子の掛け聲いと勇ましく奔湍に逢へば相集て一艘毎に或は指ひ或は綱にて引き岩に激して迸る水波を物ともせず難處を越ゆる有様は壯快言はん方なし此一行亦タルアンブラパン府に向ふ佛國軍人なるか

看よ東方の雲脚漸く急を報し來り暹羅王弟陸軍大將クロマプテ親王殿下は去年より歐洲を巡廻し王太子亦た是より先き英國に遊學せらる加ふるに國王殿下は來る四月を以て英國に臨幸せらるべしと聞く此れ素より英皇六十年の祭典を祝する爲めなりと言ふも其裏面の魂膽は豫め知るべきものあり鐵脚は一昨三十日バンブー政廳に於てハイホン新聞と稱する佛字新聞を讀みたるに其紙上馨谷通信を掲げて曰く

(前略)暹羅國王が來る四月英國に赴かるゝ其名儀は祝賀に托するも雖も實は英國の力を借り暹羅に於ける我が佛國の權力を滅殺せんが爲めにして佛人たるもの苟も之を閑閑視して可ならんか(下略)

鐵脚此一項を擧げ佛人某氏に糺す氏笑て曰く果して如此なれば此れ我々が兼

て待ちつゝある處にして彼れ喧嘩仕掛を以て我を挑む時機なる哉と
 想ひ來れば當年二月安南東京總督は柴昆を経て目今磐谷に滞在し居り老摺總
 督は當月本國の急電に接して倉皇巴里に歸り今又た此の二群の佛人ルアンブ
 ラバン府に行くを見る蓋しル府は佛國が南暹羅を窺ふ山中の根據地なるを忘
 るべからず嗚呼霜を踐んで堅氷到る這中の消息知る人ぞ知る

午後逆風大に起り舟を遣る能はず只有る河濱に繫泊す時に午後一時過ぎなりし
 水路十二哩余

半日の滞在無聊に堪へず上陸して此近邊を探検するに道路は溪川に沿ひたる
 山腹に造り流石は數年前より佛國人の經營せるもの丈けありて其結構頗る見
 るべきものあり山中に入れば名も知れぬ奇木枝を交へ鬱葱として晝尙ほ暗し
 鐵脚思ふに此無代價なる奇木を斬伐しタイ河によりて東京ハイホンに下し之
 を支那若しくは日本に輸出すれば或は奇利を得る事あらん尙ほ其運送の法等
 は他に述べる所あらん

二日半晴 夜來の逆風漸く静り午前八時頃解纜タイ河を下る十時過ぎに至り大

雨俄かに至れ共幸に風なき爲め舟を遣るに不便を感せず河上の景況畧ほ昨日に
 等し此日晴雨定まらず薄暮ウエン村に着し鐵脚は直に上陸佛國政廳を訪ひ旅券
 に證明を乞ふ主人を併せて佛人五名卓を圍んで會談酬にして其二名は正服を着
 したる軍人なりし例により茶菓の饗應あり長官曰ふ舟は豫定より半日以上後れ
 居ればシヨボー發の漁船に間に合せん爲め徹夜行を命ずべしと仍て鐵脚は暇を
 告げ舟に歸りしに果せる哉政廳の使來り夜を冒して出發すべきを舟子に命ず時
 に舟子等は今夜此の地に泊するの見込にて已に上陸炊事の準備を爲せし折柄な
 れども官命是非なく碗繫諸舟の點火をサモ浦山しげに打豚め不性不精に舟を出
 せしは夜八時頃なりし

ウエン村はタイ河分流點の勝地を占め戸數二十二三兵營あり目下は尙ほ見る
 に足らずと雖も此れ亦た他年市街の開るに至れば山中の一繁華地となるべし
 官命により無理に出發せし小舟も陰雨の爲め満天磨墨を流せし如く暗夜の進行
 極めて危険なれば若し萬一誤ちあらん事を恐れ坊等強て舟子に勧め纜に七八丁
 下りて露宿を爲せり日行三十餘哩

三日晴 此日早朝より一天晴れ渡り又た昨日の比にあらず行々兩山の風景を賞し愉快言ふ可からず坊等舟中にて身軀を洗淨し法衣を更め東方に向て神武天皇を遙拜す夕方砂上に露臥す里程大凡三十五哩計

四日晴 午後三時頃シヨボー市着直に政廳に赴き長官パツルイツクス氏を訪ひ河内行瀛船の有無を尋ぬバ氏曰ふ残念なる哉今朝七時已に出發せり次回は今より五日の後なり貴僧等之を待たるゝか將た其前に便船あれば出發せらるゝや鐵脚仍て三無と協りバ氏に向ひ瀛船の來るを待たす便船次第可成速に河内に赴き度由を告げれば氏亦た快く之を諾し幸に明日當地より彼處に行くべき安南船に命じて貴坊等を安全に送り届けしむれば夫れ迄は政廳構内に止宿せらるべしとの事にて兵舎の二階を以て坊等の居室に當てられたり水路二十五哩計

此夕バ氏の紹介にて新任老總總督ラリス氏及び隨行軍醫秘書官等に面會すラ氏は年齢五十計軀幹肥大容貌嚴峻一見常人にあらざるを知るバ氏は三十七八歳中身瘦顔音吐清朗能く談す須臾してラ氏去てバ氏が議論の火の手頗る盛となりボーイに命し酒菓を持ち來らしめ且つ飲み且つ談す其要領は例の如し終に鐵脚

に迫り殊更に職を裝て曰ふ君は必ず軍人にして僧侶に假裝せしものならむ君が行行李中に軍事的觀察の好材料を筆記せし手帳を收るや疑を容れず然るにてもヶ様の山奥迄君等を派遣する當局者の注意實に感服に堪へず宜なり日本軍事の進歩殿々として馴馬も尙ほ追ふ能はざるを君等の艱難御察申す最早隠さず明し玉へど此の意外なる難問に鐵脚頗る迷惑と爲し不完全なる佛語を以て頗りに其の誤察を辯明したれどもバ氏の劍幕中々銳ければ眞面目の辨解は却て無益なりと察し漸く話頭を他に轉し二三笑談の後辭して居室に歸りし頃は衛兵が十二時の交代を爲す時なりし

シヨボー市は坊等が東京領に入りてより始めて見る處の繁華なり北緯二十度五十分東經百五度十分にしてタイ河の左岸に在り戸數六十餘兵營郵便電信局監獄等あり不完全ながら市街の體裁を具へ二三の酒家洋品店を見る佛國官吏の此地にあるもの七名なりと云ふ此市より河内府迄の瀛船は朝に發して夕に着す重に郵便用にして貨物は多からず一人の貨銀上等二圓下等五十錢

五日晴 今朝老總總督の一行ルアンプラン府に向ひ出發し午後三時過き坊等

を乗せたる安南船はシヨボ一を發し東南に向ひ急流を下る船の長さ八間餘幅二
間位ひ四挺の櫂あり舟子四名之を操る滿船の積荷は悉く魚茶なりし船の内部稍
々廣ければ起居に便利にして夜間亦た船中に睡眠し露宿の苦を脱れしは頗る仕
合せなり此夜岸下に繫泊す里程十五哩許
六日雨 濛々たる陰雨或は降り或は止む河幅は河内に近くに從て廣く河床は河
岸の土壤崩潰する爲め年々淺くなるも奔湍なきを以て船を遣るに便なり此邊降
雨の節は河水汎濫して田野一面の水海と爲ると云ふ行程大凡三十二哩
七日雨 ジヤンピエン村はタチタイ河相合する處にあり河内よりラチカイに到
る遠船は此處にてタイ河に分る今日里程三十哩位
八日半晴 微風時に來つて冷氣秋の如し此邊にて尤も奇なりとするは竹籠舟な
り暹羅の邊土老樹の山中採にては籠に松脂を塗り水桶若くは釣瓶に代用するも
のを見受けたりしが今は一步を進め竹舟を見る其造法竹を編んで長二間巾四五
尺斗りの船を作り此の内外に松脂を塗抹するものにして帆樞等悉く竹にて製す
故に體量軽くして轉覆の憂ひなく又た何處にも持ち行に便なり其竹帆を建て巧

に竹籠を操て竹舟を遣る處は中々に面白し
本日は是非とも河内府に着する豫定にて舟子等必死勉強したれ共途中誤て淺瀬
に乗り上げ二時間餘も引針に手間取りし爲め終に目的を達する能はず螢火の如
き河内市の電燈を遙に眺め例により船を繋ぎしは薄暮の頃なりし里程二十八九
哩
九日半晴 味爽雨を衝て發し午前八時頃無恙河内埠頭に着し直に上陸すれば坊
等の風体頗る奇異なる故往來の人歩を止め見物山の如し坊等殆んど歩行に苦む
適ま安南の巡查來り何か尋る様子なれども言語不通にして要領を得ず鐵脚仍て
手帳を出し鉛筆を以て我々は日本の僧侶なり希くは當地佛國政廳へ案内ありた
しと書き示しければ彼れ漸く首肯し直に人力車を呼び坊等を乗せ導て警察本
署に到る坊等署長に面會して來意を語り更に政廳に赴き書記官ロハ氏に旅券を
示し再會を約して日本人和田氏の家に投宿せしは午前十一時頃にして水路五哩
許
嗚呼坊等が客歲十二月一衣一鉢飄然として磐谷を去り遠征の途に上りしより日